
君を忘れない ~ I Remember Clifford ~ vol.1

北川 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を忘れない I Remember Clifford
vol.1

【Nコード】

N3038N

【作者名】

北川 圭

【あらすじ】

二十歳になったばかりの売れないトランペッター高橋一樹は、ライプハウス『ジャムズ』に居候の身。

しかし彼には、ある夢を断念せざるを得ない事情があった。

音楽一家に生まれながらも孤独感を味わっていた一樹を、他人ながら家族同様に温かく包んでくれたのは……マスターの勇次と、店を切り盛りする娘の桃子とちだった。

家族との葛藤を乗り越えつつも、ジャズ奏者としての道を歩む一樹の成長ストーリーです。どうぞお楽しみ下さい。

もう数年前になりますが、某ライトノベル系小説賞に取り敢えず Vol.1 だけを出しました。結果は一次予選通過で終了^^;

その先はないんかい!?

ただ今、Vol.2を自ブログにて再録連載中。

#イントロダクション

誰も君を忘れない

いつまでも覚えていてるだろう

君の音は心に残り

忘れることはないだろう

君は今でもここにいる

いつまでもいつまでも

アイ・リメンバー・クリフォード

僕は君をけっして忘れない

「クリフォード・ブラウンって、知ってる？」

銀色に光るトランプペットを柔らかい布で磨きながら、篠原が一樹にそう問いかける。

昼間の光を浴びたジャムズは、ライブハウス特有のいがらっぽさもいかがわしさもすべて消して、まるで居心地のいいカフェテラスにでもいるような錯覚を一樹に感じさせていた。

もう二度と着ないであろう音楽高校の制服を、脱ごうかどうしようか迷いながら、一樹はジャムズの固いイスに腰掛けて、篠原の次の言葉を待った。

もう二度と、そう、二度と自分は楽器を吹けないだろう。
すべてが終わり、時が止まり、今は。

うつむく一樹に篠原はそっと語りかける。

「アメリカのジャズトランペッターなんだけど、ハードバップを支えた一人と言われる名プレイヤーでね」

「アイ・リメンバー・クリフォードなら、ぼくもこないだ聴いたよ」
そのCDならマスターが貸してくれた。ささやくようなトランペットの音色。誰が吹いているのかも、誰が作った曲なのかも知らない。でも、クリフォードと言えばきっとその曲の作者に違いない。

大学のジャズ研所属でマニアを自認する篠原にちよつとした対抗意識を持って、一樹は口を挟んだ。

でも、そんな一樹の生意気な口調に、篠原はほんの少し寂しげな表情を返したただけだった。

通りに面した大きな窓から、さらにその向こうの遠くを見つめる。
一樹も思わずそちらに視線を送る。

「交通事故で、たった二十五歳でクリフォード・ブラウンは死んだんだ。アイ・リメンバー・クリフォードは彼の友人が追悼のために作ったバラードだよ」

「そう、なの？」

「楽器を手にしてからたったの十三年間しか経ってない。ほんの数
年の活動期間とわずかなリーダー作。それでも世界中のジャズファンが、彼の演奏を今でも愛している」

「……」

「音楽は残る。人の心に。誰もが忘れない」

「うらやましいな、その人が」

ゆっくりと篠原が向き直る。優しい目が微笑んでいる。

「君も……」

篠原は言葉を切って、また窓の外を見やる。何？何なの？一樹は不思議そうに彼に問い続けるが、何でもないよと笑うばかりだった。
もっじきマスターも桃子も帰ってくるだろう。

開店前の静けさが、ジャムズを包み込んでいた。

#1

「ちよつと、一樹！早く帰ってきたのなら店手伝ってちようだい」
ジャムズのドアを開けるか早いか、一樹に向かつて桃子の大声が飛んできた。ちようどランチタイムの混雑が始まった時間帯だった。帰る時間を間違えた、一樹はほんのちよつぴり後悔した。

下北沢の大きな通りを一本外れた一角に、その店はあった。おおよそライブハウスらしからぬ、通りに面した大きな窓と、木製のドア。その前にはご丁寧に手書きのメニューボードまで飾られている。シェフが前島になってから、ジャムズのランチはこのあたりでは安くておいしいと、わりと評判になった。近くの子会社のOLたちが列を作ること多い。ランチタイムのジャムズは桃子が仕切っている。普段はそこにバイトが二人、フル稼働してやつとだ。

「おれ、仕事帰りで疲れてんだけど。朝っぱらから一応トランプト吹いてきたんですけど、あの」

悪あがきとは知っていたが、一樹は弱々しく桃子に向かって抗議してみた。

「そういうセリフはね、二十歳にもなつて定職もないヤツには似合わないの。つべこべ言わずにほら、働く！」

桃子の声が冷たく響く。一樹は、整った顔を隠すかのようにかけていたサングラスをとると、ため息をついた。七つ下ということをし差し引いても、桃子になうはずもない。

「マスターは、いないの？」

「この時間はどうせパチンコかスロットよ。父さんはね、昼間は本当に役に立たないんだから。はい、早くエプロンして」

桃子にせかされて一樹はあわててフロアに入る。片手ではどうしてもエプロンのひもがうまく結べない。それに気づいて、桃子が忙しい手を止めてさつと一樹の背後に回る。

「動くな。全く世話の焼ける」

「すみません。働きます」

「ほんとよ、食費分くらいは働いてちょうだいよね」

一樹はあわてて、何か言いたげな女性客の集団に向かって、注文票を持って近づいていった。こういう時は営業用のスマイルを浮かべることだってちゃんとできる。ご注文は？お決まりですか？早くしてくれ。

新しいバイトだろうか、若い男の子が忙しそうにフロアを駆け回っている。小柄でやや小太りな体型だが、動きは軽快だった。黒縁のメガネが曇るのも意に閑せず、せっせと料理を運んでいる。それを押しつけるように、一樹は厨房に向けて声を張り上げた。男の子が顔をしかめる。一樹は全く気にしていなかった。

「何なんですか、あんた！」

「こりゃ失礼。こっちも急いでんだ」

にやりと笑って一樹は注文票をカウンターに投げた。それをあわてて男の子が受け止めた。

「うまいじゃん」

「なっ！」

厨房の前島が手際よく料理を作っていく。湯気の立ったパスタにサラダ。綺麗に盛りつけられたそれらを、桃子が手に取る。それを奪うように、

「あっ、ボクそれ運びます」

と男の子があわてて声を掛ける。

「ありがとう。じゃあ五番にお願いね」

「まかせてください。ちよっと、どいてくださいよ！」

狭い店内だ。動線がぶつかり合う。一樹は手持ち無沙汰でカウンターにもたれかかった。

「手が空いてるんだったら、これ運んでください」

男の子が厳しい声を投げつける。コーヒーカップの皿が視線の先にはあった。

「えっー、おれ箸より重い物持てない」

一樹は近くにあったマドラーをもてあそびながら、小馬鹿にしたように男の子に向かって言った。彼が大声を出す。

「コーヒーくらい運んでくれてもいいじゃないですか」

「だってえ、四つも載ってるしい。無理無理」

「あんた、いいかげんに」

男の子は腹に据えかねたかのように、背伸びをして一樹に食ってかかった。そうでもしないと、小柄な彼のことだ、一樹の肩ぐらいにしか届かない。

「ああ、いいのいいの、こいつのことはほっといて広大くん。一樹、彼の邪魔しないでよね。いいからレジ入ってちょうだい」

桃子が見かねて声をかける。それに生返事をして一樹はレジに向かった。

すつと鼻筋の通った整った顔立ちに、薄い形のよい唇、くつきりとした二重瞼に黒くつややかな瞳が光る。栗色の髪は真ん中から自然に分かれ、サイドに流れていて、一樹の輪郭をやさしく包んでいた。細身で背の高い一樹がにっこり愛想笑いを浮かべると、支払いをしようとレジに並んだOL二人組は、頬を赤らめどきまぎしていた。

ランチタイムが終了して、最後の客がドアの向こうへ消えていった。

古株のバイト、結香が準備中の札をかけている。もう時計は三時を回っていた。

「今日の賄いはシェフ前島の特製チャーハンですよー」

「やったあ」

「今日は特別忙しかったねえ。たくさん食べてね。ほら座った座った」

陽気なシェフが気さくに声をかけて回る。広大、結香、そして桃子が順に席に座る。

「一樹くんも今日はお疲れさま。いやあ助かったよ」

シェフは、所在なく突っ立っている一樹の肩を親しげに叩いた。

「何が助かったんですか？その人何にもしてないじゃないですか」
広大が険のある声で前島に異議をとなえる。かなり頭に来ている様子だった。

「ねえこの子、誰？」

その声にわざとらしく、さも今気づいたかのように一樹がからかい気味のセリフをかぶせる。ポケットからタバコを取り出そうとして、結香から止められた。

「昼間のジャムズは禁煙です。っていうか一樹ちゃん、タバコやめたら」

「せっかく二十歳になつて堂々と吸えるようになったのに、誰がやめるか。だからさ、このちびっこいヤツは誰かって聞いているの」

「ちびっこいじゃありません！佐藤広大です！」

大声で広大が一樹に向かって言い返す。

「もういいじゃない。食べましようよ。あのね一樹、この子は先週から来てもらっているバイトの広大くん。あんたも突っ立ってないで早く座りなさいよ」

桃子があきれ気味に一樹に説明する。

「この人は誰なんですか？」

広大は雇い主である桃子に助けを求めるように、顔を向けた。

「ああ、ごめん。言つてなかったっけ。こいつはうちの居候、一樹」

「居候つて、一緒に住んでいるんですか!？」

広大が思わず桃子と一樹の顔を見比べた。

「いったただつきまーす。さあ食べましようね。ねーみなさん」

結香が微妙な空気を変えようと、わざと大きな声を出した。それにつられて皆も何となく食べ始める。一樹も一番端のいすに座つて、スプーンを持ち上げた。

「まあ、そういうわけだ。バイトのお兄ちゃん」

一樹が偉そうに、持っていたスプーンを振り回す。

「何いばつてんのよ。生活費も入れない居候のくせに」

桃子が冷たく言い放つ。それに一樹は舌を出して見せた。

「ホントによく働いてくれますよね、広大くんは。どっかの誰かさ
んと違って」

「いやあ、ボクなんか全然」

「でも、一週間でもう仕事の流れもつかんでるし、助かるわよ」
女性二人に持ち上げられて、広大はさかんに照れていた。

「良くやってくれてるよ広大くん。もう少ししたら厨房も手伝って
みるかい？」

前島までもが温かい声を広大にかける。いすにふんぞり返ってい
る一樹ひとりがおもしろくないと言った顔つきだ。

「ありがとうございます。今日もたくさん入っていましたね」

「そうね、一年前にランチを始めた時はどうなるかと思ってたけど、
これだけお客さんが来てくれるとかなりいい雰囲気よね。ただ」

言いよどんだ桃子に皆の視線が集まる。

「いくら昼で利益が出ても、結局夜のライブで赤字を出しちゃうか
ら。夜の部がかなり負担になっていることは事実よね。ちょっと、
ふざけてないで早く食べなさいよ一樹」

「ジャムズがライブ辞めたら、ジャムズじゃなくなっちゃうじゃん」
ふてくされたような声で一樹がつぶやく。それに覆い被せるよう
に桃子は続けた。

「だったら、夜も採算が取れるようにお客を呼ぶか、昼間もちゃん
と働いて売り上げに貢献してちょうだい。父さんも一樹も、うちの
男どもと来たら二人して趣味に走って、ちっとも儲からないライブ
ハウスなんか続けて」

「桃子さんはライブハウスに反対なんですか？」

結香がみんなにアイステイーを配って歩く。一樹はまだふくれて
横を向いたままだ。

「前島さんに頑張ってもらって、このままイタリアンの店にしちゃ
った方が、どれだけいいかって思うことはあるわよ」

「でも私はジャムズのライブ好きですけどね」

前島がチャーハンをほおばりながら無邪気にそう言った。

「そりゃ、チャージは安いし、常連ばっかりでお金は取れないし、
ただどライブの質は落とさないところがマスターの心意気って言う
か、ね」

「心意気で採算が取れるならいいですよ、全く」

桃子は、自分の父親と変わらないくらいの歳のこのシエフに全般
的な信頼を寄せているようで、ため息をつきながらそう愚痴をこぼ
した。前島は、若き経営者につこり笑って頷き返す。定年まで勤
めていたホテルに出向き、彼を口説き落としたのは桃子なのだ。

「このチャーハンおいしいねえ。ねえシエフ？」

一樹が桃子の頭越しに前島に話しかける。前島は満面の笑みを浮
かべた。

「けっこういけるでしょう？自信作なんですよ」

「前島さん、中華もいけるとはすごいね。さすがジャムズの看板シ
エフ。これメニューに入れたら」

一樹が行儀悪くスプーンを振り回しながらそう続ける。桃子の方
には顔も向けようとしない。

「あなたにメニューの心配までしてもらわなくて結構。それより仕
事見つかったの？」

そんな一樹に、桃子は冷ややかに言い放つ。

「仕事してないんですか？一樹さんって」

鬼の首でも取ったかのように広大が一樹に向かって言った。一樹
はむっとして言い返す。

「してます。ちゃんとしています。今日もしてきました。おれはちゃ
んとスタジオ行って、そりゃもう真面目にラッパ吹いてきたんです
から」

フリーのミュージシャンなの、一樹ちゃんは。結香が取りなすよ
うに口を添える。しかし桃子は容赦がない。

「フリーって便利な言葉よね。ニートと何が違うのかしら」

「桃子さん」

結香が引きつった笑いを浮かべる。一樹は口の中でぶつくさ言っ

ていたが、気を取り直して他の連中に懸命に自分をアピールし始めた。

「もつさ、君たち何か大きな勘違いしているよね。サイン貰うなら今のうちだよな。おれはね、今日も芸能プロダクションの偉い人と打ち合わせをだね」

「何、一樹くんデビュー決まったのかい」

前島が明るく声をかける。本当にうれしそうだ。それに一樹はにこやかに答える。

「いや、デビューってほどじゃないんですけどね。水面下でこう着々と準備してるっていうか、新ユニット結成っていうか。おれも一応その一人ってことになってまして」

「水面に潜ったまま沈んでいくことも多いのよね、その業界って」
桃子がとどめを刺す。

ぶすつとした表情で、一樹はチャーハンの最後の一口を放り込んだ。

「一樹さん、手伝ってるんですか邪魔してるんですか」
「手伝ってるよーん」

そのいい加減な返事が広大をさらに刺激した。キツと一樹を見据えると広大は彼の手にしていた皿をひったくった。

「もういいです。ボクがやりますから」

店内は相変わらず混雑していた。昼時の二時間、それが一日のうちの勝負だった。

「ただでさえでかいんですから、邪魔しないでください」

そんな広大のセリフに肩をすくめると、一樹はカウンターに向かった。百八十五センチ、その長身を少し猫背気味に曲げ、髪をかき上げる。そんな仕草が板に付いていた。広大にすれば嫌みに感じられるのだろう。大げさなため息をつき、その場を離れる。

新しい客が入ってきた。こちらへどうぞと一樹が案内をする。他のスタッフはできた料理をサーブするのに忙しい。辺りを見回し、

あきらめたように一樹が水の入ったコップの盆を右手に持った。そのままさっきの客へと運ぶ。しばらく躊躇していたが、慎重な面持ちで左手でコップをつかんだ。不意に客が手を上げた。はっとしたように一樹が手を引っ込める。

ガチャン。

コップの一つが音を立てて床へと滑り落ちた。

「あっ！」

「何やってるんですか。お客様、大丈夫ですか」

広大が飛んできた。ガラスのコップは無惨にも砕け散っていた。あわてて広大がほうきと雑巾を持ってくる。一樹は、それを呆然と立ちすくんだまま見つめていた。

「一樹さんはどいてくださいよ。お怪我はありませんか。お水がかかったのではないですか」

客は恐縮して大丈夫と繰り返した。広大はてきぱきと砕けたコップを片づけにかかる。ようやく思い出したかのように、申し訳ありませんと一樹が頭を下げた。常連の女性客は笑ってそれに答えた。

一樹は青ざめた顔つきのまま、左手をさすっていた。

仕事増やさないでくださいよ、押し殺したような声で広大がささやく。それに返事をするでもなく、一樹は黙って立っていた。

客足が途絶えたところで、広大はガムテープを持ち出して、ラグマットに入り込んだガラスの破片を丁寧に取りだした。テープの輪っかを作って、それを一樹にも差し出す。

「破片が残っていたら危ないですからね。そっちお願いします」

「いや、おれは」

「そのくらいやってくださいよ。重い物は運ばない、サーブは片手で面倒くさそうにしかやらない、拳げ句の果てはコップまで落とす。もつと真面目に働いてください」

破片を丹念に取りながら、広大はぶつぶつと文句を言った。

「広大くん、一樹ちゃんはね」

「いらんこと言うな！」

言いかけた結香に一樹は短く言葉を投げつけた。あまりの剣幕に結香が息を飲んだ。

「何で一樹さんだけいつも特別待遇なんですか。ボクばかり目の敵にして。別に働くことは好きですからボクはいいんです。でも」

広大の愚痴は止まることがなかった。日頃の一樹の態度も目に余っていたのだろう。この時とばかりに言い続けた。

「タバコ買ってくる。悪かったな少年。結香、いらんこと言つなよ」それを遮るようにして一樹は広大の頭に手をやった。広大はバカにされたと思っただのか、上目遣いでキツと一樹をにらんだ。肩をすくめて一樹はドアを開けて出ていった。

「何も言いませんよーだ」

後ろ姿に向かって結香が顔をしかめた。何なんですかとげげんそうに広大が頭を上げる。

そこに前島がケーキを持ってやってきた。

「試作品ですよ。さあ召し上げられ」

わあ、と結香が歓声を上げる。一樹と入れ違いにちょうど帰ってきた桃子が、お茶を入れるわとカウンターに入ってしまった。ため息をつきながら広大が立ち上がる。

ケーキは桜色のクリームに彩られていた。緑のミントが添えられている。

「桜餅をイメージして作ってみたんですがね」

皆を見回しながら、にこやかに前島が言葉を続ける。

「ボク、一樹さんに嫌われているんでしょうか」

肩を落として広大がテーブル席に座った。結香と前島が目を見合わせる。

「何でそんなこと言うの？言いたいこと言い合って何だかんだといいコンビだと思うけど」

紅茶を入れながら桃子が言う。

「そうでしょうか。ボクの仕事の邪魔ばかりして一樹さんはちっとも働こうとしないし、今日だって注文取りだのレジだの楽な事ばっ

かり。何で一樹さんだけそんな」

「仕方ないのよ、一樹は」

言いかけて桃子は言葉を飲んだ。どうしたものかと思案顔だ。前島が何の気なしに桃子の後を続ける。

「左手が不自由だからねえ、一樹くんは。片手じゃ重たい皿は運べないだろうしねえ」

「えっ!？」

広大の顔色が変わった。目を見開いている。

「あれ、気づかなかった？やっぱり隠しているのかねえ。一樹くんあんな風になっているけれど、あれで結構気にしているんだろうねえ」
「どういうことですか、左手がって」

しょうがないなあ、内緒よ、桃子があきらめたように広大にそう言う。

「病気でね、左手のここから先が動かないのよ。残った親指と人差し指も握力が極端にないらしいし」

「だってトランプペッターなんでしょう？いつもトランプペット持っているんじゃないんですか」

「自分の力じゃ持てないのよ。特注のプロテクターでこうやってベルトをぐるっと回して留めてあるだけ。でも内緒にしておいて。これ言つと一樹怒るから」

「何で、何でもっと早く言ってくれなかったんですか。ボク知らなくて酷いことたくさん言ってしまった」

みるみる広大の顔が曇った。肩を落とすし、しよげかえっている。

「だから、そうじゃないんだってば。一樹はそうやって特別扱いされるのがイヤなのよ。広大くんから小言言われて普通に接してもらって、あれはあれでうれしいんだと思うよ」

「そんな」

「気にしないで、これからもいつもみたいにかんがん言っちゃっていいから。一樹が働きの悪い怠け者なのは元々の性格なんだから、ね、結香ちゃん」

桃子がにつこり結香に笑いかける。結香もここぞとばかりに大きくうなづく。

「ボク、謝らなくちゃ。一樹さんにきちんと謝ります」

「あのねえ」

結香がため息をつく。それじゃあたしたちがしゃべっちゃったのばれちゃうじゃないと言葉を続けた。

「でも」

いいのいいの、桃子が手を振る。これまでどおりに接してあげてと。

「ケーキは取っておいてあげましょうかねえ。一樹くんも甘い物には目がないから」

前島ののんびりした声が緊張した空気をほぐす。

広大は神妙な顔つきで紅茶を飲んだ。

#2

ジャムズは夜を迎えて表情を一変させていた。

間接照明が、ベーゼンドルファーのグランドピアノを照らし出す。

リズム隊の連中が機材のセッティングを終え、思い思いの場所で休憩を取っていた。

ジャムズのライブ。

小さなハコながら有名どころのジャズプレイヤーを呼んでくることで名が知られている。

マスターの勇次がにこにこしてカウンターへ立つ。この人は昼間はまるつきり働かないが、夜ともなるときびきびと立ち動き、生き生きしている。プレイヤーからは厚い信頼を受けている。

紫煙がもうもうと立ちこめる。ざわめきがBGMだ。

広大は場違いなところに来てしまったという顔つきで、不安げにきよろきよろと桃子の姿を探した。

「いらっしゃい。何を飲む？」

後ろから声をかけられ、広大は飛び上がった。いつもの見慣れた

ジャムズはここにはなかった。そして桃子もまた、夜の照明の元ではぐつと大人びて見えた。

「あ、あのボク」

「そんな緊張しなくて大丈夫よ。毎日通っている職場じゃない」

桃子がたまりかねて小さな笑い声を立てる。そんなに自分は硬直していたのか。顔が熱くなった。

「チャージはおいくらですか。先払いなんですか」

ふと財布の中身が気になった。ライブハウスに来たこと自体、広大にとっては初めての体験だった。こんな所で酒を飲んだら、一体いくらかかるのか。

「従業員からお金は取れないわよ。大丈夫、今日はマスターがおごるから。ね、父さん」

昼間ちつとも家に寄りつかないマスターは、夜ともなるとこんなに頼もしくなるものか。笑顔でうなずくと、広大に向かって水割りを出した。

「気にしないでいいよ、広大くん。好きなだけ飲んでね」

「そうはいきませんよ。少しでも売り上げに貢献しなくちゃ」

「じゃあ、次からは払ってもらおうから、今日は私の招待って事にして」

桃子が艶っぽく微笑む。広大はどぎまぎした。

がたがたと音を立ててフロント隊のセッティングが始まった。その中に、一樹の姿があった。

ミュージシャンの中でもその長身は目立っていた。

少し猫背気味に、髪をかき上げて。

広大は昼間の話を思い出していた。自然と視線が手元に注がれた。革のプロテクターをしつかりとはめ、楽器に巻き付ける。その動作に不自然さはない。確かによく見ると、左手の三本の指が外側を向いている。力が入らないのだろうか。でも言われなければ気づくことはなかった。

ピアノがぼーんと一つの音を立てた。

トランペットとサククスとが、その音に同調するようにロングトーンを出す。

広大の素人の耳にも、それはぴったりと重なり、澄んだ音を奏でていた。

照明に照らされたステージの中央で、一樹は圧倒的な存在感を醸し出していた。他の百戦錬磨のプレイヤーとも遜色がない。立ち姿だけを見れば、とても二十歳には見えなかった。

普段の昼間での仕事ぶりが嘘のようだ。

不意に速いパッセージのユニゾンで曲が始まる。

サククスの絡みつくようなフレーズに、一樹のトランペットが全く同期している。右手の指の動きが速すぎて見えない。唐突にユニゾンのフレーズがとぎれ、そのままトランペットのアドリブソロになった。低音で唸るようなメロディーを歌ったかと思うと、急に駆け上がりハイノートの美しい旋律を伸びやかに吹いている。自由気ままに気持ちよさそうに身体を揺らし、リズム隊のカッティングの動きに身をゆだねている。ぱーんと一つハイノートを決め、サククスへと受け渡す。大きく一つため息をつき、笑顔を見せる。

何も知らない広大でさえも、一樹の姿から目を離すことができないでいた。

息を詰めて見ていたようだ。思わず広大も大きく息を吐いた。

「どう？広大くんはジャズは初めてなのよね」

「はい、すごいです。かつこいいです。一樹さんも本当にかっこいいです。ボク見直しました」

桃子がまた乾いた笑い声を立てる。変なことを言ってしまったのかと急に焦る。

「吹いてる時はちょっとはましなのよねえ。性格と音は比例しないのが難点なだけだ」

曲は続いていた。サククスの後はギターへ、ピアノへと次々にアドリブを回していく。はつきり言ってどんな曲なのか広大にはわからなかったが、まるで生き物みたいだと感じていた。うねうねうこ

めく巨大な生物が、呼吸をして身体をくねらせるように、曲自体が鼓動を発していた。

ぱっと一瞬静寂が訪れる。

次の瞬間、全部の楽器が一斉にテーマに突入した。

店全体が一つの楽器のように響く。

そして始まった時と同じくらい唐突に、曲が終わった。

拍手が沸き起こる。

我に返って広大は、店内を見渡した。今夜は入っている方だと桃子が言っていた。そう広くない客席の八割は埋まっているのか。

自分がずっと立っただままでいたことによく気づいた。カウンター席の端に腰を下ろす。マスターが二杯目の水割りを広大の前に置いた。

「一樹くんはきつと今にジャズの世界で有名になっていくと思うんですよ。広大くんはどう思います？」

「そうですね。一樹さんならきつとそうなれると思います」

お世辞でも何でもなく、心から広大はそう感じた。

「でも今はジャズだけで食べていくのはとても難しい時代なんです。若い人が生活が成り立たないんですよ」

売れる音楽ではないから、マスターはそう言って苦笑いをした。そういうものなのか。

「でも一樹さん、デビューが決まってるようなことを言っていますよ。たよね」

「ジャズ、ではないでしょうね。バックバンドだと本人は言っていましたよ」

人の間を縫って一樹がこちらに歩いてくる。背の高さでひときわ目立っている。広大は何を話せばいいのか、どんな顔で一樹に向き合えばいいのかわからずにいた。

「ジンフィズちょうだい、マスター。いやあきつかった」

ランチタイムのジャムズでは、ついぞ見たことのないような笑顔だった。右側の頬にほんのちよつとえくぼができる。薄暗い照明の

元でもそれが陰を作っていた。

「何だっけ、少年。えっと確かコンタ」

「こうだいです！毎日一緒に働いてるっていうのに。ボクの苗字ちゃん覚えてますか！？」

でもやっぱり一樹は良くも悪くも一樹だったようだ。相変わらず憎まれ口を叩いている。幾分ほつとしながら広大も言い返す。いつも言われっぱなしじゃられない。いすから立ち上がり気持ちつま先立ちし、少しでも自分を大きく見せようと広大は無駄な努力をした。

マスターが一樹のためにグラスを差し出す。それを右手で受け取ると、一気にあおった。ふう、と大きなため息をつく。店内は乾燥してただでさえのどが渴く。ましてやあんな演奏をした後なのだ。まるで水でも飲むかのように、あっという間にグラスが空になった。

「コンタくんは何飲んでるの、オレンジジュース？」

「水割りです！バカにしないでください！」

グラスの中の氷をカラカラと振りながら、一樹がにやりと笑った。大人じゃん、そうつぶやくところまではつきりと聞こえてしまった。広大は思わずかっとなった。何か言いかけるのを聞きもせず、一樹はマスターの方を向いた。

左手で頬杖をつく。自然とプロテクターが広大の目に入った。黒い革のそれは、二本の細いベルトが並行に並んでいて金具で留められるようになってる。今ははずされていて所在なげに揺れている。広大はなぜだかそれから目を離せなくなっていた。

ふと、一樹がその視線を感じたように広大を見やる。広大が黙ってしまったのをげげんそうに見ている。広大ははっとしたようにあわてて視線をそれからはずすと、どうしていいかわからず下を向いてしまった。

「結香から何を聞いた」

一樹の声が冷えていた。さっきまでの笑顔はもうない。

広大は何か言わなくてはと焦ったが、言葉が出てこなかった。何も、それだけを絞り出す。それから意を決して顔を上げ、一樹に向き合った。

「何も、聞いてません」

「あつ、そう」

一樹が立ち上がる。そのまま広大の背後に回る。何なんですか、声が震えていた。

「嘘が下手だなコンタクン。顔が引きつってるよ。おれはな」

不意に胸ぐらを掴まれて広大はバランスを失った。そのままイスからずり落ちる。

「下手な同情されるのが一番嫌いなんだよ」

息ができない。苦しさにむせた。何でボクがこんな目に遭わなければいけないのか。広大は何か言い返したかったが、出てきたのはごめんなさいの言葉だった。

一樹はなぜかそれを聞くとつかんでいた力を緩めて、ごめんとつぶやいた。

広大は耳を疑った。一樹が謝るのを初めて聞いた気がしたからだ。一樹は辛そうな顔をしてイスに力無く倒れ込んだ。右手で髪をかき上げ、うつむく。

「あ、あの一樹さん」

広大がたまりかねて声をかける。一樹は動かない。

「ボク何もわからない素人ですけど、さっきの演奏は素晴らしかったです。一樹さんとっても格好良くて、あの」

「……ありがとう」

一樹がそう言うのを広大ははっきりと聞いた。息を飲んだ。それから一気にまくし立てた。

「本当です、昼間の姿からは想像できないくらい格好良くて、とても二トで怠け者の一樹さんとは思えなくてそれからその、わあ！」「誰が二トだって？」

一樹が顔を上げた。目に光が戻っていた。よかった、広大がそう

思う間もなく一樹が素早い動きで立ち上がった。そのまま右腕で広大の首を締め上げ、何かを背中中の襟元から滑らせた。

「こ、氷、氷入れたでしょ！一樹さん、何するんですか！！早く取ってくださいよー！」

「ホントおもしろいな、おまえって」

一樹がくすくす笑っている。周りの観客が何事かと広大の方を振り向く。何やつてるのよ、桃子にまであきれられた。広大は恥ずかしさで顔が真っ赤になった。

「もうホントに、いい加減にしてください！ガキじゃないんだから！」

何とか氷のかけらを背中から追い出して、広大は一樹に詰め寄った。わりいわりいと、ちっとも反省していない声で一樹が笑い続ける。

「せつかく誉めたのに、せつかく少しは見直したのに、もう一樹さんのことは信用しない」

「コンタクん、次の曲は君に捧げよう。心して聞くように」

にやにやして一樹がそう言う。何の曲だかわかったもんじゃない。二人とも仲がいいのね、マスターの声に広大は力一杯首を横に振った。絶対に違う。

「コンタじゃないです、広大です！いい加減覚えてください！」

「はいはい、コンタクん。コンタのブルースってのもいいな、ララバイ・オブ・コンタはどうだ？コンタ・マイ・ラブって曲も作ろう。それから」

「一樹さん！！」

広大の精一杯の叫び声を背中で受け流して、一樹はまたステージへと向かっていった。近くのミュージシャンと何やら打ち合わせを始める。今度はテナーサクソとアルトサクソスが一樹と並んだ。三本の管楽器がライトを受けて光を跳ね返していた。

「オン・トランペット高橋一樹！」

MCから紹介され、拍手の中、一樹は観客に向かって頭を下げた。

「全く、何考えているんだかわかりません」

憤慨して広大はマスターへ語気を荒げて言った。マスターは笑顔でそれを受け止める。

「マスターは一樹さんの病気のこと」

「知ってますよ、もうだいぶ前のことだけどね。一番辛い時も見てきましたからね。今よりもっと荒れていたんですよ。まだジャズをやり始める前のことだったんだだけどね」

「ジャズを始める前ですか？」

「一樹くんは元々クラシック奏者を目指してたんですよ、ああ見えてもね」

バカラのグラスを丁寧に磨きながら、マスターは言葉を続けた。

「小さい頃からの夢だったクラシックの道をあきらめるのは、本当に辛かったんでしょね」

そう言うのとステージの方を見やった。何かを思いだしているかのような遠い目だった。

#3

「桃子さん、引越しの荷物はできた？」

せわしなく動き回る桃子に、笑いながら結香が声を掛ける。夜のライブまでにはまだ間がある。店の片づけもあらかた終わって、結香は磨いたグラスを壁一面の収納棚に飾り付けていた。結香には、まだジャムズが夜しか営業していなかった頃から、店を手伝ってもらっている。店の苦しい内情も、彼女はよく知っていた。安いバイト代で昼も夜もよくやってくれると、桃子も父親の勇次も結香にはとても感謝していた。

「別に荷造りしているわけじゃないわ。ただちよっと、部屋を広くしようかなって」

「またあ、隠さなくてもいいじゃないですか。永すぎた春にもいいよエンディングを迎えるってことですかね。篠原さんと学生時代からの付き合いってホントですか」

篠原は大学生の頃から店の常連で、桃子より二つ下だった。短大を出てそのまま自分の家の店を手伝う桃子と、大手商社に就職してたまの休みには好きなジャズを聴きに来る篠原とは、ずいぶん前から結婚の噂も出ていた。もっともそれを言つと、桃子はいつものようにクールに微笑むだけで、肯定も否定もしなかった。人が良くおしゃべりで、如才ない篠原とは好対照で、それだけにお似合いの二人と言われていた。

「入社して三年で海外転勤なんて、篠原さんすっごい期待されてるんじゃないんですか」

「そうですね。本人もアメリカ勤務を目指して頑張つてたみたいだから」

「そうですね、って。もう、桃子さんは他人事みたいに！」

冷静すぎる桃子に、結香がふくれっ面をしてみせる。渡米の前に拳式なんて、これからめちやくちや忙しくなるんですよ、と結香が熱心に桃子に話してみても、当の桃子はただ微笑むばかりだった。

不意にドアのチャイムツリーが響き、一樹が顔を出した。ため息をつきながら革のソフトケースを乱暴にその辺に放り投げ、カウンターに肘をつく。掛けていたサングラスを指でもてあそびながら桃子に向かって、何か飲むものちょうだい、と甘えた声を出した。

「ご自分でどうぞ。コーヒーなら入れられるでしょう。二十歳にもなつて甘えるんじゃない」

けち、と口元でだけ悪態をつき、一樹はカウンターの中へ入つていった。右手だけで器用にコーヒーマーカーをセットし、カップを用意する。結香が、あたしにもね、と言つのに舌を出して答える。結香の方が少し年上だが、一樹はこの古株のバイトのことを自分と同等だと思つているらしく、いつもこんなふうな態度がでかい。

「あつー疲れた。もうさ、スタジオ入つてからずっと座りっぱなしで」

「テレビは拘束時間が長いつて言うから」

桃子が手を止めて一樹の方に視線を送る。店の棚にはCDとLP

レコードがぎっしりで、少くらしい整理した程度では荷物が減る様子はなかった。マスターの勇次が長年かけて集めたコレクションと、ご自慢のアンプスピーカー。桃子は父親の趣味の宝物を、そつとなでた。

「テレビの仕事がこんなにひどいものとは思わなかった。もう二度としないからな」

「すごいねー一樹ちゃん、まるで芸能人みたいじゃん」

結香がさかさず一樹を茶化す。

「これだけやってさ、画面の端っこに亡霊みたいに映るか映らないかってのが泣けるよね」

「アイドルのバックバンドなんですよ。あんたが目立つちゃしょうがないじゃない」

あくまでも冷静に桃子が言い切るのに、一樹はちよつとばつが悪そうな表情を返した。

「もう、桃子さんは冷たいんだから。ええそうですよ、おれなんかおまけですよ。ラッパだってほとんど吹くとこなんて無くて」

「一樹ちゃんがトランペット吹かないで何するのよ」

「……振り付けつけられて踊ってるよ」

「ひー、見たい見たい！」

「うるせえ結香、笑いすぎだよ！」

結香はまだ笑っている。それにぶつくさ文句を言いながら、一樹はコーヒーを口にした。

「ジャズじゃなくていいの？無理にテレビの仕事なんて入れなくていいのに」

カウンターの内側に一樹と一緒に並び、桃子は二人分のコーヒーカップを用意する。

「生活費も入れない居候って、いつまでも言われっぱなしじゃね。

おれも自活資金ためなきゃ」

「自活資金？」

「一人暮らししようかなって」

「何で。ここを出るつもりなの」

「何でって、桃子さん結婚すんのに実家にこんな若い男がさ、いつまでも居座ってちゃまずいだろ。兄弟でも親戚でもない、赤の他人がさ」

「まったく……誰が言い出したのよ、結婚なんて」

桃子が思わず苦笑いを浮かべる。この頃じゃ、誰もが篠原との結婚を決まったものだと話しかけてくるのだ。

「だって篠原さんシアトルに転勤なんだろ。ついてくんだろ」

桃子は黙った。空のカップをもてあそんでいる。少し言いよどんでから思い切って顔を上げた。

「ついていけるわけじゃない。店の実務的なことなんて何もできない父さんとあんたを置いて」

「何でおれ？おれ関係ないだろ」

一樹が気色ばむ。

「大食いのくせに、最近はろくに物も食べないで青い顔して。体調悪いのはわかってるのよ。一人暮らしなんかしたら栄養失調でぶっ倒れるわよ」

「おれは！」

「まさかあんた、また左手の具合が悪くなったんじゃないでしょうね」

「五年前の手術はさ、京成大学病院骨腫瘍科きつてのスペシャリストが執刀したんだ。そう簡単に再発してたまるか」

「一樹！」

「じゃあ桃子さん結婚したら、横浜帰るよ」

視線を外して、一樹はカップを抱え込んだ。心にもないことを、そんな空気が二人の間を流れた。

「帰れるわけじゃないでしょう。あんたのお父さん、日本フィルハーモニア管弦楽団の常任指揮者に就任したって聞いたわ。これからは日本に活動の場を移すって。横浜の高橋の家に帰ったりしたらあんた

はまた辛い思いをするだけよ」

「自分のことは自分で何とかする。桃子さんが心配することじゃないよ。とつとつと、嫁に行つちまえよ。」

「一樹は……それでいいの？」

そう言つと桃子は一樹を寂しげな眼差しで見つめた。一樹は何かを言いあぐねているかのように少し押し黙ると、壁の方を向いたまま辛そうにつぶやいた。

「それを、おれに訊くの？桃子さんときどきすつごく、残酷だよね」

あとは二人とも無言だった。

「一緒に行つてくれませんか。ちょっとストレートすぎるかな。この間のお礼です、もしよかったです。その後なんて言おうかな。食事でも。そりゃ初回から飛ばし過ぎか。どうしよっかな」

ランチの仕込みまでにはまだ間がある。広大はフロアで一人ぶつぶつぶやいていた。

手にはコンサートのチケットが二枚。一枚は大切にラッピングしてある。もう一枚はもちろん、自分用だ。

広大にとつて、あの晩のジャムズは夢のようだった。近隣の地方都市から出てきて専門学校の夜間部に入り、ジャムズのバイトを始めた時は、まさかジャズのライブハウスだなんて思つてもみなかった。レストランのフロア業務なんて、みんな一緒。高校の時にだつてファミレスのバイトをしていた。接客業なら慣れている。でも、夜の照明の元では、桃子の美しさは格別に光っていた。あんなに素敵な人とボクは働いているんだ。広大はまだ一人、夢の中にいた。

桃子に、と用意したクラシックの演奏会チケットを、広大はもう一度まじまじと見た。自分が一番好きな演奏家。実はファンクラブにも入っているほどのクラシックおたくなのだ。でも、きつと桃子さんにも気に入ってもらえるに違いない。

誘いの言葉を心ゆくまで練習しようと、広大が口を開きかけた時、

ソファの端から何やら突き出ているものを彼は発見した。

黒縁のメガネをかけ直し、よくよく見ようと近づくと、不意にそれは動いた。

「げっ！！か、か、一樹さん。いつから……そこに」

「あーあ、よく寝た。あれえ、コンタ君いたの」

わざとらしくのびをして、起きあがる。一樹だった。広大を見てにやにやしている。

「いつからいたんですか」

「えーっ、おれ？一緒に行ってくれませんか辺りからずっと。誰誘う気？」

「誰でもいいでしょ。一樹さんには関係ありません」

しどろもどろになって広大が一樹に向かって言った。頬はもう赤く染まっている。ドアが開いて結香が出勤してきた。一樹は彼女の方をちらつと見ると、大声を出した。

「わかった。結香を誘う気だろ。へえそうなんだ、よかつたな結香」

「違います、違います！結香さんじゃありません！」

「何よ、あたしが何。プロポーズしてくれんの」

結香がおどけながら返事をする。すぐ悪のりするヤツだ。

「コンサートに一緒に行きませんか、その後食事でも。だってー！」

「やーん、どうしよっ！若い男に誘われちゃった！」

「違います！いい加減にしてください！」

顔を真っ赤にして、広大が叫んだ。目が真剣に怒っている。一樹はちよつとからかいすぎたか、とばつが悪そうに黙った。

「あーごめんごめん、広大くん。それで、誰と行くの？」

「……こないだジャムズのライブを見せてもらったお礼に、桃子さんにあげよう」と。

広大が小さな声で結香にそう告げると、彼女は複雑そうな顔をした。

「そりゃいいと思うけど、でも、桃子さんにはさ、篠原さんってフイアンセがいるんだよ」

「ファイ、フィアンセですか」

「そ、大学時代からの付き合いで、もう七年ぐらいになるって、こないだ篠原さん言ってた。結婚も間近だって話だし、あんまりその、広大くんが期待しちゃうとさ」

「べ、別にそんなんじやありません。本当にボクはただのお礼を」
うつむいて耳まで真っ赤にしながら、広大は言った。一樹は頬杖をつきながら視線を泳がせている。結香は、ならいいんじゃない？と明るく広大を励ました。

「それで、何のコンサートなの？」

結香がモツプを三本取り出してきた。一樹にもそれを渡すと、彼はえーおれもやんの？とぶつぶつ文句を言った。

「それがですね、すごく素敵なバイオリニストなんですよ。日本クラシック界の妖精とも言われていまして」

「妖精？クラシック？広大くんってそういう趣味なんだ」

結香はモツプを両手で抱きかかえると、苦笑いした。広大はそれにも気づかず、笑顔で力を込めて掃除をし始めた。

「結香さんも一度見てくださいよ。本当に綺麗な人なんです。もちろん演奏は超一流ですよ。弱冠十八歳でロン＝ティボー国際音楽コンクールに優勝した、高橋真理子さんって方なんですが」

がたん。一樹がモツプを取り落としした。広大はその音に言葉を切ったが、またすぐに話し始めた。

「この方はすごいんです。三歳からバイオリンを始めて、十歳にはM響とコンチエルトをやったんですよ。神童と言われているんな世界的指揮者から求められて演奏活動をして、それで十八歳で」

「優勝したんだ」

結香が合いの手を入れる。その言葉に勢いづいたのか、広大がまくし立てる。

「そうなんです。ジュリアード音楽院を出た後は、ボス響とかAB響とか、とにかくメジャーオーケストラとがangan共演しているんです。今年二十三歳になるんですが、若き才能ある、日本クラシ

ツク界の期待の星ですよ」

一樹はモツプの柄を右手で拾うと、それを握りしめた。指先が白くなるほど。でも結香も広大も、その異変に気づくことはなかった。「それでね、今回はスペシャルコンサートなんですよ。親子共演で、真理子さんのお父さんが日本フィルハーモニア管弦楽団を指揮するんです」

「あたしクラシックのことはよくわかんないからなあ」

さすがの結香も、広大の興奮にはついていけないという顔をした。広大は、きつと結香さんも知ってますってば、と力説した。

「お父さんの高橋孝一郎さんは日本人で初めて、パリ・ニユーフィルハーモニーの常任指揮者になった方なんですけど、作曲家でもあるんです。あの、ジャズの曲も書いてますよ！『東京組曲』って、クラシックファンはもとより当時のジャズファンの間ではすっごく話題になった曲で」

がつつ。鈍い音がした。思わず広大と結香は振り返った。一樹が力任せにソファを蹴り上げていた。歯を食いしばり、何かをこらえているような悲痛な表情だった。

「あ、あの、一樹さん」

「うるせえよ。いつまでべらべらくつちゃべってんだよ」

苦しげに、広大に向かって毒づく。広大は思わず言い返した。

「掃除はちゃんとやってるじゃないですか！一樹さんの方こそちゃんとやってくださいよ！」

「何だと、てめ」

「はいはいはい、そこまでそこまで。何ムキになってんのよ一樹ちゃん。ほら広大くん、桃子さん来たわよ！」

その時、ドアが開いて桃子と篠原が入ってきた。手には買い出しの荷物を持っている。結香がさつとそれを受け取りに行き、何やら桃子にささやいた。

「何、広大くん。あたしに何か用事があるの？」

いつものクールな微笑みをたたえ、桃子が広大に向き直った。広

大はまた真つ赤になつて下を向いてしまった。

「ほら、広大くん。言つて言つて」

結香が声を掛ける。それに励まされて、広大は顔を上げてチケットを差し出した。

「これよかつたら、お二人でどうぞ！」

広大は自分用のチケットまで、桃子に手渡した。桃子はげげんそうな顔でチケットと広大を見比べていた。結香が、自分の分まであげちゃったら意味ないじゃん、と小声で広大をつつつくが、いいんですこれで、と広大も譲らない。

チケットのアーティスト名を読んだ桃子から、笑顔が消えた。ちらつと、まだ固くこわばつて突つ立っている一樹に視線を送る。そして広大の方に顔を向けると、チケットを突き返して薄く笑つた。

「ごめん。あたしクラシックに興味ないから」

そしてそのまま奥のカウンターに引つ込んでしまった。

残された広大は、どうしていいかわからず、立ちすくんでいた。それに、ごめんね桃子さん音楽の趣味うるさいからさ、と篠原が声を掛ける。

「何かにぎやかな曲でもかけよつか。ほら、広大くんも一樹ちゃんも、掃除掃除！」

結香の明るさに助けられ、皆が動き出した。ランチの仕込みももうすぐ始まる。まぶしい光がジャムズの大きな窓から射し込んでいた。

昼下がりのジャムズでは、手狭になつた壁のコレクター棚を整頓すべく、皆が悪戦苦闘していた。マスターの勇次は集めるばかりで処分できる性格ではないから、新しいCDが棚に入らないと、いつもこぼしている。桃子さんがアメリカ力行っちゃつたらどうするんですか、結香がそう言つてハツパをかけたが、あとはよろしくとパチンコに出かけてしまった。仕方なく残りの五人で、片づけを始めたところだった。

篠原が思い切りよく、棚の荷物をどんどん床に並べていく。桃子が皆へ、いらぬ物があつたらこつちの袋に入れてよ、と声をかけるが、結香も広大も物珍しさで次から次へと古い雑誌や切り抜き、写真といったものを引つ張り出しては歓声を上げていた。

「やーんかわいい！誰これ」

まだフィルムで撮った、色褪せるまではいかない一枚の写真。ステージの照明が乱反射して輝く中を、黒人のトランペット奏者と肩を組む、詰め襟の少年が写っている。一樹だった。

「あーこれ。一樹くんがまだ中学生の頃だよ」

「何の写真見てんだよ、篠原さんあのさ！」

「どれ、ホントだ。ウィリアム・バークレーが来日した時の写真ね。ジャムズでのライブの前に、一樹に特別に吹いてみせてくれたんだっけ」

「中学生？一樹ちゃんって中学生の頃からここに居るの？」

驚いたように結香が口を挟む。

「その頃はまだ横浜にいたんだよ。すごいんだこいつ、小学一年の頃からトランペット持って東京までレッスンに通ってたさ」

それまで黙って写真を見つめていた広大が、おそろおそろ口を開いた。

「この制服もしかして、一樹さんって桐村学園出身なんですか」

「中学まではね。でも東京の学校じゃないのに、広大よく知ってるな」

「だって横浜の名門私立じゃないですか。名家の子息しか行けないようなところですよ」

「おれおぼっちゃまだもん。ばあやがいて、お父様お母様お姉様、って」

「はあっ！？いいところのおぼっちゃまがわずか数年で、何でこんなになっちゃうんですか。口の悪い、働きの悪い、意地も悪い、食意地もはってる、ニートで居候で、わあー！桃子さん助けて！」

長身の一樹に腕を伸ばされ、頭を叩かれかけた広大が、桃子の背

中に回り込んで首をすくめる。一樹は、ふざけんな、と口の中でぶつくさ文句を言い続けていた。

「すごいんだよね、一樹くんちつて。写真でしか見たことないけど、山手の高級住宅街に三階建ての洋館がどーんとさ」

明るく話す篠原に、一樹は、中は冷凍庫みたいに冷え切ってるけどね、と苦々しくつぶやいた。他の誰にも気づかれないうような、かすれた声だった。

「どうして一樹さんは、ジャムズに住むようになったんですか」

広大が無邪気にそう問いただす。篠原は桃子の方を見やるとふつと懐かしそうな微笑みを浮かべた。

「何だつていいだろう、広大。おれがここにいちや悪いってのかよ」「ボ、ボクはただ気になったから。わあ、やめてくださいよ！暴力反対！」

打って変わって大声を出す。一樹は広大とのやりとりを楽しんでいるかのようだった。

二人のじゃれ合いを半ばあきれ顔で見ながら、桃子は六年前の春を思い出していた。

あの春、一樹が初めてジャムズを訪れた日のことを。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2010 keik
itagawa All Rights Reserved

君の思い出　　Memories Of You

4

「あの子、変じゃないか。さつきからあのボックスの前にずっと立ってる」

フロア長の長谷部が篠原にそつと目配せをした。視線の先には小柄であどけない顔の少年。詰め襟で変わりボタンのその制服は、この近くでは見かけないものだった。

新宿の中心にある山場楽器店は、各フロアごとに楽器や楽譜売り場、そして音楽CD売り場と分かれていた。もつとも、CDはさらにジャンルごとに階が違い、四階のクラシック、ジャズコーナーには、他の階よりは人もまばらで、余計その少年の姿が目立っていた。水曜日の昼下がり、まだ学校もあるだろうに。おそらく中学生ではないか。

篠原が大学に入ってから始めた山場でのバイトも、もう一年になる。仕事にも慣れ、だいぶいろいろ任されるようになってきた。ジャズ研ではビッグバンドでトランペットを吹き、講義のない日は目一杯バイトを入れる。今しかない人生の猶予期間を思い切り楽しもう、そう決めて篠原は毎日を忙しく過ごしていた。

長谷部からそう言われ、篠原も注意して少年の姿を追った。クラシックの一区画の前から動こうともせず、手だけをせわしく動かす。何度もCDを出したりしまったり、順序を入れ替えたり。買う気はサラサラないようだが、時折ジャケットをじつと見つめ、酷く苦しげにため息をつく。何をしているんだろう、篠原が思いきって声をかけようと一歩踏み出した時、少年の手が一枚のCDをつかみ、それをさつとカバンの中に落とし込んだ。

「あつ!?!」

思わず篠原は長谷部と顔を見合わせた。

やっぱり。

フロアを出ていこうとする少年の肩を、篠原は周りに気づかれなようにそつと叩いた。彼がびくつと体を震わせる。怯えたような顔で篠原を見上げた。

裏の事務室で、少年と篠原、そして長谷部が向かい合う。篠原が機械的に用紙に何か書き込んでいく。売り場の仕事をしていれば万引きなんて日常茶飯事だ。いつものように少年に名前と学校名を訊くが、少年は何も答えなかった。

「調べればすぐわかることなんだよ。自分から言ってくれないか」
「お願い、学校には知らせないで！」

ようやく少年が口を開く。

「家と学校に連絡するのが決まりなんだよ」

「家には誰もいない」

「じゃあ夜まで待つよ」

「親なんていない」

「すぐばれる嘘をついたってダメだよ」

「本当だよ！…日本にはいない。お願い、もうしないから。お金ならちゃんと払うから、だから」

ため息をついて篠原は長谷部と顔を見合わせた。実害があったわけじゃない。どうやら初犯らしいし、ここは説教一つで帰すとするか。長谷部が少年に聞こえないようにささやく。

「じゃあ学校にも家にも連絡しないから、正直に答えてくれないか？ここに自分の名前と住所と電話番号と、学校の名前を書いてよ。嘘はダメだよ。きみを信じるからね」

少年は硬い表情でボールペンを持つと、思いのほか素直に書き始めた。

高橋一樹。横浜市中区山手町。横浜桐村学園中等部。その文字を見た篠原が思わず大きな声を出す。

「きみ、横浜に住んでて横浜の学校に行ってるの？何でこんな時間に東京なんかにいるんだ？」

「レッスンがあつたから」

ぼそつと少年がつぶやく。言われてみれば焦げ茶色の楽器ケースを足元に置いていた。この形は、トランペットか。

「かずきくん、でいいんだよね。トランペットの個人レッスンを受けるの？すごいなあ。俺も趣味でラツパ吹いてるんだ」

気さくに話しかける篠原にも、一樹は何も答えなかった。篠原はもう一度ため息をつき、気を取り直して一樹に向かった。

「じゃあ、教えてよ。どうしてこのCDを盗ろうとしたの？」

「……」

「そんなに好きなの？」

「好きなわけではない！」

一樹が吐き捨てるように言う。篠原も長谷部も驚いて彼を見つめる。

「嫌いだ、こんなヤツ。大嫌いなんだよ」

改めて篠原が手にしたCDのジャケットを見た。ロンドン交響楽団のブルームス。ジャケット写真には、指揮者一人がラフな衣装でにこやかに微笑んでいる。穏やかそうな優しそうな瞳。

「嫌いって、この人高橋孝一郎だよ。日本で一番有名な指揮者じゃないか。世界的に評価の高い現代作曲家でもあるよな。どうして嫌いなんだい？」

長谷部はさすがにクラシックにも明るい。正直に話す約束だよ、そが一樹に促す。

口をつぐんでこわばっていた一樹は、下を向くとぽつりとつぶやいた。

「こいつ、ぼくのお父さんなんだ」

「えっ！？きみ、高橋孝一郎の息子なの？」

長谷部が思わず絶句する。

「嫌いなはずのお父さんのCD、どうするつもりだったの？」

「こんな写真、嘘ばっかだ。お父さんは笑ったりしない。ぼくの前で笑ったりしない。踏んづけて粉々に砕いて、捨ててやろうと思っ

「たんだ」

涙をこらえるように一樹が唇を噛む。二人は何も言えなくなってしまうた。

「お父さん、今はパリ・ニューフィルハーモニーの常任をされているんだっけ。日本にいないって言ったのは、仕事で長く家を空けているから？」

長谷部が優しく一樹に問う。一樹はかぶりを振った。

「うん、向こうに住んでる。お父さんもお母さんもお姉ちゃんも、ずっとパリに行っただきりで帰ってこない。ぼくだけ、置いてかれたんだ」

「どうして…」

「ぼくが、へただから」

とうとうこらえきれずに、一樹は涙をこぼした。

そう言えばたしか高橋孝一郎の娘って、バイオリンの天才少女って有名なんだよ、長谷部が篠原にそつと教える。篠原は辛そうな表情で一樹を見た。

「クラシックなんか大嫌いだ。お父さんもお母さんもお姉ちゃんも、大嫌いだ。違う、嫌われてるのはぼくだ。ぼくはいららないんだ」

「一樹くん」

一樹の頬に涙が幾筋かの跡をつける。しばらくそうしていた後、小さな声で「ごめんなさい」とつぶやいた。

「もうしないよな」

「うん」

「じゃあちよつと、俺に付き合ってくれないか」

努めて明るい声で、篠原が一樹に誘いかけた。一樹は驚いて顔を上げた。まかしたぞ、長谷部が篠原の背中を叩く。店のエプロンを取り、荷物をひつつかむと篠原は、とまどい顔の一樹を外へと連れ出した。

「ジャズのライブハウスなんて、見たこともないだろ」

不審そうな目で見上げる一樹にはお構いなしに、篠原は腕を取ってどンドン歩き出した。どこに連れて行く気だよ、弱々しくつぶやく一樹の声は届いていないようだった。

新宿駅から小田急線で下北沢へ。駅を降りると篠原は、一樹を引きずったまま南口の方面に進んでいく。店や小劇場が建ち並び、狭苦しい道路には看板があちこちにはみ出している。一樹は目だけをきよるきよるさせながら、迷子になるまいと不安げに、篠原の腕をしつかりとつかんでいた。

「ライブハウスって、何？」

「今から行く店は『ジャムズ』って言うんだけどさ。そのステージに毎晩生バンドが入って、演奏を聴かせるんだ。飲んだり食ったりもできるけど、ジャムズに来る客はみんな、本当にジャズが好きで連中ばっかだから」

「ジャズって何だよ。ぼく知らないよ」

「だから聴かせてやるってば。いいからついてこいよ。世の中にはクラシック以外の音楽だってたくさんあるんだ。君もラップ吹きなラサ、いろんなジャンルの曲も聴きなよ。高橋孝一郎は確かに日本を代表する立派な音楽家かもしれないけど、それがすべてなんじゃない。君は君だし、そんなものにとらわれる必要もない。そうだから？」

明るく篠原が大声を出す。友達の中でも面倒見がよいと言われる、悪く言えばお節介な性格が、篠原をそうさせていた。

不意に彼が足を止める。

通りの端に、その店があった。

三階建ての雑居ビルの一階がライブハウスになっていて、その上はどうやら居住スペースになっているらしかった。

道路に面した側に大きなガラス窓があり、そこから中がうかがえた。鈍く光るのはドラムセットのシンバルか。

「普通さ、ライブハウスなんて地下にあったり全面防音壁で圧迫感あったりするんだけど、ここ変わってるだろ。この窓からちよっぴ

り音が道路にまでもれて聞こえて、なかなかいい雰囲気なんだぜ」
「変わってるも何も、ぼくわかんないよ」

一樹が口をとがらせた。全く意に介さない風で篠原が分厚い木製のドアを開ける。

後ずさりする一樹の背中を、その大きな手のひらで押す。中にいたバンドの連中が、一斉に彼を見た。

「おせーよ、篠原。遅刻だぞ」

「わりい、わりい。友達連れてきた」

友達じゃないよ、一樹が小声で抗議するのにも平気な顔で、篠原は他のメンバー四人のいるステージの方に向かっていった。

「マイルスやガレスピーの名盤もいいけどさ、ジャズはやっぱりを聴かなきゃな。これはおれのバンド。下北沢ハイソサイアティ、通称下北ハイソって言うんだけどさ」

男ばかり、全員大学生だというそのメンバーたちは、小柄な一樹をほほえましいといったまなざしで迎えた。それに生意気な視線でぐつとにらみ返す。

「しょぼい名前」

減らず口をたたく。大学生たちの顔が引きつったのと同時に、一樹の頭の上を誰かがグーでこづいた。

「いつてえ！何するんだよ！？」

「この桃子ももこさんが、目上の人に対する口の利き方を教えてあげるわよ。あんた中学生？」

「とつこ、さん？」

一樹が思わず振り向くと、そこには美しい女性がいた。

透き通るような肌、細面に切れ長の目。薄く形のよい唇が片方だけきゅっと持ち上がって、微笑みを形作っていた。金髪に近いほどカラーリングした髪はショートにして、少しだけ横に流している。細身の身体をぴったりとしたサマーニットで包み、タイトなロングスカートからは引き締まった足首を少しのぞかせている。そこにやや彼女に不似合いな口ゴ入りのエプロン。Jam'sと書かれてい

た。この店のスタッフなのだろう。彼らと変わらない歳のようだが、とても落ち着いて見えた。

女性にしては低く、ささやくような声で彼女は一樹に向き合った。「そう、とうこ。桃子って書いて『とうこ』って読ませるの。父は桃源郷から付けたって自慢するけど、普通読めやしないわよね。あんたは？」

大きく、濡れるように光る漆黒の瞳に見つめられて、一樹はどぎまぎした。

「あ、あの…高橋一樹」

「この子ね、すごいんだよ。あの高橋孝一郎の息子なんだって」

なぜか自慢げにそう言う篠原に、桃子はげげんそうな顔をした。

知らないの？あんなに有名なのに、と力説する篠原に、バンドの連中は「誰だよそいつ、知らねえよ」と口々に言葉を返した。

一樹の顔が曇った。悔しそうに唇を噛み、下を向く。

ばつが悪そうにメンバーと一樹の顔を見比べていた篠原は、一樹に小声でささやいた。

「よかったじゃん。きみお父さん嫌いなんだろ。広い世の中にはさ、けっこう知らない人もいるんだよなって」

ますます一樹の表情がこわばる。篠原はあわてて、もう一度桃子に話しかける。

「桃子さんは知ってるよね、高橋孝一郎って」

「ごめんなさい、あたし最近テレビ見ないから。ミュージシャン？俳優？政治家とか」

「もういいよ！」

すっかり拗ねてしまった一樹に、桃子は柔らかい視線を投げた。

「いいじゃない、誰が父親だろうと。あんたはあんたでしょ。何か飲む？」

無言の一樹の前に、クラッシュアイスが入ったコーラを置く。

篠原は自分の楽器ケースからトランペットを取り出し、一段高くなっているステージの方へ上がっていった。マイクの向きをセット

し直す。譜面台に幾枚かの五線譜を並べた。

「とにかく聴いてよ、一樹くん。まあしょせん学生の素人バンドだからさ、大したことはないけど。でもジャズのニュアンスだけは伝わると思うよ」

徹夜で音を取って譜面を起こしたんだ、と篠原は得意げに一樹に向かつて言った。

他のメンバーたちはそれぞれの楽器を手に、演奏開始の合図を待っていた。

ドラムスがカウントを取る。いきなり変則的なリズムで曲が始まる。

チツクコリアのスペインだ。

それを原曲よりもさらに速いテンポで、トランペットとリズム隊のためにアレンジされたバージョンでやっている。

下北ハイソの演奏はお世辞にもかみ合っているとは言えなかったが、若者の持つスピード感はよく伝わってきた。桃子は、「中学生に聴かせるなら、もうちょっとスタンダードな曲がいくらでもあるでしょうに」と苦笑いしている。

一樹は、篠原のトランペットを食い入るように見つめていた。

楽しげに目配せしながら、リズム隊がリフを合わせている。それになぜかワntenポ遅れて、篠原がメロディーをかぶせる。ドラムがずれていく篠原にわかりやすいようにと、大げさにバスドラで刻みを入れる。あわてて篠原もそれに合わせる。

ようやく五人がそろって、最初の主旋律に戻ってきた。そのままエンディングに入る。

にこにこしながらステージを降りると、篠原は「どうだった？」と一樹に問いかけた。

それまで息を詰めるように彼を見つめていた一樹は、口をとがせるとぼそつとつぶやいた。

「へったくそ」

「何？」

篠原の顔が引きつる。バンドの連中も表情を険しくさせて一樹の方に視線を送る。

誰かが何かを言う前に、しかし桃子が一樹の頭を今度は力を込めてグーでこづいた。

「痛いなあ、やめろよこの暴力女！」

「生意気言うんじゃないわよ。礼儀つてもん知らないの？」

「下手にへたくそって言うて、何が悪いんだよ。ハイAの音も外すヤツがよく人前で吹けるよな。信じらんない」

「あの、そりゃ俺はへただけどさ、曲はいい曲だろ。ジャズっておもしろいつて思ってもらえれば」

動揺を隠せない篠原は、それでも一樹にそう笑って言った。けれど一樹はさつきよりも大きな声で毒づいた。

「何がジャズだよ、ロドリゴのアランフェス協奏曲じゃないか。

使ってる音だつてつまないし大したことない。ジャズなんてどうってことない」

「そんなに言うなら、きみも吹いてみるよ。個人レッスン受けてるんだろ。このくらいの初見、朝飯前なんじゃないのか」

さすがの温厚な篠原も、やや切れ気味にそう言い返す。一樹は力を入れて彼をにらむと、自分のケースからバツクのトランペットを取り出した。

ステージの真ん中に姿勢良く立つ。メンバーたちがため息をついてまたセツティングを始める。ホントにやるの？ピアノの小島がつぶやく。ドラムスの亀山は、幾分優しげに「ゆっくりでいいからね」と一樹に話しかけた。

「さっきのテンポでいい。もっと速くつたっていい」

手書きで細かく、アドリブまでコピーされた楽譜をにらみながら、一樹はそう返した。むっとして亀山が、やれるもんならやってみろ、とつぶやいた。

曲が始まる。

テンポはさつきより速いかもしれない。しかし一樹のトランペッ

トは、全く初めての曲を合わせているとは感じさせないほど、安定していた。

十六分音符ばかりのトリッキーなキメも、一度目からぴったりと合っていた。

そしてそのままトランペットのアドリブに入る。一樹の右手がまるで鍵盤上を走り回るピアニストの指のように、軽やかに動く。ところどころに出てくる高い音も難なく響かせ、一樹は六十四小節のアドリブパートを吹き切った。

バンドのメンバーたちが目を見合わせる。篠原は自分がひどく言われたこともすっかり忘れて、目を輝かせて彼を見つめている。桃子一人は、さつきと表情を変えない。

曲が終わって降りてきた一樹に、篠原は「きみ上手だねえ。」と笑いかけた。小島も亀山もすっかり感心して一樹に声をかけている。

一樹は得意げに、桃子の前に立った。

「ジャズなんて簡単だ。どうってことない」

だが桃子は、片方の口元をわずかにゆがめ、何も言わなかった。

「なんか言えよ暴力女。何で黙ってるんだよ」

「へたくそ」

「なっ!?!」

思わず一樹はかっとなった。顔がほてって赤くなる。しかし桃子は顔色一つ変えない。

「何でだよ桃子さん、一樹くんこんなに上手じゃないか。まだ小さいのに、俺なんかよりよっぽど音は出るし指は回るし、すげえよこいつ」

「篠原くん、人が良すぎるにもほどがあるわよ。下手に下手って言うって何が悪いの、そうでしょう」

桃子はそう言って微笑んだ。クールビューティ。桃子の美しさは引き立ったが、目は笑っていないかった。

「どこが下手なんだよ!ちゃんと吹いただろ。間違ってたなかっただろ?」

一樹が食ってかかる。それにあくまでも冷静に桃子は答えた。

「だから、何？今までジャズを聴いたこともないんだからしょうがないけど、あんたのはジャズじゃない。指が回るのが自慢なら、中国雑伎団にでも入れば？」

一樹は押し黙った。無言のまま乱暴にケースに楽器をしまうと、入り口に向かって歩き出す。その背中に篠原が声をかけるが、返事をしない。

木製の大きなドアに手をかけると、一樹は振り向いた。悔しげに唇を噛み、桃子をきつとにらむ。

「来週も、バンドの練習してるの？」

毎週この時間はここでやってるよ、とあわてて篠原が返事をする。だったら、と一樹は言葉をつないだ。

「来週また来る、絶対来る。今度はそんなこと言わせない。覚えてるよ暴力女」

「暴力女じゃないわよ、神原桃子。桃子でいいわ」

そんな一樹に、桃子は微笑みを返した。今度は瞳が柔らかい。一樹が扉の向こうに消えてから、桃子は篠原の方に視線を向けてふつと笑顔を見せた。

「それから毎週、律儀に通ってきたわよね」

すっかり背の高くなった二十歳の一樹を目で追いながら、桃子が篠原に語りかける。

「そうだったね。俺にもバンドの連中にも、桃子さんにも憎まれ口ばっか叩きながら、けっこう真面目にジャズを勉強していたよね。どンドンうまくなって、何でも吸収して。本当に彼は、ウイントン・マーサリスみたいになるのかと思ってた」

篠原もその頃を懐かしむように目を細めた。

白い洋館にお手伝いさんと二人で住み、週に一度東京へ出てくる。横浜から下北沢へ、それは一年以上続いた。一樹が病気で倒れるまで。彼の指が動かなくなつたあの日までは。

北川圭 Copyrigh? 2009 - 2010
itagaawa All Rights Reserved keik
(くじ)

言い出しかねて I Can't Get Started

#5

ランチも終わり、珍しく桃子が一人で店の片づけに追われていたある日、電話が鳴った。篠原からだった。

「一樹さんの楽器の型番教えてくれないかな。後輩に訊かれてたんだけど本人に会えなくてさ」

「うちにもいないのよ、最近いつも出掛けているから」

じゃあ楽器ケースを開けて本体の隅に書いてある番号を教えてよ、篠原がそう続けた。急いでいるようだったので桃子は仕方なく承諾した。本人がいない隙に部屋に入るのも楽器に触れるのも気が引けたが、篠原には必要な情報なのだろう。そのくらいはしてあげたいそうも思った。だいたいいつも居ないのが悪いのだ。桃子は久しぶりに一樹の部屋に入ってしまった。カーテンが閉まっっていて薄暗い。ベッドにオーディオコンポに溢れるほどのCD。殺風景な部屋の片隅にいつも彼の使っている見慣れた楽器のハードケースが置いてあった。そうつと床に置き直しふたを開ける。薄いベルベット状の布をめくると銀色に光るトランペットが見てとれた。

「型番、型番、と」

お目当ての記号はすぐに見つかった。急いでそれをメモに取る。

ケースにしまいふたを閉めようとした時、一角の収納スペースにおよそ楽器にはそぐわない物が入っていることに気づいた。思わず手に取る。白い紙の袋、印刷の文字。薬局の、薬？

「人の部屋で何してんだよ」

背後から声を掛けられ桃子はびくつと体を震わせた。一樹だ。だが彼が袋をひつたくろうとするより早く桃子は立ち上がり手を引く込めた。

「返せよ、勝手に人の楽器触ってんじゃねえよ」

「何よこれ。どうして薬なんかがあるの。どうして楽器ケースに隠

してあるの？」

「隠してなんかねえよ、ただの胃薬だよ」

「胃薬？ここに整形外科って書いてあるわよ。京成大学、病院、整形外科？ちよつとどういうことよ！」

桃子はその文字を素早く読むと一樹の前に突き出した。

「まさかあんだ、また」

「桃子さんには関係ねえよ！」

「関係ないわけじゃない」

「うるさいな、ほつといてくれよ！」

一樹！思わず声が大きくなる。だが一樹はそれに答えずに目をそらした。

「たとえばご家族様でもお電話ではお教えすることはできません。ご本人様とご一緒に来院していただいて」

無理を承知で京成大病院の外来に電話をしてみた。一樹の病状を教えて欲しい、と。やっぱりこつそり後を付けるしかないか。桃子はため息をついた。このところ、桃子にも勇次にも行き先を告げず、出かけることが多かった。楽器を持たずに行くなんて、一樹にしたら珍しい。帰ってきてからは決まって体調を大きく崩していた。何も吐く物がなくなってもこらえきれない吐き気に襲われて、全く食べ物を受け付けられない。あれほど浴びるほど飲んでいた酒も飲まず、タバコも吸わず、辛そうにベッドに倒れ込み身体を丸めて横になっている。

まさか、本当に再発したのではないだろうか。

彼の左手を蝕んだ悪性の腫瘍が、五年前完治したはずの病気が、また彼を襲っているのではないのか。

桃子は不安で胸がいつぱいになった。

今の一樹は何も言ってくれない。

十五歳のあの夏には、すぐるべき両親も日本に帰らず、一樹は心細さからか桃子の手を離さなかった。辛い思いも死への恐怖も、話

すことで少しでもまぎれるのならと、桃子は夜通し病室で一樹と向かい合っていた。

今のあの子は、まさか一人で何もかも受け止めようとしているのではないか。

彼の肩を揺さぶって、何もかも洗いざらい聞き出したかった。でも、もう小さかった一樹じゃない。果たして親でも兄弟でもない桃子がそれをしていいものかどうなのか、迷い始めていることも確かだった。

でも……。桃子は思い切って立ち上がった。

外来の長椅子にその脚を投げ出し肩をすぼめて一樹は一人座っていた。もう受付時間も終わり人もだいたいぶ少なくなってきた。桃子は変装用にとかぶってきた帽子をそつと取った。一樹は何か考え事をしているようで桃子にはちつとも気づいているようではなかった。

黙って隣に滑り込むようにして座る。まだ気づかない。横顔を見つめる。元々やせぎすの顔立ちがここ最近酷くやつれてしまった。無理もない、ほとんど食べていないのだから。

どこかあどけなさが残るその顔が痛々しかった。彼が右手で髪をかき上げる。その拍子にふつと隣に視線を泳がせる。

「……!?!」

ぎよつとしたように桃子を見つめる。声も出ないようだ。桃子はすました顔で一樹を見返した。

「何してんだよ、桃子さん」

「あら偶然ね。一樹もここに來てるなんて」

「何が偶然ね、だよ。つけてきたんだな」

押し殺したような声で一樹が桃子に言葉を投げつける。つけてきたなんて人聞きの悪い、桃子は聞き直つてそう言った。

「帰れよ、桃子さんには関係ないだろ」

「そうはいかないわよ。本人と一緒にじゃなきゃ教えてくれないって

言うんだもの」

「何がだよ」

そのうち待合室にチャイムが鳴って一樹の名前が呼ばれた。あわてて彼が立ち上がる。桃子ももちろんその後が続く。何でついてくるんだよ、一樹はまだ怒っているが桃子は気にしない。そのまま処置室と書かれた小部屋に一緒に入っていく。

「ねえ何で診察室じゃないの？ここでいいの？」

「うるさいな、いいからとつと帰れよ」

一樹は部屋に入ると慣れた様子でベッドに腰掛け、看護師に腕を差し出す。横になっていいですよと促され、仰向けに横たわる。看護師が桃子の方を見て何か言いたそうなそぶりをした時、中仕切りのドアが開いて見覚えのある顔がのぞいた。

「気分はどうだ、今回は効いてくれそうかい一樹くん。おやそちらは」

前のボタンもきちんと留められていない格好で、白衣もよれよれの医師が気さくに声をかけてきた。やや長めの髪を真ん中から分け、銀縁の眼鏡の奥には優しい目が光っていた。五年前の一樹の主治医、大河原だった。

「ご無沙汰しています、その節は大変お世話になりました」

桃子が頭を下げる。それを見て、ああ一樹くんのお姉さん、と大河原が声を上げた。

「姉さんじゃねえよ、赤の他人だよ桃子さんは」

「お姉さんちよつと、こつちに来てもらえますか」

大河原が手招きする。姉さんじゃねえよ、もう一度一樹が怒鳴るが大河原は関知しない。桃子はとまどいながらも一樹をそこに残して別室へと向かった。

「お姉さんからも言ってもらえませんか一樹くんに。早く入院しろつて」

変わらずやわらかい口調で大河原が桃子にそう言った。

「入院、ですか。そんなに悪いんですか。あの子何も言ってくれなくて」

「お姉さんに話してないのですか。困った人ですねえ」

「お恥ずかしいことですが、病院にかかっていることも知らなかったんです。でもここのところずっと体調が悪くて家にいても吐いてばかりで」

「そうですか、と大河原が腕を組みながら答える。それは化学療法の副作用なんです、と。」

「化学療法？」

「いえね、今はそんなに副作用の出ないタイプの薬剤が多いんですが、一樹くんは薬と相性が悪いというか敏感というか、どの薬を使っても吐き気や倦怠感といった副作用が強くなってしまおうようなんですよ。ですから入院して状態をコントロールしながら治療を進めるのがベストなんですけれどね、本人がどうしても外来でして欲しいと言って聞かないので我々としても困っていたところなんです。無理矢理入院させることもできませんし、ね」

「あの、どうしてそんな治療を？病気は五年前に良くなったんじゃないんですか。手術してすっかり大丈夫になったって」

「ええ」

大河原はちよつとばかり難しい顔つきになった。本当に何も話してないんですね、ため息をつく。

「五年前には進行の速い悪性腫瘍でしたから、かなり広範囲に手術を行いました」

「そうだ、そのせいで彼の左手の指は動かなくなったのだから。自分の力で楽器を支えることもピアノを弾くこともできなくなった。クラシックをあきらめ、オーケストラの一員になることをあきらめて。」

「もともと良性腫瘍からの悪性化ですから、そういったものができやすい体質なのだと思います。今回の場合も良性なら取ってしまえばいい。いたずらに恐れることはありません」

桃子は頭ががんがんしてきた。この医師は何を言っているのだらう。

「一番恐いのは悪性であった場合を見逃して、別の場所に転移させてしまうことなんです。そうなってしまうてからでは遅すぎる。生命に関わりますからね。ですから疑わしきは早めに叩けとばかりに化学療法を、早い話が抗ガン剤治療です。」

その後大河原が何を言ったのか、桃子は正確には思い出せなかった。何も耳に入らない。ただ、再発ということとそれが良性ではない可能性があるということだけが頭の中をぐるぐると回っていた。桃子は視線を下に落とすと両手で顔を覆った。

大河原の声が優しく語りかける。良性でないと決まった訳じゃないんです、と。

「ですからお姉さんからも一樹くんに言ってください、入院して治療をしっかりと受けてくれって」

「今日このまま、入院させてください。一樹には話してわからせますから。お願いします。どうかあの子を助けてやってください」

桃子は大河原に頼み込んだ。必死だった。

大河原が優しい眼差しでうなずく。桃子の肩に手を掛け、安心させるかのようにそつと叩く。大丈夫です、と繰り返しながら。

処置室に戻るともう点滴は終わっていた。だが一樹は起きあがることもできず苦しそうに吐き気と闘っていた。何も吐くものがなく胃液しか出てこない。それがまたなおさら辛そうだった。桃子は思わず目を背けた。しかしすぐに一樹の方に向き直すと彼の側にしゃがみ込んだ。

「ねえ、このまま入院させてもらおうよ。必要なもの取ってくるから。ね？」

「……イヤだ」

苦しい呼吸の間から絞り出すように一樹が言った。目をぎゅつとつぶり苦痛に耐えている。

「病院は嫌いだ。家に…帰る」

「何で言ってくれなかったの？ たった一人でどうして我慢していたの。あたし達家族じゃない。辛かったら辛いつて言っていいいのよ」
桃子がそつと一樹の乱れた前髪を直す。それを力無く払いのけると、一樹はふらふらと立ち上がった。

「家族なんかじゃない。病院なんか嫌いだ。桃子さんも嫌いだ。おれは帰る」

そのまま部屋から出ていこうとする。若い看護師がそれを止めようとすると邪険に振り払う。足元が危うい。それでも一樹の意志は固かった。

「イヤなんだよ病院が。もう、もう二度と家に帰れないような気がして。目が覚めたら左手だけじゃなくてこの右手までもが動かなくなっているような気がして。もうおれからすべてを取り上げられてしまつて、何もできなくなつてしまふんじゃないか、つて」

一瞬、一樹が息を止めて桃子を見る。

「怖いんだよ」

そつつぶやく。

「だから家に帰してくれ。頼むから。家にいたいんだ。みんなの側にいたいんだ」

桃子にはもう何も言えなかった。胸がいつぱいになつて言葉をかけることができなかつた。

「一樹くん」

大河原が優しく声をかける。

「手遅れになんかさせないよ、僕が約束する。君はまたちゃんと楽器が吹けるようになって、元気になつて、普通の生活が送れるようになるよ、僕が保証するから。だから入院治療を受けてくれないかい」

「大河原も嫌いだ」

一樹は主治医に悪態をついた。ドアにもたれ、彼をまつすぐにいる。五年前に治つたつて言つたじゃないか。化学療法を受ければこの

指がまた動くようになるっていつのか。再手術でも受ければ、左手はまた元のようにトランペットを持てるようになるのか。無理なんだろう？嘘ばっかりつくなよ！」

叫び声を上げたいのにその体力もなかった。唇を噛みながらかすれ声でそうつぶやく。それだけ言うとうつぶむいて肩で息をした。

「とにかく一度家に帰って、それから話をしましょう、ね？」

幼い子どもに諭すように桃子が一樹に向かって言った。この場に居続けることで一樹が傷ついていくことに耐えられなかった。一樹の不安や絶望、そんな感情が押し寄せてきて、誰もがやりきれない気持ちで押し黙った。

桃子は大河原やそばで心配そうに見ていた看護師達に頭を下げると、一樹の背を押して部屋を一緒に出ていった。

外は穏やかな春の日差しだった。木々の緑が目にもまぶしかった。だが二人ともそんな風景を見る余裕もなかった。タクシーを待つ間にも一樹は植え込みにしゃがみ込み、苦いえずきをこらえるのに苦勞していた。桃子がミネラルウォーターのペットボトルを差し出す。一樹の片手ではそれは開けることができなかった。桃子はふたをはずすと彼の右手にボトルを持たせてやった。口を付けてほんの少し飲み込む。それが刺激になったのか苦しそうに咳き込んだ。左腕で口をぬぐうと一樹はそばのベンチに倒れ込むように座った。

「……やっぱりおれのせいなのか？」

唐突に一樹が桃子に向かって言った。隣に座ってタオルを差し出しながら桃子は何のこと？と問いかけた。

「シアトルに行かないのは、おれのせいなんだろう？」

「違うわ」

静かに桃子はそう答えた。どこを見るでもなく視線を泳がす。あなたのせいじゃないわよ、そう続けた。

「じゃあどうして」

「想像できないの。シアトルで生活している自分が思い描けないのよ」

自分に言い聞かせるように一言一言噛み締めながら桃子は言った。それが本心なのかもしれない、そう思いながら。

「篠原君の隣にいる自分が、彼と一緒に生活するということが今はどうしてなのか全然考えられないの。店のことが心配なんていうのは、ただの言い訳なのよきつと。もちろん、一樹のせいじゃないわこれは、あたし自身の問題なのよ」

一樹は何も言わなかった。もう一度ミネラルウォーターを口にすると、また軽くむせた。

五年前も、この季節だったか。小さかった一樹が立ち向かった病魔はとてつもなく強大で、なすすべもないのではないか、そんな思いすら抱かせた。またあの辛さを一人味わわせてしまうのだろうか。それとも今度は日本にいる実の両親に、救いを求めた方がよいのではないか。

桃子の心は揺れ続けていた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2010 keik
itagawa All Rights Reserved

#6

五年前、一樹が初めての手術を受けて三ヶ月が過ぎたあの日、桃子は彼の荷物を持って退院前の検査が終わるのを一人待っていた。京成大病院の広い明るいエントランスホールで、毎日通ったこの整形外科とも取りあえずお別れできるのかと、ほっと安堵のため息をついた。どうしてそこまで、血のつながりもない自分がする必要があるのか。桃子は自分自身のそんな行動にとまどっていた。これじゃ、篠原のことは笑えない。自分だって人の良すぎるお節介じゃないか。でも、とても放っておけなかった。

一樹が来た。

「週一回は外来に様子を見せに来ること。二ヶ月したら化学療法をするから短期入院だ、忘れるなよ。それから、無理はするな。まだ君の身体は病氣と闘っている真つ最中なんだからな」

「わかってる」

「リハビリプログラムも毎日ちゃんとやるんだよ。痛いかもしれなけれど、今しっかりと動かしておかないと」

「ちゃんとやるよ、約束する」

「何かあったら次の通院日を待ってたりしないで、すぐにここに来るんだ、いいね」

若い主治医の大河原は、心配そうに退院する一樹に声をかけ続けていた。もうすぐ十六歳の誕生日が来る。誕生日には家で過ごせる、今年は一人じゃない。一樹は心に広がったそんな思いをあわてて飲み込んで、大河原に向き直った。

「大丈夫だよ、大河原。桃子さんだっているんだから」

「そうだったね。君よりずっと頼りになるお姉さんがいるんだっただな。じゃあお姉さん、よろしく頼みますね」

「はい、わかりました」

「じゃあな大河原、またね」

「がんばれよ、一樹くん」

半年前、一樹が感じた左手の違和感は、徐々にひどい痛みを伴うものになった。多摩にいる叔母に連絡を取り入院をした一樹に、でも結局付き添ったのは赤の他人である桃子だった。

彼らの背中を見送りながら、病棟担当の看護師が不満げにつぶやく。

「とうとう一度も来ませんでしたね」

「ん？何が？」

「一樹くんのご両親」

「そうだね」

「そんなに世界的指揮者って忙しいんですかね」

「……どうだろう。」

「芸術家の息子やるのもなかなか大変ですね」

大河原は黙って看護師の肩を叩いた。

「ぼくは横浜には帰らない！」

叔母の伸子に、一樹はきっぱりとそう言った。

退院した足で一樹は、多摩の叔母の家に寄った。かたわらで心配そうに桃子が寄り添っている。

伸子は独身で、一樹の祖父が始めたバイオリンメソッド教室の代表を務めていた。全国規模で教室を展開し、会員数も八千人を超える。その代表ということでも多忙で、なかなか普段は一樹とも顔を合わすこともなかった。孝一郎の妹だが、性格も違い、ぶつかり合うことも多かった。今回のことで一樹を心から心配はしていたが、何しろ忙しく、そばについてやることは物理的に不可能だった。

「何言ってるのよ一樹。そりゃ兄さんたちはパリだけど、私が帰ってこいってもう一度話してみるから」

「無理だよ。入院中一度だって、電話にも出なかった」

一樹が寂しそうにつぶやく。

「それに、帰ればいろんなこと思い出しちゃうし。僕、桃子さんちに行く。ねえいいでしょう?」

伸子が目を見開いた。桃子は何も言わず、指を組んで二人のやりとりを聞くばかりだった。

「何を言い出すの。第一あなた東京に住んだらどうやって学校に通うつもりなのよ」

「学校はもう、行けないよ。今通ってる所は音楽高校なんだよ。ぼくはもうピアノ弾けないんだし。どうせ病院にはずっと通わなくちゃ行けないんだろう? だったら横浜からよりも下北沢の方がずっと近いよ」

「うちに来てもらってもいいけど、私も仕事が続くと家に帰れないしねえ」

「多摩なんか嫌だよ、全然遠いじゃん。それに、一人は嫌だ」

「神原さんにご迷惑がかかるでしょう。一樹あなたねえ」

「うちは大丈夫ですよ、家族が増えればにぎやかで楽しいし、一樹くんのご事は本当の弟みたいに思っているから」

顔を上げて桃子はそう言った。本心だった。どっちにしろ、この状態で一樹を独りぼっちにはさせたくなかった。

「神原さん……。一樹にも実の姉だっているのに、他人のあなたの方がずっと一樹のことを思ってくださっていて。本当にごめんなさいね」

「少しの間だけでもいいんだ、お願いだから」

一樹は涙をこらえ、じっと桃子を見つめた。彼女は、大丈夫だと聞いたげに精一杯の笑顔を返した。

「三階に上がるのは初めてでしょう。使ってなかった部屋だから少しほこりっぱいかもしれないけど。窓開けるわね」

通い慣れたはずのジャムズだったが、桃子たちの居住スペースに入っていくのは初めてだった。二階には台所とリビング、客間、そ

して三階に小部屋が三つ。狭い造りに無理矢理部屋を押し込めたよ
うな、都会の小さなビル。一階のライブスペースがゆったりしてい
ることに比べると、勇次らが何に重きを置いているかは明らかだっ
た。

「狭くて驚いた？」

「ううん、そうじゃなくて」

「荷物置いたら着替えて寝なさいよ。ほらパジャマ」

「大丈夫だよ寝てなくなつて。ねえ、今夜ジャムズのライブ見に行
つても、いい？」

「大河原先生が安静にしてなさいって言ったでしょう。ダメよ、
おとなしく寝てなさい」

「いいじゃん、せつかくジャムズにいるのに」
「ダメ」

けち、一樹は舌を出して拗ねてみせる。桃子は相手にしない。ど
んどん毛布やら掛け布団やらを引き出してきた。それを手で払いの
けるようにして、一樹はその辺りに腰掛ける。

「CD持ってきてあげるから。何がいい？マイルス？それともフレ
ディ・ハバードかしら、チェット・ベイカーもあるわよ」

「……ハイドン」

「えっ？」

「ハイドンがいい。ハイドンのトランペットコンチエルト」

「わかった。ちょっと待ってて。ちゃんとベッドに入っているのよ」
確かどこかにモーリス・アンドレの名盤があったはず、と桃子は
階下に降りていき、ジャムズの一面を占めるCDラックを目で追っ
た。クラシックなんて普段は聴かないが、客の中には音大生も多い。
彼らが自分の気に入ったCDを持ってきては勝手に棚に押し込んで
いくので、知らず知らずのうちにいるいろんなジャンルの盤が集まる
ようになってしまったのだ。ハイドンのトランペット協奏曲は、で
も、篠原が持ってきたものだったか。あまりなじみのない曲なのに
題名に聞き覚えがあったのは、そうなのかもしれない。棚の前でし

ばらく格闘していたがようやく見つけて二階に上がると、一樹はすやすやと寝息を立てていた。疲れたのだろう、服も着替えず、栗色の柔らかい髪があとけない顔にかかったまま、ベッドの片隅に小さくなつて。

「全く、しょうがないなあ」

それにそつと毛布を掛けてやる。一樹の右手に銀色に光る小さな何か握りしめられていた。

マウスピース。

それを見て桃子は胸が詰まった。幾筋かの涙の跡。

手のひらで一樹の頬を包み込むようになると、桃子は彼の顔にかかる髪をその手で優しく払った。

幾日かは静かに過ぎた。身体はまだ本調子ではないのだろう、一樹はベッドにいることの方が多かった。それでも食卓と一緒に囲む時、家族の団欒のようでうれしいのか、一樹は絶え間なくしゃべり続け、たわいもない話に笑顔をはじけさせた。

「ねえ、夕食は何がいい？」

何気なく桃子が一樹の部屋のドアを開けた。ハツとしたように一樹は何かを後ろ手で隠した。カタン、何かが転げ落ちる。それは黒いファイバー製のストレートミュートだった。

「一樹、何をやってたの。手に持ってるのは何？まさか、あんたトランペット吹いてたんじゃ」

「……ダメ？」

「ダメって、無理しちゃいけないって言われてるでしょう。まだ治療中なのに楽器なんて負荷をかけたら」

「音は出るよ！右手だけだって、ほらちゃんと」

一樹は右手だけで楽器を支えると、低音域のパッセージを吹き始めた。時折楽器がふらつく。音もそれに伴って不安定に揺れ続けていた。不意にパッセージが途切れる。一樹は右手で楽器を握りしめ

ると、胸に押し当てて悔しそうに唇を噛んだ。

「一樹、もつと良くなつてから、ね。今は無理しちゃいけないわ」
桃子が優しく声を掛ける。彼から楽器を取り上げようと腕を伸ばすが、一樹は頑なに楽器を抱きしめたままだった。

ため息をついて桃子はそばのイスに腰掛けた。昔桃子が使っていた木製の頑丈なライティングデスクの上に、何の気なしに視線を走らせる。そこには見慣れない薄いパンフレットのようなものが置かれていた。

「東日本……学生音楽コンクール募集：要項、トランペット部門。どうしたの、これ。」

「……」

「一樹!?!」

「出たいんだ！中学に入ってからこのコンクールに向けてずっと練習してきた。五年にいつペンしかトランペット部門はやらないんだから！」

「無茶なこと言わないで」

「もうこれで終わりにするから、これであきらめるから！ねえ、いいでしょう？やってみたいんだ！」

「だって、片手じゃ吹けないでしょう。どうやって楽器を支えるつもりなの」

「それは……でも音は出るんだ！ちゃんと音は出るんだから」

「左手を楽器に固定できればいいんだよな、な、一樹くん」

いつの間に来たのか、篠原が桃子の後ろから声を掛けた。あわてて桃子が振り向く。そんな視線にはお構いなしに篠原は部屋に入ると、一樹に近づき、彼の左手を持つとそっとトランペットに近づけた。

「何してるのよ篠原くん！一樹に無理をさせないで！」

「無理じゃないよ、確かに音は出るんだからあとはさ、どうやってこれを固定するかだよ」

「コンクールなんて無理に決まってるでしょう?」

「やってみなけりゃわからないじゃん。こんな風に頭でいろいろ考えてあとで後悔するくらいなら、やってみればいいんだよ」

縛って固定すればいいのかな、とぶつぶつ言いながら篠原は、一樹の手を取って楽器に押し当てた。一樹は篠原の行動にあっけにとられ、何も逆らわずにされるがままになっていた。

「縛るのは、痛いよね一樹くん。ガムテープは、もっと痛そうだよ。どうしよつか」

「篠原くん、いい加減にして！一樹は病気なのよ、楽器だって持てないのよ、吹くことだってできるかどうかわからないのに、無責任なこと言わないで！」

「どうしてさ。このままじゃ一樹くんだってあきらめきれないよ。ずっと目標にしてきたコンクールなんだぜ。何も優勝して一位になれなんて誰も言っていないだろ。出場して大勢のお客の前で演奏して聴いてもらって、結果なんておまけだよ。やるだけのことはやってさ、それでやっと自分自身も納得できるんじゃないの？」

「……わかった、このパンフレット持ってきたの、あなたね」

「山場の売り場には束になって置いてあったからね」

「あなたがたきつけたんでしょう！一樹にはまだ療養が必要なのに、どうしてそんな事するのよ！」

「違うよ桃子さん！ぼくが頼んだんだ！ぼくが、どうしても出たいからって」

二人の険悪な空気に、あわてて一樹が口を挟む。ぼくのことではなかなかしないですよ、と小さな声でつぶやく。

「どうしても、コンクールに出たいの？」

「……うん」

一樹は立ち上がると、楽器をそっとケースの上に置いた。銀色に輝くトランペットを辛そうに見つめる。

「これであきらめるから、もう二度と楽器は吹かないから、これで……最後にするから」

唇を噛みしめながら、一樹はうつむいてそう言った。華奢な身体

がますます幼く見えて、桃子は胸がいつぱいになった。

「大河原先生がいいって言ったら、いいわ」

「本当？ホントにいいの、桃子さん？」

「あたしの許可なんていらないわよ、あんた自身のことなんだから。でも主治医がダメって言ったら絶対にダメよ、それは約束できる？」

「何とか説得してみるよ、な、一樹くん」

「あなたが何で説得するかなあ、ややこしくなるから篠原くんは口を挟まないで」

桃子の言葉に、拗ねたように篠原が黙り込む。子どもじみた表情に思わず桃子も頬が緩んだ。

「一樹、袖を見せてみて」

桃子が一樹の左腕を掴んで持ち上げる。音高の制服の袖の下から赤く染まったワイシャツが見て取れた。一樹が腕をあわてて引つ込める。だが、何かに当たったのだらう、苦痛に顔をゆがめる。

東日本学生音楽コンクールは、久々のトランペット部門開催ということで、幅広い年齢層の参加者であふれかえっていた。一樹のような高校生から、大学院生、研究生まで、若い管楽器奏者たちが二次予選出場をかけて、日頃の成果を出し合っていた。

一樹は動かなくなった左手に、お手製の革のプロテクターをはめた。篠原が山場楽器のリペアマンと相談し、試行錯誤しながら作り上げたものだった。手のひらになじむよう切れ込みを入れ、一樹の手のサイズに合わせベルトを縫いつける。お世辞にも見栄えがよいとは言えなかったが、当初の目的通り、何とか楽器は固定できた。ただ、取りあえず動かないでマウスピースが当てられた、ということだった。

「あんたねえ、傷口から出血しているじゃない」

「擦り傷と同じだよ、大したことない」

一樹は口をとがらせた。今度は篠原が左手を取ってまじまじと見る。一樹が手を引こうとするが篠原にがっちり押さえつけられて動

きが取れない。

「あーあ、革に擦れて縫ったところのかさぶたがはげちゃったみたいだね。この革がよくないのかなあ」

「きついんだよ、落ちないようにって篠原さんがぐいぐい引っ張るから」

一樹がふてくされてそうつぶやく。そりゃ悪かったな、と篠原がやり返す。

「痛む？」

桃子が顔をのぞき込む。一樹はそっぽを向いて別に、と返した。

「痛くて吹けなかったのか。だとしたら本当に悪かったな」

篠原がすまなそうな顔をした。

「篠原さんのせいじゃないよ、傷口が痛かったわけじゃないし。ただ……」

「ただ？」

もう限界だった。無理を重ねた左腕はしびれて感覚を失っていて、楽器を正しい位置に支えることができないでいた。楽器がバランスを崩せばアンブツシャーにも右手のフィンガリングにも影響を及ぼす。わずかな乱れはすぐさま一樹の繊細な音色と正確なピッチに影響を落とした。きちんと吹けなかった。でもそれは始めからわかっていたことなのだ。

午前と午後にわたる長丁場の予選会は、病み上がりの一樹には厳しすぎた。腕が痛む。指がしびれる。唇の位置を無理に合わせようとして右腕を微妙に傾げた状態のまままで吹いたせいも、身体中がきしんでいた。音を出すのが精一杯だった。

結果は見なくてもいい、一樹はそう言い張って聞かなかった。篠原が必死に引き留める。

「いいんだよ、もう。結果なんて見ないでも自分でよくわかってる。もう帰ろう」

「あきらめるなよ。例えおまえの言うとおりダメだったとしても、最後まで結果を受け止めるよ。男だろう？」

一次予選の結果は間もなくロビーに張り出されるはずだった。気の早い一部の出場者たちがそちらへと集まり始めていた。だが一樹は帰ろうと言い続けた。口をぎゅっと結んで表情は硬かった。よほど悔しかったのだろう。篠原の声も耳に入らないようだった。

人のかたまりの中に佐々木教授の姿を認めた。一樹が小学校一年生の頃から、ずっと教えを請うていた。突然レッスンを長期に休んだ時も、プロテクターをして痛々しい姿で再開を願った時も、彼は快く一樹を受け入れてくれた。教授の門下生たちも多くこのコンクールに出場していた。その生徒たちの輪の中心で佐々木教授は一人一人に声をかけていた。

「ほら、一樹も先生に何か言っただけでいいの？」

桃子が促す。それに何も答えない。一樹はわざと教授と反対の方向を向く。すねちゃって、本当にこの子は。桃子がため息をつく。

「結果を出したかったの？」

「努めて穏やかに桃子がそう尋ねる。」

「そうじゃないよ」

一樹は楽器ケースを足元に置いた。さっきめくられた袖を片手で引っ張り直して、左手に視線を落とす。血はもうすっかり固まってしまつて茶色いシミを残していた。白いシャツに付いたこのシミはもう落ちることはないだろう。だが、一樹がここの制服を着ることはこれから先なのだ。このコンクールが最後、これが終われば学校を辞める。そう決めた。

「きちんと吹けなかったのが悔しい。自分のベストが出せなかった。僕はもつとちゃんと吹けるはずなのに。それが悔しくて」

一樹が吐き出すように言った。

「仕方ないじゃない。今の一樹の状態ならここに出場することだって……」

「違うんだ。わかっていたことなのに自分でコントロールできなかった。篠原さんがリペアのおじさんとこれを作ってくれて、桃子さんが自分の家に住まわせてくれて、佐々木先生がもうすっかり見捨

てられたと思つていたのに、またちゃんとレッスンを付けてくれた。なのに自分だけが甘い考えでちゃんと向き合つてなかった。悔しいんだよ自分の甘さが」

何かをこらえるかのように上を向く。一樹は続けた。

「結果じゃないのはわかつてる。最初から一次を通るなんて考えてなかった。出られるだけでいい。でも演奏はちゃんとしたかつたんだ。大勢の観客に僕の音楽をちゃんと聴いてもらいたかつたんだ。これが、これが最後になるのに」

ゆるやかな階段の向こうから歓声が上がる。結果が張り出されたのだらう。人の流れが速くなつた。

「五十一番だつたよな。俺ちよつと見てくるよ」

「いいよ篠原さん。もういいから」

「自分で見る勇気がないんだつたら、俺がしつかりとこの目で見てきてやるから」

篠原が声を張り上げた。それに反発するかのように一樹が言い返す。

「自分で見るよ、自分で見るから！」

篠原が一樹の楽器ケースを持ち上げる。そしてそのまま軽く肩を押す。さあ行つてこい、そんな気持ちを含めた。一樹は頼りなさげに歩き出した。結果を知るのが怖いのだろうか。何を今更。自問自答する。

人の壁の向こうに数字が並んでいる。二次予選に進めるのは全体の半数。本戦に残れるのはたつたの五人だ。

東日本学生音楽コンクールの本選に残れば奨学金が与えられ、成績上位者には留学のチャンスもある。一樹は中学に入った頃からこのコンクールに焦点を合わせて練習を重ねてきた。奨学金が欲しいんじゃない、留学したいわけじゃない。入賞すれば父も母も僕を認めてくれるかもしれない。そんな微かな、でも切実な思いがあつた。今は。

今となつては、もう上位入賞がどうのなどどうでもよかつた。こ

の先、トランペットを吹き続けることだってもう無理なことなのに。この手で、この腕で、プロの演奏家になることは不可能だ。それは自分が一番よくわかっていていることじゃないか。

それでも、コンクールに出たかった。もう一度演奏がしたかった。大勢の人に聴いてもらいたかった。最後の演奏。これで気持ちにけりをつけなければ。

一樹は目をつぶった。怖くてすぐには二次予選出場者名簿を見ることができなかった。息を大きく一つ吸う。もう一度、せめてあと一度。

意を決して一樹は目を開けた。最初の番号から順に見ていく。一番、四番、十二番…。

「……あつた」

見間違いではないだろうか、何度も見返した。確かにある。自分の番号が名簿には書かれていた。

「ねえ、桃子さん！篠原さん！あつたよ、ぼく二次予選に出られるよー！」

あわてて振り返り、二人にそう告げる。二人とも笑顔だ。やったな一樹くん、篠原が一樹の髪をぐしゃぐしゃにかき回す。

「ほら、行つてらっしゃい」

桃子が一樹に声を掛ける。

「あつ」

視線の先に佐々木教授がいた。

生徒たちの群れに向かって歩き出す。何と云えばいいのか。一樹は頭の中で言葉を反芻する。

教授がこちらに気づいた。目が微笑んでいる。

「先生、おかげさまで一次を通りました。あのぼく…」

「おめでとう、二次へ向けての練習をしなくてはいけませんね。明日からレッスンにいらっしゃい」

教授の言葉は温かくも短かった。二次予選は一週間後、のんびりしている暇はないのだ。

もう一度吹ける。演奏することが出来る。大勢の観客の前で僕の音楽を。

一樹はその喜びをかみしめていた。

「それで二次予選は」

グラスを磨きながら勇次がのんびりとした口調で一樹に尋ねる。

ジャムズの昼下がりは道路に面した側の大きな窓から光が射し込み、夜のとげとげしさを消していた。

「気持ちよく演奏できたんですか？」

そう言つて笑顔を向ける。マイルスデイビスのCDを聴きながら、すごい勢いで楽譜に音符を書き込んでいた一樹は、顔を上げて勇次を見た。左手には真っ白い包帯が巻かれている。二週間は絶対に動かさないこと、病院の先生にくぎを刺された。もうあんな無茶はしない、必要もない。コンクールは終わったのだ。

「楽しかったよ。ジョリヴェのトランペットコンチエルトを吹いたんだけどさ、お客さんはみんなしっかりと聴いてくれたしノーマスで吹けたし指も動いたし。何よりも音がすごく伸びて本当によく響いたんだ。あんなに気持ちよく吹けたのは初めてかもしれない」

「本選に残れなくて残念でしたねえ」

勇次の声は変わらないのんびりとしていた。それが一樹にはうれしかった。そう確かに残念だ。でも悔いはない。

「高校の手続きすませてきたわよ」

ドアを開けて桃子が入ってくる。薄手のコートをハンガーに掛けるながら一樹に話しかける。

「ありがとう桃子さん。これで全部、かな」

「辞めちゃって本当によかったの？休学延長もずいぶん勧められたわよ」

イスを引き寄せて桃子が腰掛ける。形のよい足を組み、膝に手を置く。

「いいんだ、どうせもう楽器は吹けないしピアノも弾けないし、あ

の学校にいる意味なんてないじゃん」

「ご両親は何だつて？多摩の叔母様とはお会いできたけど、勝手に退学なんてして叱られない？」

この間、パリにいる両親には一応電話を掛けてみた。相変わらずの短い会話、無駄だとは知っていたが学コンで二次に進めたことを話してみた。入賞しなければ意味はない、それが父親の返事だった。高校も辞める、家には帰らない、言い捨てて電話を切った。

「あの人たちは僕に興味なんてないから」

桃子が悲しげに一樹を見た。これからどうするつもり？と声を掛ける。

「僕の口座に入金はあるんだろ。それで暮らすよ」

多摩にいる叔母が、桃子の家で世話になってることを伝えると、両親はかなりの額を生活費にと送ってくるようになった。ただ、それだけだった。言葉の一つで、救われるのに。桃子は自分たちがないがしろにされたことより、一樹のことを思うと切なかった。

アドリブソロのメロディーを耳で聴いて譜面に起こす。最近一樹が凝っていることの一つだ。クラシックは聴かなかった。避けているようにも見えた。勇次に教えてもらいながら、ジャズの名盤と言われているCDを一つ一つ聴いていく。放っておけば食事を取ることも忘れて一日中ジャズを聴いていた。

「もう一樹くんはトランペットを吹かないんですか」

勇次がグラスの輝き具合を光に照らしながらそう言う。一樹が目を上げる。でもすぐに目を伏せた。

「吹かないんじゃないんだよ、マスター」

「手の傷が治ったら、ジャズを吹いてみたらどうです」

「ジャズを？」

一樹の手が止まった。何を言い出すんだろう、いぶかしげな表情だ。

「父さん、一樹はね」

「ジャズはクラシックほど厳密さを問われることもないし、何、少

しくらいピッチがずれていようとリズムが揺れていようと、誰も気にしませんよ」

勇次がグラスを置いて改まって一樹に向き合った。一樹も体を起こし勇次を見つめる。

「ぼくはもうトランペットは吹けないんだ」

自分に言い聞かせるように言葉を発する。

「そうでしょうか」

勇次はガラスの向こうを見やるように目を細めた。

「ジャズは何でもありですよ。片腕のプレーヤーがいてもいいじゃないですか。もちろんちゃんと身体を治してお医者様からOKをもらってからになるでしょうが」

「父さん、一樹に無用な期待をさせるようなこと言わないで。無責任よ。期待させといてもし吹けないことがはっきりしてしまったらこんなに残酷なことないでしょう？」

桃子はたしなめるように勇次に言った。

「プロの演奏家にならなくてはいけませんか。もっと気楽に音楽を楽しんでみてはいかがですか」

「別の仕事を持って休みのたんびにジャズのまねごとをして遊べって。そんなことするくらいなら二度と吹かない方がよっぽどいい」
苦しげに一樹はそう言った。

「一樹くんはストイックですねえ。音楽は楽しくありませんか」
緊張を解くように笑顔で勇次が尋ねる。

「ジャムズはね」
言葉を続ける。

「ここから巣立っていったプロの方も大勢いますが、演奏することを仕事に選ばなかった人たちもたくさんいるんですよ。演奏してお金をもらうことが偉いことなんですよ。私はね、違ふと思うんです。創造すること、新しい物を作り出すこと、他の演奏者から互いに刺激しあい高め合う演奏をすること、それができればプロであるとかアマチュアであるとか、関係ないと思うんですよ。ジャム

ズはそんな人たちが集う場所にしたいと思っっているんですよ」

勇次はカウンターから出て一樹のそばに腰を下ろした。目が微笑んでいる。見守るような温かい目だ。大きな手を広げて一樹の頭に乗せる。

「私もきみも、明日交通事故に遭って身体中が動かなくなるかもしれない。そんなことは誰にもわからないんです。でも、音楽を楽しむことはできる。どんな状況でもその人なりに音楽に触れることはできる。格好悪くてもいいじゃないですか。どうですか一樹くん」

勇次の言葉は続く。

「もちろん演奏者としてではなく、私のように音楽を受け取る側に徹するというのも一つの方法だと思います。今、一樹くんが聴いているように、ね」

「マスターの話は難しくってよくわかんないよ」

視線を下に落としたまま、一樹がつぶやく。

「桃子さんの言うとおり、もう絶望するのはイヤなのかもしれない。傷つきたくないんだ。怖いんだ」

「そうですね。無理には言いません。ごめんなさいね、嫌な思いをさせてしまいましたかね」

一樹が黙り込む。ペンは止まったままだ。CDは最後の曲のエンディングを迎えていた。

店に静寂が訪れた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2010 keik
itagawa All Rights Reserved

柳よ泣いておくれ　　Willow Weep For Me

#7

一樹がジャムズに住むようになって、三年が過ぎた。

この頃では店のセツションにも顔を出し、すっかり常連の年季の入ったバンドマンたちにも、かわいがられるようになっていた。ジャムズだけではなく、他のライブハウスからも声がかかり、名の知れたグループのエキストラミュージシャンをこなすこともあった。若く、譜面にも強く、ハイノートも難なく吹きこなす。誰も彼の動かない指のこともピッチのずれも、気にするものはいなかった。一樹はジャズというフィールドで生き生きと生きている。

もうじき十八歳になるところだが、十も二十も年上の連中とつるんで、酒を飲み、タバコも覚えた。その都度桃子はたしなめたが、すっかり大人の付き合いを覚えてしまった一樹には、聞けるはずもなかった。今夜もどこかでライブがはねた後、飲んでいることだろう。鍵は持たせてある。桃子は店と部屋の鍵を閉めると、階段を上がっていった。

不意に物音がした。

「誰？一樹帰ってきたの？」

桃子はガウンの前を引き寄せた。時計は十二時を回っている。いつもならまだ店にいる時間だが今夜は早じまいをしたせいで、もう勇次は休んでいた。しんと家中が静まりかえっていた。

がたん。

まただ。桃子は音のする方へと向かっていった。ドアの向こうから薄く光がもれている。

「一樹？」

ドアをそつと開ける。一樹が床に座り込んでいた。右手で髪をかき上げ、肩で息をしている。

「飲んできたの？あんだね、自分がいくつだと思ってんのよ、ほど

ほどにしないと」

不意に一樹が立ち上がる。桃子の顔が目の前にあつた。いつの間にか桃子よりずっと背が高くなつていた。気づかなかつた。こんなに大きくなつていたなんて。

一樹が桃子の頭越しに右腕を壁につける。そのままぐいと顔を近づける。もう息がかかる距離にいた。呼吸があらう。じつと見つめる。桃子は思わず目をそらした。

そのまま一樹がもたれかかる。桃子は胸の鼓動が早くなるのを悟られまいと、息を詰めた。両腕で一樹を押しやるうとする。だが、逆にその腕を掴まれた。

「……!?!」

ものすごい力で一樹が桃子の手を握りしめる。片手とは思えないほどだ。やめて、桃子の吐く言葉が吐息のように聞こえそうで、桃子は焦つた。一樹は何も言わない。ただ力を込めてくる。顔を首筋に近づける。一樹の薄いやわらかい唇が、桃子の皮膚に触れる。そしてそのまま何かを求めるかのようにそつと顔を上げる。首、そしてあご、桃子の形のよい輪郭をなぞるように唇がうごめく。いや、やめて。言葉にならない言葉が宙をさまよう。一樹は力を緩めないまま、桃子の唇にそつと触れる。桃子がぎゅつと唇を噛む。顔を横に向けようとすると、押さえつけられたまま何もできない。あつ、ふと桃子の口が開く。その一瞬、一樹の身体がびくつと震えた。桃子が力任せに一樹の身体を押しつける。ほんのちよつと上体が傾いだ。桃子は一樹の身体の下から身をかわすと、近くにあつたピツチヤーを掴んで、思い切り中の水を一樹の顔めがけて浴びせかけた。

ばしゃん。

一樹の身体が離れる。目を見開いて信じられないものでも見たかのように桃子を見つめている。

桃子は大きく息を吸った。

「あんたの周りの女たちと一緒にしないで」

歯を食いしばり、その間から吐き捨てるように言う。

顔を水で濡らして、一樹は立ちすくんでいた。

苦しげに顔をゆがめ、したたる水をぬぐいもせず。

「桃子さんは…僕が嫌いなの？」

それだけの言葉をようやく絞り出す。

「本当の…」

桃子は息を整え、できるだけ落ち着いて聞こえるように一言一言かみしめるように言った。

まるでそうすることで、一樹との距離を隔てようとするかのよう

に。
「あんたのことは本当の弟だと思ってる」

そのまま時が止まってしまったようだった。二人とも何も言わない、いや言えないでいた。

ふと、一樹の身体から力が抜けた。ゆるゆると足を運び、黙ったままドアを開けた。

「僕はもう十八だ」

顔を桃子に向けることもせず、そうつぶやく。桃子は目を背けた。

「弟なんかじゃない」

ドアが静かに閉まる。

一人リビングに取り残されて桃子は、初めて涙をこぼした。

桃子は、いつもの時間にどうしても起きあがることができなかった。気持ちが重くてどうしようもなかった。顔が涙でむくんでしまったかもしれない。悩んでも悩んでも、答えなど出るはずもなかった。重たい気持ちのまま階下へと降りていった。今日も店は開けなければいけないだし、やることは山ほどある。例え桃子がどんな思いでいたとしても。

リビングのドアノブに手をやる時、昨夜の情景が脳裏をよぎった。頭を振ってその残像をふりほどく。何もなかったのだ。あたしたちは何もなかったのだから。朝になれば夜の魔法は解ける。いつもと同じように、いつも通りに。

そんな心配はドアを開けるとともにふつとんでしまった。一樹と勇次はいつもと変わらず朝食を取っていた。いつもの生卵納豆ご飯。朝食は勇次の担当だ。

「あーおはよう。今朝はのんびりなんだねえ」

「桃子さんおはよう。先食べちゃってるよ」

「お・は・よ・う。いいわねー悩みなんかなさそうで」

思わず嫌みな口をきいてしまった。

「桃子さんにもご飯よそつてあげるからねー。山盛り？真ん中凹ませる？」

「いい、いらない。自分でやるから」

桃子は自分のためにコーヒーの準備をすると、わざと二人と離れて座った。何も食べたくない。この二人と一緒になんて。

「ここで重大発表があります」

一樹がはしゃいでいる。口もききなくなかった。やっぱりガキなんだわ、ただのガキ。桃子の気持ちを知ってか知らずか、一樹は声を張り上げた。

「今日からおれはバイトを始めます。バンドのトラで一週間地方に行つて来ます」

「バイトですか一樹くん。そりやまたどうして」

勇次が、これまたのんびりと合いの手を入れる。

「車を買いたいからです。もう候補はいくつか見繕ってあるんだよね」

「ちよつと待つてよ、あんた免許なんて持つてたっけ!？」

思わず桃子が口を挟む。第一、一樹が十八歳の誕生日を迎えるのは来週で、まだ免許なんか取れるはずもないのに。

「ふふふつ、免許は来週取ります。絶対取ります。免許センターに行つて試験受けてきます」

呆れた。教習所にも行かず一発試験で合格する気になつてるって言うの？

「車買つたら桃子さん、乗せてあげるよ」

絶対にイヤ、そんな声を聞こえなかったかのように受け流す。

「というわけで、掃除当番と買い出し当番、みなさんよろしく」

「冗談じゃないわ。帰ったら二倍にして返してもらおうから」

おに、あくま、一樹が桃子に向かって舌を出す。

そして桃子に向かっておれにもコーヒー、とカップを差し出した。

何が「おれ」よ、かつこつけちゃって。似合わないわよ、おぼっちゃん。桃子は心の中でそう毒づいた。

あなたに入れるコーヒーなんかいいわよ、冷たく言い放つ。

「いいよ店で飲むから」

一樹が拗ねた声を出す。あのね、言いかけて桃子は一樹を見た。

一樹がまっすぐに桃子を見つめていた。視線が一瞬ぶつかり合う。桃子は思わずひるんだ。

一樹は立ち上がり、何も言わず桃子の脇を通り過ぎた。不意に柑橘系の香りが辺りに漂う。

コロソナ？

いつの間に大きくなっていったのだろう。いつの間に一樹は成長していたのだろう。気づかなかった、いや気づかない振りをしていた。一樹はいつまでも出会った頃の十四歳ではないのだ。あれからもう四年もたっているのか。そして成長期の四年はとてつもなく大きい変化を彼にもたらすのだろうか。この先、どうやって彼と暮らしていけばいいのだろうか。弟でも恋人でもなく、この中途半端な関係のまま、何もなかったように過ごすことができるのだろうか。そしてあたしは本当はどうしたいのだろうか。

食欲のない胃にコーヒーは苦かった。

カップを置いて桃子は大きいため息をついた。

「タバコを止める、酒をやめる、夜遊びはするな、車に乗るな、拳げの果ては高校に行け？桃子さん変だよ！何だよ急に保護者づらしてー！」

一樹がリビングのテーブル越しに食ってかかる。桃子は表情が硬

いままだった。視線を下に向け何も言い返せないでいた。あんたのためなのよ、その言葉を飲み込む。沈黙が怖い。何か話さなくては思えば思うほど何も言葉が出てこなかった。

高校のことはずっと考えていたことだった。音高を中退した一樹はこのままでは中卒の学歴しか残らない。その中学だってレスンやコンクールの準備のために行かないことも多かった。いくらミュージシャンに学歴が必要ないと言っても、それが本当に一樹のためになるのか。もし他の職業に就きたいと思った時、学歴がネックになって苦しむのは彼自身なのだ。

年齢は過ぎてしまったけれど今からでも高校へは行ける。何も全日制の普通高校に行かなくとも今なら通信制も単位制もある。どんな形にせよ、一樹には学校生活が必要なのではないか。でもその思いをうまく一樹に伝える自信は桃子にはなかった。目をそらしたまま黙ってコーヒーを入れ始めた。一樹のいらだちが桃子にも伝わってくる。父さんに言ってもらえばよかった、かすかな後悔が頭をよぎる。温かいカップを手に桃子は腰を下ろした。

「おれがそんなに目障りかよ。昼間っからうちにいるのがそんなに煩わしいのかよ」

「そんなこと言っていないわ。ただ」

「何で、何でそんなに急に距離を取ろうとするんだよ。桃子さんはおれの親か？姉貴か？そういう役回りがしたいのかよ」

「あたしはあんたが心配なだけよ」

目を合わせられない。本当はどんな気持ちからなんだろう。一樹を突き放したいのか。距離を取りたいのか。そんな気持ちがないと言えば嘘になる。だから何を言っても自分を裏切っているような気がして桃子は胸が苦しくなる。コーヒーは手の中で少しずつ冷めていく。だのに一口も口を付けられないでいた。

「そんなにおれのことを嫌い？まだ怒ってるの？だったら謝るよ、もう二度とあんな事しない。だから……」

「関係ないわ」

自分の声の大きさに自分で驚きながら、桃子は顔を上げた。一樹の表情が苦しげにゆがむ。そうじゃない、一樹を苦しめたくて言っているわけじゃない。でもどう言っても一樹には伝わらない。それがもどかしい。

「タバコは」

言葉を選んで桃子は言い続けた。

「管楽器奏者のくせにタバコがいい訳ないじゃない。肺ガンのリスクだって高くなるし、何よりあなたはまだ未成年なんだから」

「ヘビースモーカーのハイノートプレーヤーなんてざらにいる」

そんなことを話したいんじゃない。お互いがわかっているのだから出る言葉はどうでもいいことばかりだ。

「お酒だって、今からそんなに飲んでいたら心配よ。家でまで飲むことないじゃない」

「量は減ってるよ、桃子さんに言われて全然前より飲んでないよ」
だから、そんなことじゃない。もどかしい思い。

「夜遊びはしてない、桃子さんだって知ってるだろう？ここんとこ毎晩ライブとセッションしかしてない、ホントだよ。車だって言いつけ通り買っていないじゃない」

「知ってるわよ」

「じゃあ何で!？」

一樹はテーブルを拳で殴りつけた。鈍い音しかしなかった。ぎゅっと手を握りしめる。こんな事を話したいんじゃない。

「高校は行っておいた方がいいと思う。あんた自分の将来を考えたことある？このままどうするつもりなの。プロのミュージシャンになるつもり？だとしてもまだ早い。もっとたくさんいろいろ経験して勉強もしてちゃんとした大人になるために」

「ちゃんとした大人って何だよ。高校行けばちゃんとした大人になれるって言うのかよ。学歴なんかいらぬ。おれは」

「あんだだって横浜の高橋の家にいれば、高校だけじゃなくて大学だって留学だっていくらでも行けるのよ!」

目を閉じてしまったのは後ろめたさからなのか。桃子は一樹をまともに見られなかった。言うつもりもなかった言葉、でも自分では止められなかった。

「何だよ、それ」

一樹の声がか細くかすれた。深く傷つけている、わかっている。でも口にはせずにいられない。

「あんたの将来を台無しにしているんじゃないかって不安なの、心配なの」

一樹が押し黙った。泣き出しそうな顔をしている。きっと自分も同じ顔をしていることだろう、桃子は唇を噛んだ。

「高校に」

力無くイスに座り込んで一樹は言った。

「行けばいいのか。高校に行けば桃子さんの気が済むのか。だったら行くよ」

「一樹」

恐れていた沈黙。もう限界だった。

先に席を立ったのは一樹だった。そのまま部屋を出ていく。いつからこんな会話ばかりになってしまったのだろう。怒鳴り合い、傷つけ合うだけの会話にならない会話。すっかり冷めてしまったコーヒ―を口に含む。苦いばかりの棘だらけの言葉。ちっともおいしくはなかった。

「高橋さんは以前別の高校に通われていたんですね」

事務室の女性が微笑みながら一樹に向かって話しかける。

「あっはい」

幾分緊張しながらそう答える。どうも勝手が違う。明るくて健康的で何よりもここには酒もタバコもないのだ。

その高校は単位制の学校として開校して五年ほどになるという。

校舎は真新しく白く、高いところにつけられた照明が優しい光を放っている。

一樹は場違いなところに来てしまった、と焦りを隠せないでいた。入学説明会も面接も桃子が付き添ってくれた。恥ずかしかったがそれでだいぶ救われた。今日のような一人では心許ない。単位制の学校とは言え、生徒たちはごく普通の高校生に見えた。制服はないけれどもみんな似通ったこざっぱりとした服装で、一樹よりもずっと年下に見えた。本来なら一樹だって十八歳なのだから高校生としてもちつともおかしくはないのだけれど、周りを大人に囲まれて暮らしているせいか、いつの間にか大人びた雰囲気をも身につけてしまっているようだった。

「ここが春から通う高校か。辺りをきよるきよる見回す。前にいた音高とはだいぶ違う。」

「そういうことでしたら」
あくまでもソフトに彼女はそう続ける。

「その際に取得した単位が加算できる場合があります。こちらの書類を以前通われていた高校で作成してもらってください。それからこれは保護者の自筆の署名と捺印をお願いしますね」

「保護者の、署名ですか。あの、両親が海外にいる場合はどうしたら」

「日本での身元保証人になってくださっている方がいらつしゃれば大丈夫ですよ」

身元保証人、連名で二人となっていた。桃子と勇次では同じ世帯だからダメなのか。他の常連たちや顔見知りの大人たちに借りは作りたくなかった。せつかく音高に行くのなら横浜の家に立ち寄ってトミさんに書いてもらおう。そう決めると一樹は窓口を離れた。

どうせ横浜には高橋の家族は誰もいないだろう、三人とも海外の公演が忙しくて寄りつかないに決まっている。トミさんに久々に会えば、きつと喜んでくれるに違いない。背がまた伸びたことを教えてやろう、驚くだろうな。

電車の中で高校でもらったパンフレットを眺める。へえ、音楽や体育の授業まであるのか。一樹は球技なんてまともにはやったことが

なかった。中学の時は怪我が怖いからといつも見学させられていた。ルールだつてろくに知らない。やってみるのもおもしろそうだ。ダメならダメでその時考えればいい。一樹はこれから始まる新しい生活のことで久しぶりに気分が高揚していた。

自分の家の駅に降り立つ。この駅をいつも使っていたのはたった三年前のことなのに、もう十何年も経ってしまったかのような錯覚さえ覚えた。駅前のお店もだいぶ変わった。マンションが増えている。緑の木々は変わらないのか。眩しさに目を細め、サングラスを取り出して掛けると、通り慣れたはずの道を歩きだした。

閑静な住宅街の一角に高橋の家はあった。鉄筋三階建ての防音完備の四角い檻。庭の色とりどりの花はトミさんの自信作だ。そこだけがあつたかい。

いつもトミさんは庭の花を玄関と一樹の部屋に生けてくれた。父も母も、花には興味を示さなかった。リサイクルのたびにすごい量の生花を持ち帰ってくるくせに、たくさんの花束に囲まれて暮らしているはずなのに、彼らはその花に見向きもしなかった。それはトミさんの手によってリースに変化し、ブーケに生まれ変わり、一樹の部屋を明るく飾った。

重い扉を開ける。少しきしんだ音を立てる。何かおいしい物でも買ってきてやればよかった。今頃気づいても遅い。まあいいか、今度来た時は忘れずに持ってきてやろう。

一樹は呼び鈴も鳴らさず、玄関のドアを勢いよく開けた。

「トミさん、僕だよ！あのね！」

「誰ですか、騒々しい」

一樹は思わずその場に立ちすくんだ。トミさんじゃない。そこには母親がいた。

スタイルのいい細い身体を紺に金ボタンの仕立てのいいスーツに包み、絢子は一階の大広間のソファに座っていた。ガラステーブルには楽譜が広げられている。

グラスコードのついた眼鏡を外すと、絢子は目を上げた。冷たい

目だった。射るような視線。一樹は息を飲んだ。

「誰ですか、あなたは」

厳しい声が続く。しばらく会わないうちに彼女は息子の顔も忘れてしまったのか。ふと気づいて、一樹があわてて自分のかけていたサングラスを外す。息を詰めて彼女を見返した。

「一樹です。お久しぶりです、お母様」

「一樹さんなの？あなたそんなに背が高かったかしら。そうね、言われてみれば面影があるわね」

もう五年もまともに顔を合わせてはいない。中学に入学する時、それでも母は付き添ってくれた。それが最後の思い出か。後はずっと姉の真理子のリサイクルにつきっきりで、家にいることはほとんどなかった。珍しく家についてもレッスン室に姉ともりきり、一樹に向き合うことはなかった。

今更温かな親子の再会なんぞ期待しちやいなかった。それでもシヨックを隠しきれなかったのは、まだどこかで自分のことを心配してくれているのではと心の片隅で思っていたからだろうか。しかし絢子は一樹を一瞥するとまたすぐ視線を下に戻し、眼鏡をかけ直して作業に戻ってしまった。

「トミさんならいませんよ、お買い物に出掛けていますから。ご用事なら出直してちょうだい」

「お母様でもいいです。僕、高校に行くのに保護者の書類がいるんです」

どこかで意地になっていたのかもしれない。一樹はそう言うとき家の中に足を踏み入れた。

「高校？あなたって人は、せっかく入れてあげた聖上音大付属高を辞めておしまいになったんじゃないか？」

絢子は目を上げようともしなかった。手をせわしなく動かし楽譜に何か書き込んでいく。おそらく今度の演奏曲のポウイングの記号でも写しているのだろう。真理子のために、いつも真理子のためだけに。

「別の高校に入り直したんです。音高じゃありません。普通の高校です」

「そう、よかったわね。それで？」

一樹は意を決して母親に近づいていった。無言で書類を差し出す。身元保証人の欄じゃない、保護者の欄だ。それくらい書いてくれても罰は当たらない。

絢子は大げさにため息をつく、ようやく楽譜から目を離れた。そのまま持っていたペンで一樹の書類に署名をする。高橋孝一郎、続柄父。高橋絢子、続柄母。どんな親でも戸籍上は父と母だ。

判子がいるんです、一樹は付け加えた。絢子はしぶしぶ立ち上がるとブランド物の高級バッグから小さな革のケースを取り出した。判を押す。

「ありがとうございます、お母様。じゃあ僕はこれで」

「ああ、待ってちょうだい」

思い出したかのように絢子が一樹の背中に声をかける。おれに話なんてあるのか、いぶかしげに一樹が振り向く。絢子は応接間のキヤビネットの中から何やら取り出し、一樹に差し出した。

「何ですか、お母様」

「神原さん、桃子さんとおっしゃったかしら。その方にこれを返してくださいませんか？」

「……!?!」

絢子が差し出したのは紙袋に入れられた十数通のエアメールだった。一つ二つは開けられていたが後は封も切っていなかった。開いている一通を取り出してみる。写真が入っていた。一樹の病室での写真。まだ包帯が痛々しい。手紙も添えてあった。細かい字で几帳面に、これは桃子の字だ。こんな物を出していたのか。わざわざエアメールで。

「聞いたらトミさんがパリの住所を教えてくださいましたと言っじゃないの。困っていたのよ。あなたからお話してくださらない？もう迷惑だから送って下さらなくて結構ですと。そんなことしなくても、

一樹への送金は今まで通りに続けさせていたいただきますからと」

絢子が矢継ぎ早にまくし立てるのを一樹は呆然と聞いていた。何も言い返せなかった。言うだけ言うと母はまた作業に戻ってしまった。もう一樹のことは眼中になかった。

二階のレッスンス室からバイオリンの音がもれ聴こえてくることに、ようやく一樹は気づいた。姉もいたのか。最近ではテレビやポスターでしか会うことのない、同じ母から生まれた実の姉。

駆け上がってレッスンス室に飛び込み、姉が生命よりも大事にしているバイオリンをぶち壊してやりたい。そんな衝動を必死に一樹は押さえた。そんなことをしても何も変わらない。虚無感が一樹を襲っていた。ここに来るべきではなかったのだ。

玄関のドアを手紙の束を持った右手で押し開ける。門のところにトミさんがいて、一樹に気づいたのだろう、小走りにこっちにやってくる。

「ぼつちやま、いらしてたんですか。まあすっかり大きくなられて」
トミさんは変わらない。大きな買い物袋を片手に下げ、恰幅のよい体を楽しげに揺らして。

一樹を見る目が優しく微笑んでいる。

「帰るよ」

「えっ！今すぐお茶をお入れしますからね。どうぞかけてお待ちになっただいて下さいな」

温かいトミさんの言葉にも、力無く一樹は首を横に振った。

「お身体の調子はいかがです。病院には行かれていますか」

「トミさん、あの人はね」

これ以上いると泣き出してしまいそうだった。唇を噛み締める。母親はただの一度も元気がどうかさえも聞こうとはしなかった。そういうことなのだ。

一樹は心配そうな顔つきのトミさんを残し、振り返ることもせず
に歩き出した。

三階からものすごい重低音の振動が響いてくる。一樹の部屋だ。何をしているのよ全く、と桃子は三階へと上がっていった。ドアをノックするが返答はない。そうつと開けてみる。途端に桃子は煙に巻かれてむせてしまった。

「ちよつと、何なのよこの煙。タバコ止めたんじゃないの。一樹いい加減にしなさいよ」

言うが早いか、桃子は一樹のくわえていたタバコを取り上げる。見ると灰皿にはたくさん吸い殻がたまっていた。その隣にはいくつものビールの空き缶が、乱雑に重ねられていた。

ベッドの上で、一樹は膝を抱えてうずくまっていた。のろのろと手を伸ばし、新しいタバコに火をつけようとする。耳には大きなヘッドホン、そこからさっきの重低音がもれて聴こえてきた。

桃子はどこから手をつけていいかしばらく思案していたが、とりあえずそのヘッドホンをはがしにかかった。一樹の耳から乱暴にむしり取る。一樹はされるがままになっていた。

ばかでかい音量だ、冗談じゃない。あわててアンプのスイッチを切る。静寂が訪れた。

「あんたねえ、こんな大きな音ヘッドホンで聴いたりしたら、耳悪くなるじゃない！それでもミュージシャンなの？自分の体を大事にしない奴はね、タバコは止める！」

桃子から取られても、また一樹は新しいタバコを取り出そうとする。火をつけてせわしなく息を吸い込む。ほんの少しだけタバコが短くなると、自分からそれを灰皿にねじ込んだ。今度は新しいビールの缶のプルトップを片手で器用に開けると、一気にそれを飲み干した。

「何やってるのよ、そんな飲み方して。何かあったの？ちよつと一樹！」

ビールの缶を奪おうとした桃子を、一樹は肘で押しやった。桃子がバランスを崩して壁にぶつかる。その拍子にタンスの上の荷物がばさつと下へ落ちた。

「何これ」

「あつ！」

一樹があわててそれを拾おうとする。しかし桃子の方が早かった。床から拾い上げ中身をのぞく。返せよ、弱々しく一樹が抵抗する。中身を見た桃子の顔色が変わった。

「何よ、何であんたがこんなの持つてるの…よ…」

桃子がエアメールの一つを一樹に差し出す。一樹は顔を背けた。

「横浜に行ったの！？ そうなのね。あの人たちに何を言われたの？」

桃子が大声を出す。何も言われないよ、一樹の答えには力がなかった。

「一樹！」

「あ、あのね、ありがとうって、いつも手紙ありがとうってそう言ってた。感謝してるって。桃子さんのこと感謝してるって、そう言っつて」

「ばか、嘘言わなくてもいいのに」

「嘘じゃない、本当だよ、だからあの」

一樹が必死にそう言い返す。桃子が目でそれを制止する。

「封も切つてないじゃない。邪魔だからって返されてきたのね」

一樹はもう何も言えなかった。肩で息をしている。

「おれは、おれ、は…」

それだけ言うと一樹は声を上げて泣き出した。まるで小さい子が泣きじゃくるかのように。桃子はそつと一樹に近づいた。ばか、そつ言いながら両腕で一樹の頭を抱え込んだ。

「あんたはあたしたちの大切な家族なんだからね。いつまでもここにいていいのよ」

一樹が桃子の背中に腕を回す。涙が止まらなかった。一樹はいつまでも泣き続けていた。

(つづく)

北川 圭
Copyright? 2009 - 2010
kaitagawa All Rights Reserved
k
e
i
k

#8

「やっぱりいい音がしますね、ベーゼンドルファーは」

結香がステージのピアノに触って、ポーンと一つ音を鳴らしてみせる。オーストリア製のグランドピアノは、黒く磨かれたその表面にジャムズの店内をぐるりと写し出していた。

この店を開いた時から、ベーゼンドルファーはたくさんの音楽と、人々の思いを奏で続けていた。父と母が出会って、桃子が生まれ育ち、そして今は。

ジャズの生演奏とLPレコードを聴かせるだけの店から、桃子はランチもライブもできる店へとジャムズを変えてきた。それがよかつたのかどうかわからない。でも、自分がこの店を支えているのだという気持ちは強かった。すべてを置いて、篠原について行けるのか。何度考えても答えは出なかった。

「結香ちゃんピアノは？」

店の照明を昼から夜用へと変えながら、桃子が顔だけを結香に向けて訊いた。

「こんなめちゃくちゃ高いピアノでネコ踏んじやったなんて弾いたら、罰当たりそう」

そう言いながら結香は器用に、聞き慣れたメロディーをスイング調に変えて弾き出した。

「母のたつての希望で、相当無理して入れたみたい。母はピアノを弾く人だったから」

「桃子さんのお母さんがですか。じゃあ思い出の品ですね。今でも会ったりするんですか」

「うっん、あたしが中学の時に母がここを出ていったきり、一度も会ってないわ」

淡々と桃子が答える。それ以来、父親の勇次と店を何とか続けて

きた。二人だけの家族。いつからかそれに一樹が加わった。心配ばかりかける出来の悪い弟。桃子の背をとうに越して、それなのに相も変わらず甘えん坊な男の子。

「お母さんのこと、恨んでたりする？」

「まさか。逆にそれまでよく持ったなって感心するわよ。ろくに働きもしないで道楽で貯金切り崩すようなうちの父さんに、よく我慢して付き合ってたなって」

「マスターが心配だから、桃子さんなかなか結婚しなかったんですか」

幾分声を落として結香が訊く。それに苦笑いを返す。

「どうか」

「それとも……一樹ちゃんのこと」

「一樹のことはあたしが心配しても仕方ないわよ。あの子の人生なんだから。」

「そうじゃなくて、桃子さんは一樹ちゃんの気持ち、知ってるんですよ？」

いつものおどけた明るい結香の声ではなかった。真っ直ぐ桃子を見つめている。

桃子は浮かべていた笑みを消し、唇を固く結んだまま何も言えずにいた。視線が思わず逃げる。

「桃子さんの方が年上だから？篠原さんと付き合いが長いから？でもそれって何か関係あるんですか。そりゃあ篠原さんと一樹ちゃんだって大の仲良しだから、しばらくはぎくしゃくするかもしれないけど、人の気持ちは変わるでしょう？先着順じゃ決められないですよっ？」

「結香ちゃん」

「一樹ちゃんて、どうしようもないばかりだけど、いつも真剣に桃子さんのこと見てる。答えてあげなくていいんですか」

「あの子は、家族なの」

思い詰めたような桃子の口調に、結香は黙った。時計の音がやけ

に響く。何かを吹っ切るかのように桃子は続けた。

「一樹は大切な弟で、あたしたちの大事な家族なの。あの子が欲しいのは男女の愛なんかじゃない。本当はあの子は、高橋のお父さんお母さんに愛されたくて仕方がないんだと思う。もっと僕を見て、僕を愛してつてせがむ、甘ったれの子どもなのよ。あんなでかい図体して、でも中身は子どものまま」

ゆっくりとテーブル席のイスに腰掛け、桃子は顔の前で指を組む。「あたしはね、たまたまあの子の一番近くにいた、姉代わり母親代わりに過ぎない。あの子はいつかそれに気づいて、ここから、ジャムズから巣立っていく。そうならなきゃいけないのよ」

「桃子さんは、それでいいんですか？」

結香が低い声で、桃子に問いかける。そこから視線を外したまま、桃子は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「あの子は、あたしの大切な……弟だから」

仕込みやつちやいましょ、と、桃子が無理矢理明るい声を出した。この話はもう終わりだと、桃子の表情が語っていた。結香も詰めていた息を吐き出して、いつもの笑顔を取り戻す。当てにならないマスターなんてほつといて、どんどんライブの準備を始めようかと二人が立ち上がるとほぼ同時に、店のドアが荒々しく開いた。

がたん、ばたん。それにどかっという何かを蹴飛ばした音が加わる。何事かと二人が入口を振り返ると、そこには険しい顔の一樹がいた。

「どうしたの、一樹ちゃん。何荒れてんの？」

おそろおそろ結香が声を掛ける。一樹は近くの華奢なイスに持っていた楽器ケースを投げつけようと、腕を振り上げた。

「ダメ！ラッパ壊れるってば！ちよつと、一樹ちゃん！」

あわてて結香が止めに入る。桃子は一樹のこわばった表情に息を飲み、動けずにいた。

「落ち着いてよ、何があったの……」

「ふざけんな、ちきしょうあの野郎」

一樹は止められた腕を力無く下ろすと、ソファに座り込んだ。握りしめた右手の拳を唇に押し当て、固く目をつむる。

「仕事で、何か嫌なことでもあったの？」

ようやくいつもの桃子に戻って、冷静な言葉を掛ける。その声にほんのちよつと怯えたように、一樹は体を震わせた。

「仕事、降ろされた」

「なぜ……」

「おれが何したってんだ。ただのバックバンドじゃねえか。ユニットKなんて名前はついてても、ただ歌手の後ろで突っ立てるだけだろ？ 誰が迷惑するってんだ、何が目障りなんだよ！」

「だから、どうして降ろされたのよ」

声を荒げる一樹に、努めて穏やかに桃子は問いかけた。

「あいつだよ。あいつがおれを使うなって、レコード会社とテレビ局のお偉方に触れて回ってるんだと。おかげで今まで続けてきたスタジオの仕事も、全部無くなった。ロック系バンドのツアーサポーターって話も白紙になった。何にもできない。おれは何にもできない唇を噛む。悔しさがにじむ。桃子と結香はあまりのことに何も言えずにいた。やっとのことで桃子が口を開く。

「あいつって、誰？」

一樹が目を上げた。肩で息をしている。なかなか言葉にならない。そつと桃子が声を掛ける。一樹は今にも泣き出しそうな顔で、桃子を見つめた。

「高橋孝一郎だよ。決まってるだろ！？」

「カズくん。君は高橋孝一郎氏の息子さんなんだってね」

レコード会社の会議室で、普段会ったこともない常務に呼ばれた時から、一樹は嫌な予感がしていた。昔、孝一郎と仕事をしたことがあるという彼は、おだやかな表情で言葉を続けた。曰く、孝一郎は素晴らしい音楽家だ。世界的な指揮者であり、日本を代表する現代作曲家だ、と。

だから何だ。出来の悪い息子は切り捨てる、冷酷無比な最低の父親じゃないか。一樹は心の中でありとあらゆる罵倒の言葉を思い浮かべた。

音楽業界で仕事をする上で、高橋一樹の本名では何を言われるかわからない。そういつた思惑から仕事の時は「カズ」としか名乗っていないかった。零細規模の音楽事務所に所属して、クラシックとは関わりを持たないように、そしてサングラスで瞳を隠して。音楽を続けていることは、高橋の家には知られなくなかった。一樹が出演するような通俗的な音楽番組など、父親が見るわけがないと、たかをくくっていたところもあった。なのに。

「父が、何か言ってきたんですか？」

「君が自立心旺盛で、孝一郎氏の名前を出さずに仕事をしていることは、素晴らしいことだと思つよ。でもね、お父さんとても心配なさっていたよ」

「心配なんて」

するはずがない。その言葉をようやくのことで飲み込む。黙ってしまった一樹を見て、常務はわかつているよとも言いたげに彼の肩をぽんと叩いた。

「聞けば、君は大病を患つたというじゃないか。君がテレビで、病んだ身体に無理をして演奏しているのを見るのがしのびないと、お父さん涙ぐんでらっしゃったよ」

「!？」

思わず叫び出したくなるのを必死で押さえる。おれがその病気で辛い思いをしていた時、あなたは日本に帰るところか、電話で話すことすら拒否したじゃないか。今さら何を。

「もう家でのんびり過ごさせてやりたい、そうおっしゃられてね。どうだろう、一度ご実家に帰られてはいかがかな」

「仕事を、するなつてことですか？」

感情を必死に押し殺して、何とか受け答えをする。相手は何の関係もない第三者だ。レコード会社の重役だ。おれの敵はこいつじゃ

ない。

「家に帰って、お父さんを安心させておやりなさい」

常務は笑顔を見せると、部屋を出ていった。

それですべては終わりだった。ユニットKからカズは外され、明日からのスケジュールは何もなくなつた。スタジオミュージシャンとしてのカズも、ツアーサポートの話も。

改めて一樹は、自分の父親の音楽業界に対する影響力と、その実力を思い知らされた。

「そんなにおれが音楽をやることが気に入らないのか。そんなにおれが嫌いなのか。家に帰れ？ふざけんな、ただの一度だってそんな言葉かけてもらった覚えはない。あいつはおれが今どこにいて、誰と住んでいて、何を思っているかなんて全く興味などないくせに。何でこんな時だけ父親面して、耳障りのいい美談を語って回るんだ。

何なんだよ、ちきしょう！」

ジャムズの古ぼけたソファに沈み込み、一樹は抑えきれない嗚咽を漏らした。

そんな一樹を、痛々しげに桃子は見つめるばかりだった。

「一樹くん、どうですか一杯」

マスターが遠慮がちにドアのすき間から顔をのぞかせた。手にはとっておきの一本が握られている。そんなにも自分には心配をかけているのか、一樹はため息をついた。

「たまには昼間っから飲むのもいいでしょう。あんまり飲ませると桃子ちゃんに叱られちゃうから、内緒ですよ。最近忙しそうでゆっくり話をする暇もなかったですからね」

「そうですね、仕事がずつと立て込んでたから」

マスターは一樹の部屋に入るとその辺の雑誌やCDをどかして床に座り込んだ。つまみもない、コップと冷や酒だけだ。小さなテーブルにそれらを置くと一樹に一つ差し出した。

しばらくそれを見つめていたが、一樹は思いきつてぐつと飲み干した。頭がくらくらする。こんな風に飲むのも久しぶりだった。

「こんな時はゆっくり、いつもは聴けないような音楽を聴くのがいいかなと思って、これを持ってきました」

マスターが一枚のCDを差し出す。モノトーンの幾何学模様に彩られた前衛的なジャケット、アーティストのクレジットを見た時、一樹は息を飲んだ。

「そうですね、高橋孝一郎の『東京組曲』です。どうですか、今なら聴けるんじゃないですか」

「無理だ、おれにはまだ…」

マスターが一樹にCDを手渡す。動かない方の左手でぎこちなくそれを受け取る。不安定な左手にただ載っているだけの危うい存在落としてしまいそうだ。でもそれをしっかりと受け止めるだけの気持ちにはどうしてもなれなかった。

「戦うのならまず敵を知らなくては、ね。このままでいいのですか？」

マスターはあくまでも穏やかだった。その口調が今はうれしい。でも、戦う？おれが？そんなことができるのだろうか。

握りしめる気のない一樹の左手から、マスターはそっとCDを取る。ゆっくりとゆったりとケースを開ける。プレーヤーのスイッチを押して銀色に鈍く光る円盤をセットする。いつでもいいですよ、そっ树一樹に声をかける。

一樹は大きく息を吸うと指をスタートボタンに伸ばした。押せない、目をつぶる。怖いのか。右手をぎゅっと握りしめる。そして今度は左手の人差し指をゆっくりと動かした。ほとんど曲げることのできない左手は、硬くこわばったままの形でプレーヤーにそっと触れた。かたん、わずかな音がして機械が動き出した。

始まる。

澄んだ弦楽のトゥッティから曲は始まった。幾本もの弦楽器のたった一つの音の集合体。不意に変拍子の荒々しい打楽器の連打がそ

の静寂を突き破る。不協和音の管楽器たちがそのリズムの隙をついて滑り込んでくる。先の展開が読めない、何が起こっているのか予想がつかない。なのに音から気持ちえそらすことができない。

一樹はだんだん息苦しくなっていた。胸が締め付けられる。呼吸をしているのにちっとも肺に空気が入っていない。もう嫌だ聴きたくない。叫びたいのに何も言うことができない。ふと、自分の頬が濡れていることに気づいた。涙？何故だ。いくらぬぐっても後から後から涙が止まらなかつた。悔しさに唇を噛む。嫌だこんな音楽は。こんなのはジャズでもなければクラシックでもない。そう言うてしまいたかつた。切り捨ててしまいたかつた。全部否定してしまいたかつた。なのに。

第四楽章まで一気に曲は流れていった。終わった後の静寂が部屋を包んでいた。二人とも何も言わなかつた。ただ一樹だけが、涙をぬぐうばかりだつた。

「おれは…」

とぎれとぎれに一樹がつぶやく。声がかすれていた。

「おれは、こいつに勝てない。こんなやつには」

そう言つと両手で顔を覆つて一樹はうつむいた。

「そうでしょうか」

穏やかにマスターが言葉をつなげた。

「高橋孝一郎がこの曲を完成させるのに、どのくらいかかつたか知っていますか」

一樹は動かない。

「構想から十年、何度も習作を重ねたそうです。そう、この『東京組曲』は何度も違うバージョンが発表されているんです。その度に演奏会にかけられ、大きな反響を呼ぶのですが、ようやく完成版としてこのバージョンが録音されたのが、いつだかわかりますか？」

マスターは優しくそう問いかける。一樹は答えない。

「一九八七年、ですよ」

一樹の身体が一瞬震えた。そしてゆっくり顔を上げた。マスタ

「Iをまつすぐに見て何か言いたそうに唇が動いた、が何も言えなかった。」

「それが何を意味するか、一樹くんにはわかりますね」

「おれの…」

一樹がためらいがちに口を開く。まるで言ってしまったら何かが起こるのではないかと恐れるかのように。

「生まれた、年？」

「そうですよ」

マスターは慈しみの眼差しを一樹に向けた。幼い子を見守る父親のように。

「ライナーノーツにも書かれています。私にとって守るべきものがまた一つこの世に現れた。それは私の音楽世界をも変えてしまうほどの大きな驚きだった。この世にこれほど愛してやまないものがあるものなのだろうか。一つの生命の誕生とともにこの曲にいのちがふきこまれ、そして、ここに私にとってのただ一つの『東京組曲』は完成した、と」

マスターの声が淡々と続く。当時のジャズファンはね、この言葉を暗記するほど読んだんですよ、もっともその当時はそれが何を意味するのかはよくわかりませんでしたけれどね。

マスターは微笑んだ。

「お父さんに会ってきてみたらどうですか。もう何年も会ってないのでしょうか？」

父親に会う、このおれが。考えたこともなかった。電話で話したのももう何年前になるだろう。冷たい事務的な会話。電話の向こうにいたのは、愛とも情とも無縁な巨大な無機質な壁だった。父はおれを切り捨てたのではなかったのか。クラシックができない高橋家の人間などいらぬ。演奏家になれない息子は息子ではない。幼い頃から才能を開花させ、神童と呼ばれ数多くの巨匠とも競演し、日本クラシック界の期待を一身に背負ってきた姉。姉こそが高橋家の一員であることが許されるのではなかったのか。そうではいらぬな

かったおれは。

「父親の音楽なんて聴いたことなかった。本当に小さい頃、まだ姉が日本で活動していた頃、母が仕方なく小さかったおれと姉を連れて演奏会に行った。ほんの七、八歳でクラシックが楽しいはずもなく、おまけに訳の分からない現代音楽を聴かされておとなしくしているはずなんかなくて、おれはいつもロビーで走り回っていた。母に後で冷たく叱られた。お父様に恥をかかせるものじゃないって。もうその頃からトランペットは習ってはいたけれど、子どもにとってラッパなんてただのおもちゃで、まだ身体もできあがっていないから本格的なレッスンにもなるわけないし、ピアノは全然練習しないし、本当にその頃から見放されていたんだ」

「どうしてまた、そんな小さな頃からトランペットを？」

「最初は姉と一緒にバイオリンをやったらいいんだけど、見込みがないって匙を投げられたらしいよ。それで、偉い音大の教授かなんかが、唇の形がいいから管楽器が向いているって言ったらしくて。演奏家人口が少ない方が、まだ可能性があるって思ったんじゃないの？」

「本当に音楽一色だったんですねえ」

手酌で日本酒をあげながらマスターがしみじみと言う。本当に、音楽しかなかった。子どもらしいはしゃぐ声も楽しい遊びも、学校の友達もスポーツも何もかも、おれの好きなことはすべて否定された。ピアノなんか嫌いだった。ソルフェージュも理論も嫌いだった。遊びたかった。走り回りたかった。ただ。

「ただ？」

「不思議だよね、ラッパだけは好きだったんだ。トランペットを吹いている時だけは何もかも忘れられた。ジュニアのコンクールなんてそんなに出場者もないから、わりといいところまで行くんだいつも。そうするとその時だけは父も母も自分の方を向いてくれた。声もかけてくれた。その頃もう既に姉は海外で活躍するようになっていて、ほとんど両親も日本にはいなかったんだけど、賞状を見

せる時だけはおれの方を見てくれた。音高に行って音大に進んで、大きなコンクールで賞を取って留学して、父や姉のように演奏家としてステージに立てば、トランペット奏者としてどこかのオーケストラにでも入れれば、父も母もおれを見てくれる、そう思っていたんだ」

なのに、あの日から突然ピアノが弾けなくなった。痛みを増す左手はまるで自分の指ではないかのように重くてしびれて、でも、その事を誰にも言うことができなかった。叱られる、いや、今度こそ本当に見捨てられる、その恐怖心の方が痛みよりも強かった。ピアノが弾けなければ音大には入れない。そうなれば演奏家にもなれない。留守勝ちの両親は一樹の異変に気づくはずもなかった。

いつからだろう、一樹は家族の中で独りぼっちだった。身の回りのことはトミさんがしてくれる。もちろん愛してくれてはいた。でも、一樹の家族を欲する心を完全に埋めることはできなかった。誰もいない自宅のレッスン室で痛みをこらえながら弾けなくなった。ピアノに向かう。心のどこかでもう自分は演奏家になれないと絶望を抱えながら。でも、どうしても誰にも打ち明けることができなかった。

一樹は右手で髪をかき上げた。続けてあおった日本酒がボディーパーローのように効いて、身体の芯が熱かった。愛されていたと他人事のようにこんな曲を聴かされて、おれはどうしたらいいのだろう。一樹の生きてきた二十一年間は、こんな音楽一つで置き換えられてしまつようなものなのだろうか。一樹にはわからなかった、わかりたくもなかった。なのに、さっきの音がまだ身体に残っていて、一樹を蝕んでいくようだった。

「真っ正面から向き合ってみることも一つの方法だと思いますよ」
マスターが囁んで含めるように言う。もっと他のレコードも聴きますか？ジャズではないですが、彼の作品ならいくつか店にもあります、そう続けた。

「もう少し、もう少し時間を下さい。まだおれには…」

ゆつくり考えればいいから、マスターは一樹の肩を叩いた。
一樹はマスターを見やると、力無く笑ってありがとう、とつぶやいた。

#9

またこの門をくぐる日が来るとは思わなかった。見慣れた緑の垣根の角を曲がると高橋の家が自分を拒絶しているような圧迫感で建っていた。一樹は、心細さから背負ってきてしまった楽器ケースのベルトを、右手で握りしめた。肩に掛かる重さが自分の存在をはっきりと証明してくれていた。大丈夫、今日はきつと向き合える。

孝一郎の個人事務所に連絡を入れ、予定を聞き出した。母が出なくて助かった。事務の女性は、息子だと名乗ると驚いたようにそれでも丁寧に教えてくれた。今日は家にいるはずだ、と。

誰も庭には出ていなかった。車庫の入り口が開いている。車の影は見えなかった。留守か。しかし微かにバイオリンの音色が聞こえる。一樹は思いきって呼び鈴を押した。

ほんの一瞬間があつて返事が聞こえた。それに僕だと答える。ばたばたばたと足音が玄関に向かってくるのがわかる。トミさんだな、あわてなくてもいいのに。

「ぼっちゃま、まあお元気そうで。さあさ、どうぞ中へお入り下さいまし」

「トミさんも元気だった？お姉さまは二階？あがつてもいいかな」
洋式の家の中に土足で上がり込む。旦那様と奥様はちよつとお出かけていますが、直に帰っていらつしやると思いますよ、そんな言葉にどこかほつとした。会えなければそれでいい、そんな気持ちも潜んでいた。おれも甘いな、心の中だけでそうつぶやく。

絨毯引きの階段に足を取られながら、二階へと上がる。右の廊下のつきあたりがランドピアノの置いてあるレッスン室だ。一応誰でも使つていいことになっているが、真理子が居る時は他の人間は使うことができないのは暗黙の了解だった。華奢な身体に似合わない

い迫力のある低音のメロディーが廊下にも響いていた。一樹はドアをノックする。聞こえなかったようで曲はとぎれない。さつきよりももっと大きく力を込めた。ふっと音が消えた。

「誰？どうぞ」

三つ上だから今年二十三になるはずだ。だが返ってきた返事は明るく澄んでいてまるで少女を思い起こさせた。一樹は真理子の顔を思い浮かべようと努力した。前に会ったのはおれが十三の時だからもう七年前になる。少女から大人の女性へと変貌を遂げる時期のはずだ。しかしテレビや雑誌で見かける真理子は、いつまでも可憐な少女だった。思い切ってドアを開ける。そこに彼女は、いた。

白いレースのブラウスはそこかしこにフリルが縫いつけられていて、身体の輪郭を優しく覆っていた。演奏の邪魔にならぬようになのか時期的には早そうな半袖から細くやわらかな腕が伸びていた。上半身とは対照的なタイトな黒のロングスカートは、くるぶしの辺りまでその布を揺らしていた。足には安定感のある一目で上質とわかる黒のパンプスを履き、体重をかけるように前後にほんの少し開いていた。ハイヒールではとてもじゃないけれどもいい演奏なんてできない、昔そう言っていたことをふと思い出した。一樹は心を決めて視線を上げる。顔を見るのが怖かった。どんな表情でおれを見るのか、知るのが怖かった。大丈夫、今日は今までの自分とは違うのだから。上げた視線の先に大きな瞳があった。細い形のよい輪郭に柔らかなウエーブが揺れている。肩につくつかつかないかに切られた髪は風を受けてそよいでいた。大きなつぶらな瞳と意志のはつきりした眉、すつと鼻筋の通った整った顔立ち、薄いつややかな唇、一樹によく似ていた。

目を見開き、いぶかしげに自分を見つめる。もう慣れっこだった。この家の住人たちは息子を弟を、初めて出会う人であるかのように見るのだ。だが姉は、母とは違って彼女は楽器をすぐさまテーブルの上に置くと、一樹のところへ駆け寄ってきた。

「一樹ね！ああ、あなた一樹なのね！こんなに大きくなっちゃって、

誰かと思つたわ！もつと顔をよく見せて。懐かしい！どうしたの急に。わあうれしい、一樹に会えるなんて！」

「あ、あの、僕が誰だかわかる、の？」

意外な反応についていけなかったのは一樹の方だった。思わず後ずさりする。声もうわずつてしまった。けれど真理子はそんな一樹の様子には構わずに彼の肩を抱きかかえるようにした。背の高い一樹の顔を見上げるように、真理子は笑いかける。

「当たり前じゃない、忘れるわけないでしょう。私はどう、変わった？ねえもつとこつちを向いてちょうだい。元気だった？もう何年ぶりなのかしら。どうして今まで会いに来てくれなかったの。一樹、聞いているの！？」

息を切らせるほど早口で次から次へと言葉を紡ぎ出す。まるで美しい詩の暗唱でも聞いているかのような柔らかなベルベットトーンの甘い声が、昔とちつとも変わつていなかった。大きな瞳がくるくると動く。縁取られた長いまつげが光っていた。見る者を魅了してやまない愛くるしい表情、それが真理子の魅力の一つだった。気難しいマエストロをも微笑ませてしまう天性の何かが真理子にはあった。それは二十歳を過ぎても変わることはなかった。むしろより美しさを増して、目を離せなくなってしまう存在になつていた。

両腕を真理子につかまれて、一樹は何も言えずに立ちすくんでいた。同じ両親の元に生まれてどうしてこうも違つてしまつたのか。誰からもあの両親からさえも愛される彼女と、疎まれ存在を否定され続ける自分と。神童と呼ばれるほどのバイオリンの才能に恵まれた彼女と、クラシック奏者への道をあきらめトランペットを吹く場所を探して迷い続けている自分と。

一樹は真理子のあまりの眩しさにここへ来たことを後悔し始めていた。まだ早かつたのではないか、おれには到底かなうはずのない相手だつたのではないかと。

そんな一樹の逡巡に構わず、真理子ははしゃぎ声を上げていた。

「ねえ、下に行つて何か飲まない？おばさまにもらつたおいしいケ

「キがあるの。一緒に食べましようよ。それでたくさんお話ししましょう。聞きたいわ一樹の話。最近テレビに出ているのよね。トランプは続いているんでしょう？ああ、何から聞いているかわからないわ。聞きたいことがあるすぎて困っちゃう。私の話も聞いてよ、どこから話そうかしら。ねえ、いつからそんなに背が高くなったの。最初見た時はびっくりしちゃった。いつもべそかいて、私の後からついてきていたのに。背だっけいつも私より低かったわよね。このくらい？もっとかしら。ねえ、一樹ったら！」

真理子の声は止まることを知らないようだった。それがちっともうるさく感じないのは優しい声色のせいなのか。

「あの、お姉さま。僕はお父様に話が……」

「お父様ならすぐ帰ってくるわ。知り合いの家にあいさつに行っただけだから。来週から公演が始まるから忙しくなるけれど、今日は大丈夫よ。ゆっくりしていいね、今夜は帰っちゃダメよ。あなたの部屋はいつあなたが帰ってきてもいいように用意してあるんだから」

「僕の、部屋？」

意外な言葉に動揺を隠せずに、一樹は息を飲んだ。おれの部屋なんて、とうの昔に無くなってしまったものだとばかり思っていたのに。

「帰ってくるなら帰ってくるってどうして前もって言ってくれなかったのよ。驚かそうと思ったの？確かに本当にびっくりしちゃったけれど、ああ、うれしいわ。この家で一樹に会えるなんて。トミさんに言っただけ今日はごちそうを作ってもらわなきゃ」

真理子が一樹の背中を押して階下へと促す。一樹は逆らえなかった。真理子は変わっていなかった。美しさも愛らしさも弟を思う優しい心も、何もかも昔の少女の頃と。

一緒に階段を下りる。もうトミさんがお茶の用意をしてくれていた。この家でこんなに温かく迎えてもらえるなんて。だが一樹にはうれしさよりもとまどいの方が大きかった。

おれは変わってしまった。あの頃の自分とはかけ離れてしまっていた。時が止まってしまったかのようなこの家で何もなかったことにして最初からやり直すには、あまりにも真理子とは違ってしまった。

半ば強引に大きな応接セットのゴブラン織りのソファに座らされる。真理子は本当につれしそうだった。さつきからずっと一樹に話しかけ、返答が無くてもそれを気にすることもなく話し続けた。時折とびきりの笑顔を一樹に向ける。一樹の方はたとえばこわばった表情を浮かべ頷き返すのがやっとだった。紅茶の入ったジノリのカップを持ち上げ、真理子が一人で、乾杯と声を上げた時、玄関のドアが不意に開いた。

「あっ！」

一樹は反射的に立ち上がった。思わず姿勢を正す。下げた両腕に力が入る。右手をぎゅっと握りしめた。

開いたドアから入ってきたのは孝一郎と絢子だった。二人ともオーダーのダブルのスーツに身を包み、腕にはバーバリーのコートを掛けていた。

父と母は笑顔もなく厳しい視線を一樹に向けた。部屋の空気が一瞬で凍り付いた。

だが、それも真理子の明るい声ですぐに破られた。

「お父様、お母様、一樹よ、一樹が帰ってきてくれたの！お二人とも一緒にお茶にしない？もう私うれしくて。見て、一樹ったらこんなに背が大きくなって、きつとお父様よりも大きいわよ。並んでみたら？ほら！」

「一樹？一樹なのか」

「お久しぶりです、お父様。ご無沙汰しています」

「もう、そんなに堅苦しいあいさつなんていいじゃない親子なんだから。ねえお父様」

真理子が三人の間に割って入る。しかし孝一郎の視線は厳しいままだった。一樹は歯をぐつと噛み締めると負けじとにらみ返した。

足が震える。もう逃げはしない。そう決めたのだから。

「真理子さん何ですか、そんなに大きな声を出してはしたない。一樹さんあなたのせいなのね」

母が冷たく言い放つ。さすがの真理子も口をつぐんだ。立つてないで座つたらどうなの、母が続ける。着替えてくるから荷物をお願い、そう言ったのはトミさんにだ。母がその場を立ち去るとほんの少しだけ空気が和らいだ。一樹はつめていた空気を吐き出した。孝一郎から視線をはずす。彼がじつと見つめているのを痛いほど感じていたが一樹はその場に立っているのがやっとだった。けれど今日は自分の思いをきちんと言わなければ、ここに来た意味がない。一樹はもう一度右手をぐっと握りしめた。

重たい何かを振り切るように顔を上げる。孝一郎はソファに座つて腕を組んでいた。自然と一樹が見下ろす形になった。のどがからからだった。舌がはりついてしまつてうまく息が吸えない。何か言わなければ、何か。

「あの」

「座つたらどうだ。話もできんだろう」

出鼻をくじかれて、一樹はまた口を結んだ。力無くソファに座り込む。孝一郎はトミさんがお茶を用意するのを手で制する。

「お茶はいらないよ、トミさん。麻生の家で飲んできたからね。真理子は、上に行つていなさい」

二人の顔を交互に見比べて心配そうにしていた真理子は、たまらずに父に声をかけた。

「お父様、久しぶりに会つたのよ、そんな難しい顔なさないで。」

一樹だつてお父様にたくさん話したいことがあるはずよ、聞いてあげてお父様」

「いいから、真理子は練習を続けなさい。来週も公演があるのだから。リッツ先生が見えるのはいつだったかな」

孝一郎はやや声をやわらげて真理子に向かって返事を返した。気のせいかな真理子には笑顔も浮かべて。いや、気のせいではないだろ

う。真理子にはどんな人からでも笑顔を引き出す魅力があるのだ。二人の間に優しい空気が流れた。そうだ、この家にだって笑い声もあれば一家団欒もあるのだろう。そこに自分が入れないだけなのだ。一樹の胸の奥がほんの少し痛んだ。

「リッツ先生は明日の十時にいらっしやるのよ。ちゃんと練習はしてあるわ。お父様もいてくださるのでしよう?」

「明日も家にいるから一緒に練習を見てあげよう。ほら、もう上に上がりなさい」

孝一郎に再三促されて、真理子は渋々腰を上げた。一樹に向き合う。孝一郎に聞こえないくらいの小声でささやく。

「じゃあ後でね。帰ってはダメよ」

いたずらっぽく笑うと真理子はロングスカートを軽くつまんで階段を上がつていった。

それを孝一郎が目で追う。一樹に向き直った時、もうそこから笑顔が消えていた。

「話とは何だ。私も忙しいんだ、手短に願おう」

一樹は小さく息を吸い込んだ。父の威圧感に負けてしまいそうだった。いつもそうだ。父の前に来ると一樹は何も言えなくなる。海外公演と地方の活動でほとんど家にいたことのない父だった。幼い頃一緒に遊んでもらったという記憶は全くない。普通の家庭のようにどこかに連れて行ってもらうなどまずなかった。父と話をするとするのは特別なことであって、普段の会話などとは無縁だった。真理子とはそうではないのだろう。だとすれば悪いのはおれの方なのだ。一樹はこのまま立ち上がっていすを蹴って帰ってしまいたい気持ち在必死で押さえていた。ここは自分の家であって自分の家ではない。ここに一樹の居場所はなかった。でも、あきらめてしまったら何も変わらない。何のためにここまで来たのだ。戦う前から逃げた。逃げてしまつてはダメだ。そう自分を奮い立たせた。

「お願いがあります」

ようやくそれだけ言うことができた。声は震えてなかったか。

目をつぶる。頭を小さく振る。今しかない。戦うのなら今しかないのだ。一樹は心を決めた。

「僕から、音楽を取り上げないでください」

「何のことだ」

孝一郎の返事は短かった。低くよく響く声だった。父の姿をテレビの音楽番組で見たことがあった。家にいる時とは全く違った父がそこにはいた。優しげに微笑み、難解なクラシックの名曲をわかりやすく解説し、指揮をしてピアノを弾く。音楽に楽しげに向き合う姿が印象的だった。その時と同じ声。だが今は一樹のすべてを拒絶しているかのように冷たい響きだ。一樹はひるんだ。孝一郎の刺すような視線に次の言葉が出てこなかった。父もまた黙った。沈黙が二人の間を流れた。一樹はさすがのように革のソフトケースに手をやった。それをぎゅっと握りしめる。孝一郎の目をしっかりと見返す。

「お願いです。僕からトランペットを奪わないでください」

「おまえは何か勘違いをしているようだ。私は何もしておらんよ」父がソファに身体を預けるように座り直す。視線がはずれる。嘘をつくな、ここでそう怒鳴ったら父はどんな反応をするのだろうか。だが一樹は努めて冷静に話を続けた。

「僕は何も望んでいません。ただトランペットが吹ければそれで満足です。ですからどうか音楽を続けさせてください」

父に向かって頭を下げる。そんな一樹に孝一郎は吐き捨てるように言った。

「ちやらちやらした格好をして薄っぺらな中身のない音を吹いて聴かせる、そんなくだらん音楽がおまえのやりたいことなのか。ずいぶんとレベルの低い話だな」

「ユニットKは！」

孝一郎に食い下がるように一樹が言葉を続ける。

「確かにクラシックに比べればくだらない音楽かもしれませんが。使っている音も単純だし今時の使い捨てられるただの軽薄な音楽かもしれません。でも、やっと見つけた僕の居場所なんです。やっと自

分がトランペットを吹ける場所を見つけたんです。この僕が必要とされているんです。お願いです。僕から居場所を奪わないでください」

「おまえは若いから何もわかってはいない。商業ベースに踊らされているだけだ。おまえの音楽なんぞ飾り物と一緒にだ。誰も価値なんか感じてはおらん」

「それでもいい、それでもいいんです。僕は！」

「高橋の名を汚すことは私が許さない」

きつぱりと孝一郎が言い切った。一樹が口をつぐむ。トランペットよ僕に力を貸してくれ。革のケースがきしんだ音を立てた。一樹が話し出そうとするのを遮るかのように孝一郎が続ける。

「おまえがしていることのおかげで、私や真理子にどれだけ迷惑をかけるか考えたことがあるか。おまえは昔からそうだ、いつも勝手ばかりして私の言うことなど聞きもしない。高橋の家からそんな恥さらしを出すわけにはいかん」

「高橋の名前を出したりはしません！僕はもう高橋の人間ではありません。そのくらいのつもりでいます」

「おまえがいくら高橋とは無関係と言い張っても、周りはそう受け取らないのだよ」

「僕は！」

「わざわざ小さいうちから専門の先生をつけてやってレッスンを受けさせたのは、おまえにこんなくだらない音楽をさせるためなどではない。音高も勝手にやめて家も出ていって、今更音楽をやりたいななどと、どの顔で言えるのかね」

孝一郎はテーブルの上に置いてあった外国製のタバコを手に取りると、口にくわえて火をつけた。吐き出す煙に一樹は軽くむせ、咳き込んだ。自分もタバコが吸いたかったがなぜかこの家ではしてはいけないことのように思えて、ポケットにのばしかけた手を引っ込めた。ここにいると二十歳の自分ではなく、いつも母に叱責されていた幼い頃の自分に戻ってしまうような気がしてならなかった。でも

今はあの頃の無力な自分ではないはずだ。もう自分の足でちゃんと立って生きていけるはずなのだ。父からも母からも自由になって、すべてを自分の責任として。父にもはつきりと言えるはずだ。自分の思いを、やりたいことを。

「音高を勝手にやめたのは謝ります。ちゃんとした基礎を身につけさせてもらったことは本当に感謝しています。お父様のおかげで今こうして楽器が吹いていられるのだということはよくわかっています。勝手に家を出て好きなことをしてきて申し訳ないと思っています。でも今はこの音楽を続けたいんです。自分の仕事として音楽をやっていききたいんです。ですから」

「クラシックもまともにできないやつが何を言う」
「クラシックは！」

言葉が詰まった。孝一郎の顔を見続けるのが辛かった。あの頃、愛してやまないクラシックをあきらめざるを得なかったあの頃、側にいてくれたのは父や母ではなかった。その時の気持ちがあんたに分かるか。ゆっくりと言葉を選びながら一樹は続けた。ともすれば叫びだしたい気持ちを必死に押さえながら。

「左手が動かないのにクラシックは吹けません。僕のこの指では楽器を支えることもできません。あの時からずっと僕はこの動かない指と闘ってきたんです。その頃、この家には誰もいなかった。僕の周りには誰もいなかったんです。もう楽器を吹くことはできないのだとあきらめていました。僕だって、なれるものならクラシック奏者になりたかった。お父様のようにお姉様のようにすごい演奏家になりたかった。でも、なれなかった。一度はあきらめた音楽が今は僕を受け入れてくれていてるんです。僕の生きる場所は音楽にしかないんです」

孝一郎は短くなったタバコを灰皿にねじ込んだ。

「なぜそんなにまでしてトランペットにこだわるんだ。病気をして辛い思いをしたのなら、今更泣き言を言うくらいならすっぱりやめてしまったらどうだ。おまえ一人食わせていけるくらいの財産なら

残してやる」

足の前で手を組み、さきほどより幾分声をやわらげて父はそう言った。過去の贖罪の気持ちがあつてもあるのだろうか。その変化が一樹をとまどわせた。

「そんなことじゃないんです。僕はただ好きだから、吹くことが好きだから」

やめることはできない。やめられるはずがない。それは誰よりも父が一番知っているはずだ。一樹はこれ以上何と言つていいのかわからなくなつていた。なぜ父は僕に音楽をやめさせたいのだろうか。どうなることを父は望んでいるのだろうか。いつも期待に添うことのできない自分はこれから先どうしたらいいのだろうか。

「才能のない人間が続けられるほど甘い世界ではない。ちよつとばかり音楽の真似事をして、ちやほやされていい気になつていて足元をすくわれる。おまえのやつていることは無駄だ」

「大先輩からの忠告、ですか」

「客観的事実だ」

あごに手を置き、射るような視線を一樹に向ける。一樹はその視線を真正面から受け止めた。ここで負けるわけにはいかない。戦いはまだ始まつたばかりだ。

「何と言われてようと僕は音楽を続けたいんです。お願いします、続けさせてください」

もう一度頭を下げる。迷惑はかけません、何度も同じセリフを繰り返す。孝一郎は無言だった。

「お父様の…」

一樹は話し出す。あの日の衝撃を思い出しながら。

「この間CDで『東京組曲』を聴きました。とても、なんて言つていいかわからないけれど素晴らしい音楽だ。お父様がジャズの作品を書いていたと言つことも初めて知りました。それで」

「今度は見え透いた世辞か。もう二十年も前の作品のことなど」

「ライナーノーツも読みました」

孝一郎の動きが止まった。ゆっくりと顔を一樹の方に向ける。

「教えてください。お父様は僕を、僕のことを一度でも……」

聞くのが怖かった。口に出すのが怖かった。もし拒絶されたらと思うと何も言わずにこのまま帰ってしまいたかった。一樹はゆっくり立ち上がるとソフトケースを背負いなおした。小さい頃の不安な気持ちになぞるように一樹は孝一郎に問いかけた。僕のことを愛してくださったことがありますか、と。

「愛、か。ずいぶん薄っぺらい言葉だな」

孝一郎が片方の頬だけで苦笑いを浮かべた。一樹はぎゅっと唇を噛んだ。胸の奥が冷たく凍り付いた。小さくため息をつくとそのまま立ち去ろうとした。その背中に孝一郎のほんの小さなつぶやきが一樹には確かに聞こえた。

「子を思わない親がいるものか」

あわてて振り向くが、もう孝一郎は一樹の方を見てはいなかった。腕組みをして壁の写真を眺めていた。真理子のステージ写真、ロンティボー国際バイオリンコンクールに優勝した時の、彼女お気に入り一枚を大きく引き延ばしたものだ。それはもう六年近くも前の物なのにちっとも色褪せてはいなかった。父と母と真理子と家族三人でパリに移り住み、入賞に向けてレッスンを繰り返していた日々、一樹が一人日本に取り残され病魔と闘っていたあの頃。真理子は当時も今も光り輝いている。両親の愛情を受け、バイオリニストとしての才能を開花させ、将来を嘱望されている。優しく素直で誰からも愛される、姉。一樹もその写真に目をやる。複雑な感情が沸き起こる。その思いを振り切るように一樹は孝一郎に声をかけた。

「また来ます。今日はこれで失礼します」

「私の方に用事はないがね。何度来てもらっても同じことだ」

「いえ、また来ます。お父様にお許しをもらえるまで何度でも来ます。あきらめませんから僕は」

「……勝手にしろ」

サングラスを掛け直し、ドアに向かう。

不意に、一樹は強い吐き気に襲われた。何かと理由をつけて最近
は病院にすら行っていない。入院の話も引き延ばしたままだ。もし
本当に再発だったら、腫瘍が悪性だったら。怖くてとても現実を直
視するだけの勇気がなかった。目眩がする。ここで倒れるわけには
行かない。一樹は唇を噛みしめた。

動きの止まってしまった一樹をいぶかしむように、孝一郎が立ち
上がる。来るな、こっちに来るな。浅い呼吸しかできずに、息苦し
い。一步を踏み出したくても身体が言うことを聞かない。一樹、と
父に呼ばれたような気がする。でもそれもはつきりとはしなかった。
一樹はその場に倒れ込んだ。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2010 keik
itagawa All Rights Reserved

意識を取り戻すと、そこには真理子の心配そうな顔があった。

身体を起こそうとする一樹を、あわてて真理子は両腕で制する。

「さつき、栗林医院のおじいちゃん先生が来てくださったのよ。貧血でしょうって。ちゃんと食べてるの？」

柔らかな日差しが、カーテン越しに一樹のいるベッドまで届いていた。ここは自分の部屋。あの日出ていった時から、ここは時が止まっていた。机の本棚には音楽史の教科書、数学のノート、壁には…制服。何もかもあの時のまま。

「病気だったって、本当なの？何も知らなかったわ。たった一人で辛かったでしょうね」

柔らかなベルベットボイスが、一樹を包み込む。姉の声を聴いていると、すべてが夢で、自分はまだほんの小さな子どもで、家族みんながこの家にずっといたのではないかと錯覚してしまいそうだった。一樹の胸の奥が、ちくりと痛んだ。

「私一人が、何も知らずにパリにいたのね。自分だけお父様とお母様を独り占めして。一樹、ごめんね。本当にごめんなさい」

「お姉様のせいじゃない。それに一人じゃなかった。僕には」

桃子がいた。篠原もいた。勇次が、たくさんの年上の友達連中が、そして何より音楽が。けっして一人ではなかったのだ。

「あの頃、お父様はパリ・ニューフィルハーモニーとトラブルを抱えていらして、とても精神的にお辛かったと、後から別の方に聞かされたわ。私はあまりに子ども過ぎて、何もわからなかった。私にできたのはバイオリンを弾くことだけ。お父様にもあなたにも、私は何の力にもなれないのね」

「そんなこと、ないよ」

優しい響きの言葉が心地よかった。そっと目をつぶる。

「この家に帰ってきたら？また四人で、一緒に少しずつ家族をやり

直しましょう」

姉の声が甘く心に届く。切ない夢。でもきつと、それはかなわな
い。一樹はそつとかぶりを振った。

「帰るよ、自分ちに」

「だめよ、まだ顔が青いわ。それに、一樹の家はここよ」

「……ここじゃない。もう、ここじゃないんだ」

だが、神原の家に居られるのも、あとどれくらいだろうか。今度こそ独りぼっち。その時おれは、いったい誰にすればいいのだろう。身体を起こす。ベッドから立ち上がる。上体がぐらりと傾いだ。真理子が手を差し伸べるのを、そつと押しやる。上着を取ろうとクローゼットを開けると、見覚えのある中学の詰め襟とともに、真新しいシャツやトレーナーが目に入った。

「何、これ。誰の？」

「あなたの服よ、一樹」

「おれの？」

「あなたがいつ帰ってきてもいいようにって、お母様をご用意してくださっているの」

一樹はとまどいを隠せなかった。お母様が、どういうことなんだ。「今年はね、私も一緒に買いに行ったのよ。サイズがわからなくてとても困ったわ」

姉がいたずらっぽく笑う。少女のような笑顔だった。

「今年は、って、どういうこと？去年も買ったっていうの？」

「あなたがこの家を出てから毎年。去年まではパリから送っていたわ」

一樹は手のひらで口元を覆った。なぜ？感情が錯綜して、一樹は何も言えなくなった。

部屋を出て階下へ降りる。父はまだ居間にいた。スコアを広げ、何かを書き込んでいる。なるべく音を立てないように一樹は歩いたつもりだった。しかし、すぐに父は気づいて、顔を上げた。

「もういいのか」

「すみませんでした。帰ります」

自分の父親に頭を下げる。他人行儀な親子の関係も、この家では当たり前のことだった。

孝一郎の脇を通り過ぎ、玄関へと向かう。後ろからあわてて真理子が駆け寄ってくる。

「お父様、一樹を引き留めて。そんな言葉じゃなくて、もつと優しく抱きしめてあげて。やっと帰ってきてくれたのよ。手放しちゃだめ！お父様！」

「お姉様、いいんだよ。また来るから」

姉に精一杯の笑顔を送る。ソファに置いたままだった楽器ケースを手に取る。もう一度頭を下げた一樹に、孝一郎が鋭く言葉を投げかけた。

「クラシックに興味はないのか」

「えっ？」

不意打ちを食らって、一樹は動揺した。とまどう一樹に孝一郎は言葉を続けた。

「男が生まれたら、指揮者にするつもりだった。じいさんは孫を二人ともバイオリニストにする、と頑張っていたがね」

一樹は黙った。父の言葉を信じられないとでもいうように。

「たとえ指が動かなくとも、指揮者にはなれる。音大なんぞに行かなくとも、いくらでも音楽の勉強はできる。そう思っていたのは私だけだったか」

「……お父様」

「興味がないのならいい。伸子のところのメソッドを手伝いなさい」
それだけ言うと、孝一郎はまたスコアに向かった。

静寂が戻り、一樹はしばらくそこに立ちすくんでいた。

#10

広大は、せつせとジャムズの黒く輝くテーブルを磨いていた。今日は天敵の一樹も姿を見せていない。自然と鼻歌がついて出る。リ

ムスキー・コルサコフのシェヘラザード。一樹にはわかるまい、この旋律の美しさは。

カラン、と音を立てて木製の分厚いドアが開く。広大は手を止めて、すいません、お店は十一時からなんです、と明るい声を出した。「ごきげんよう、お店の方かしら」

入ってきた女性を見て、広大は一瞬で固まってしまった。

柔らかい髪は肩先で揺れている。ふんわりとしたレースに、パフスリーブ。フレアのスカートが風を受けてそよいでいる。すべてがパステルで、まるで妖精のようで。

「た、た、た…高橋真理子さん!？」

口をあぐりと開け、次の言葉が出てこない。真理子は広大に向けてにつこりと微笑んだ。

「あ、あのボク、高橋さんの大ファンなんです！ファンクラブ『百合の会』にも入ってます。ほらこれ、会員証。肌身離さず持ってます。会員番号は六千二百五番です。あの、その、サインください！」

広大は矢継ぎ早にそうまくし立てると、近くにあったメニュー表を真理子に差し出した。

真理子はそんな広大の姿も、いつも見慣れているのか、あわてることなくボールペンを取り出して、小首を傾げて広大を見つめた。

「いつも応援してくださってありがとうございます。何とお書きすればよろしくて？それにこれ、書いてしまってもいいのかしら」

「どうぞ、どうぞ、全然平気です。あのできれば、佐藤広大さんへ、って書いてもらえるとうれしいかなって」

にやけた顔で広大がそう言う。手をエプロンでごしごしこすり、次は握手してもらおうと準備万端構えていた。真理子が美しい筆跡でサインするのをうつと見ている。

奥にいた結香が、何かと寄ってくる。それに、この方が高橋真理子さんです、どうです、美しいでしょう、と広大が自慢する。

「ランチタイムは十一時からなんです」

おそるおそる結香がそう告げる。それにつこりと微笑みを返すと、真理子は落ち着き払って言った。

「神原桃子さんはいらっしやるかしら。お会いしたいのだけれど」「桃子さんですか。上にいると思います。あのどういったご用件で」

その時、階段を下りる軽い足音が響いた。桃子かと思つてほつとして結香が振り向くと、それは一樹だった。

一樹は真理子を認めると、二階に向かって大声を張り上げ桃子を呼んだ。

「来たんだ」

「ええ、素敵なお店ね」

真理子が辺りを見回す。それだけの動作も優雅で美しさを際立たせた。広大は思わず見とれたが、ふと気づいてハツとしたように真理子に問うた。

「あ、あの、ところで、どうして高橋さんがこんな所に？」

そのセリフに一樹は、底意地悪そうにやりと笑つて、広大に向かって言葉を投げかけた。

「あれ、言つてなかったっけ。これ、おれのねーちゃん」

「はいっ！？」

「一樹がいつもお世話になっております。佐藤さん、弟によくしてください。本当にありがとうございます」

「お、お、おとうと……弟！？」

広大の叫び声が響く。一樹を指さしてわなわな震えている。結香は目を見開いて、一樹と真理子を交互に見比べている。

「ずいぶんにぎやかな。お客様なの？」

桃子が降りてきた。手にしていた食器をカウンターに置くと視線を騒ぎの中心に向けた。言葉が途切れる。桃子は息を飲んだ。

「高橋……さん。」

桃子に向かって真理子がつこり笑いかける。口を開きかけた時、どたつと大きな音がした。

「わっ！ 広大がぶっ倒れた！」

「ちよつとお、大丈夫？ 広大くん！」

広大は床にひっくり返って、目を回していた。

「うそだ！ 悪夢だ！ 白百合が！ 妖精が！ 何でよりによって一樹さんなんかと……！」

桃子がとっておきのフォションを開ける。辺りに紅茶の豊かな香りが広がった。

さっきまで広大が磨いていたテーブルに、そつと片ひじをつき、細いしなやかな腕を柔らかなシフォン生地のパフスリーブから伸ばし、真理子は優雅に微笑んでいた。

隣には一樹が行儀悪く脚を投げ出して座り、にやにや笑いながら広大をかまっていた。

「姉と弟で、どうしてこうも違うものなんでしょうか」

シヨックを隠しきれずに、しょんぼりとした顔で広大がつぶやく。「えっー、そうかなあ。いろんな人から似てるって言われるんだけどなあ、おれたち」

意地悪な一樹の言葉に、広大は、全然似てません！ と力を込めた。「一樹、それくらいにしてあげなさいよ。広大くん、可哀想じゃない」

桃子の言葉に、首をすくめる。

結香と桃子がカップを皆に配る。それに、真理子ありがとうございますと微笑んだ。

「神原さん、本当に何とお礼を申し上げてよいのか。今まで一樹をこんなに大切に育ててくださって、ありがとうございます。本来なら父と母がここに来るべきなのでしょうが」

「いえ、別に。あたしたちは」

「一樹と叔母から聞きました。この子が病気にかった時も、神原さん、あなたがずっと付き添ってくださったと。一樹の命の恩人ですわ」

真理子は深々と頭を下げた。桃子はなぜか、ひどく居心地が悪そうなる表情で、口ごもった。

「一樹が家に帰ってきてくれた時、私本当にうれしくて、これでやっと、家族が元のようになれるのだとほっとしました」

「一樹は……一樹くんは横浜に住むんですか？」

かすれた声で桃子が問う。いつもの桃子らしくない。

「いえ、東京での生活もあるでしょうから、当分は代々木上原にある、高橋が持っている部屋に住まわせるつもりです。今は誰も使っていないものですから。ねっ？一樹」

「うん」

幾分神妙な顔つきで、一樹が返事をする。桃子は何も言わない。きゅっと唇を閉じ、視線を下に向けている。

真理子が海外での生活や、マエストロとのエピソードなどをユーモアを交えて話すのを、広大も結香も興味津々という風に身を乗り出して聞いていた。途中から勇次や前島も加わり、真理子はいつもと同じように話題の中心となって、笑顔を絶やさず話している。時折、涼やかな笑い声を立てる。皆、真理子の魅力に引き込まれていた。

桃子だけ、彼女だけが硬い表情のまま、黙りこくっている。一樹はそんな彼女をそっと見つめていた。

リハーサルがあるからと、迎えに来た事務所の車で真理子が帰っていた。たくさんさんの微笑みと桃子への感謝の気持ちを残して。ドアがやさしく閉められた時、桃子はためていた息を大きく吐き出した。

「綺麗な人ねえ。でも何ていうか、かわいらしい人？」

結香がぼーとした顔のまま、宙を見上げてため息をつく。そうでしょう、そうでしょう、世界中にファンが多いのもわかりますよね！広大が勢いづいて夢中で話し出す。

「いや、あれはさ、どっちかつつうと天然ぼけだと思うよ」

「鈍感な一樹さんにはわからないんですよ、彼女の魅力が！二人と

もあの高橋孝一郎さんの子どもなんですよ。同じDNAを引き継いでいるはずなのに、どこをどう変えると、こうなるのかなあ」

まだぶつぶつ言う広大に、桃子が吐き捨てるようにつぶやく。

「育て方の違いじゃないの？一樹はこんながちゃがちゃしたところで育っちゃったから」

口調のきつさに、皆驚いて桃子を見た。桃子自身もハツとしたように顔を上げた。

「桃子さん、何怒ってんの？」

一樹が言いづらそうに桃子に向かう。

「怒ってなんかないわよ。よかつたじゃない、和解できて」

「和解なんて、してないよ。一度横浜帰って、みんなとちょっと話ただけで」

「代々木上原に住むのね。いつの間に決めたの。さすがは高橋さんよね、都内にぽんと使える部屋があるなんて。援助受けても平気なんだ」

一樹はぐつと言葉を詰まらせた。

「家賃かからないっていうから。じゃなきゃ、いつまでたつたって一人暮らしなんてできないよ。おれだって、そのくらいしてもらってもいいだろ？」

「へえ、ご家族と仲直りできたら、あたしたちなんでもう用済みって訳ね。いいんじゃない？素敵なお姉様もいらっしやって」

「何だよそれ。おれは、桃子さんが結婚するっていうから、なるべく早くこのうち出て、できるだけ桃子さんに迷惑かかんないようにって。おれが今できることって何だろうって考えて、おれなりに精一杯考えて、それでこうしたんじゃないか！おれだってあいつらに頭下げんのなんて、やだよ！だけど、桃子さんのこと考えたら！」

一樹はたまっていた気持ちを吐き出すように叫んだ。今にも泣き出しそうな顔。右手のこぶしが固く握りしめられて、白くなっていた。酷いことを言っている。心のどこかで冷静な自分が警告を出している。でも止められない。桃子は追い打ちをかけるように言葉

をつないだ。

「血のつながりには勝てないわよ。よかったわね、一樹」

一樹はとうとう下を向いてしまった。肩をふるわせている。皆が心配そうにそれを見ているが、誰も何も言えなかった。

「一樹くん、あのね」

見かねて勇次が声を掛けるが、一樹は答えない。近くにあった楽器ケースをひつつかむと、ドアに向かって歩き出した。

「一樹くん！」

「今すぐ出てってやるよ！桃子さんはそうして欲しいんだろ。こんなところ、もう二度と戻らない！」

桃子は一樹と視線を合わせない。切れ長の美しい瞳は、今はCDとレコードで埋め尽くされた壁をじっと見つめるばかりだった。

「一樹ちゃん、ちょっと待ちなさいよ。ほら、桃子さんも！」

間を取りなすように結香が声をかけるが、桃子は動かなかった。

一樹がドアの取っ手をつかむ。もう一度店内を、辛そうな目で振り返る。

「桃子さんなんか、大嫌いだ」

ドアが荒々しく閉められた。チャイムツリーが激しく揺れ動く。

その余韻が消えるまで、言葉を発するものは誰もいなかった。

「今のは……桃子ちゃんが悪いよ。桃子ちゃんらしくないよ」

勇次がぼそつとつぶやく。その言葉に桃子は顔を覆い、椅子に座り込んだ。

一度だけ、一樹はジャムズに荷物を取りに来た。桃子と目を合わせないように、勇次にだけ住所を書いた紙を置いて。居合わせた篠原に、シアトルに行くまではジャムズに住んでくれないかと懇願した。とまどう彼に、それが桃子さんのためなんだと強く主張した。

ジャムズでのライブにも、もう出ない。一樹はどうやらそう心に決めたらしかった。契約が生じるほどの大きな仕事は、もとよりない。都内のあちこちのライブハウスを回って、知り合いに声をかけ

てもらい、名前を隠して単発のライブに参加する。一樹のできることはせいぜいそのくらいだった。

いつかは、そんな生活も続かなくなる。一樹は自分でもそれをよくわかっていた。いつまで吹けるのか、いつまで、この指が動くのか。

意を決して久しぶりに行った病院では、大河原にさんざん叱られた。入院をしるという主治医の言葉を、笑って受け流す。もう少し、もう少し自由で、いさせてくれ。季節が変わろうとしていた。

#11

二人とも意地っ張りなんだから、結香がそうぼやくのも聞こえないふりをした。心配じゃないんですか？ 広大らしからぬそんな言葉も、聞き流した。

でも、いつも作っている夕飯のおかずが、必ず余ってしまうのにふと気づいて、桃子の胸はちくりと痛んだ。勇次と自分と、篠原もいるのに。ぎこちない生活は、きつと今に慣れるに違いない。そう思い込もうとした。

篠原が珍しく早く帰ったその日、彼ができたばかりの煮物をせつせとタッパーに詰め始めた。

「何？ どうするの、それ」

「はい、桃子さん。持ってってあげてよ」

篠原が笑顔を浮かべてタッパーを差し出す。桃子はとまどった。

「きつと一人で、外食かコンビニの弁当だろ。桃子さんの手料理、恋しがる頃だと思うよ」

「篠原くん、あのねえ…」

篠原が背中を押す。大丈夫、一樹くんだって今は落ち着いて話せるよ、と。

桃子はため息をつきながら、かばんを手を取った。

北川圭 C O P Y R I G H T ? 2 0 0 9 - 2 0 1 0 k e i k
i t a g a w a A l l R i g h t s R e s e r v e d (<)

「篠原さん、いつもは遅いの？」

カボチャをほおばりながら一樹が聞く。ライブが長引いて夕飯を食べそびれてしまっていた。ほらあわてないで、桃子がお茶を差し出す。今までの確執が何もなかったかのように自然に会話が続けるが二人にとって不思議だった。このままでいられたら、でもきつとそれは無理な話なのだ。一樹は右手だけで器用にタッパーを開けると、次のおかずに取りかかった。

「そうね、平日はいつも九時過ぎかな。朝もわりと早いし。でも通勤に時間がかからないだけいいんじゃない？」

桃子は洗い物に戻ってそう答えた。神原の家では当たり前前の日常だったことも、今の一樹には縁遠いものになっていた。たった一人誰もいないこの部屋に帰る。それがどんなに寂しいことか、でもそれは桃子には決して言えないことだった。自分で決めたことなのだから、もう自立しなければ。一樹は相反する気持ちと一人たたかっていた。

「シアトルに出発するまで、篠原さんがジャムズに住めて良かったじゃない」

「一樹を追い出したんじゃないかって、ずいぶん気にしてるわよ」「そんなこと、ないよ。残りの荷物はそのうち取りに行くね。CDコンポは篠原さんに使ってもらっていいから。後は服ぐらいかな」「本当にここですつと暮らすつもり？」

桃子が一樹に真正面に向き合った。一樹は思わず目をそらした。タッパーを手で隠すようにたぐり寄せる。一樹！桃子が声を大きくした。

「……そうだよ。一人暮らしをするって決めたんだから。一人の方が気兼ねしなくてすむから楽だよ。休みの日に布団干すからって朝早く叩き起こされることもないし、訳わかんない当番もないし、毎

晩ジャムズで飲んだくれなくなつていいし。桃子さんだつてその方がいいだろ？」

幾分拗ねたような口調で一樹が答える。桃子は優しい眼差しを彼に向けた。

「いつでも帰つてきていいのよ。部屋はそのままにしてあるから」
「横浜と下北とこと、おれ一人に三つも部屋はいらないよ。ジャムズの部屋は片づけちゃつていいからさ。篠原さんだつて客室じゃ狭いだらう。おれの部屋だつたところに荷物を置けば……」

目を合わせないまま一樹がそう答える。桃子はタオルで手を拭くと小さいテーブルの華奢ないすに腰を下ろした。近くの量販店で買つてきた間に合わせの家具。殺風景な部屋の雰囲気には妙に似合つていて、余計に寂しかった。

「ご飯だけでも食べに来たら？ 外食が続くと身体に悪いわ」

「それじゃ家を出た意味ないじゃん。大丈夫だよちゃんと魚も食べるし。それより」

結婚式はいつやるのさ、一樹が箸を置いて下を向いたまま桃子に訊いた。今度は桃子が黙つてしまった。一瞬沈黙が流れる。あきらめたように桃子がため息をつきながら続けた。

「式は挙げないわ」

「どうして。ダメだよそんなの！ちゃんと結婚式しなくちゃ。ドレス着てさこうやってブーケ持つて、マスターが桃子さんの横を腕組んで歩いて」

「そんな、ドレス着るつていう年じゃないし」

「ダメだよ、年なんか関係ないじゃん！みんなだつて楽しみにしてるし」

何故か一樹はしつこく食い下がった。桃子は苦笑いをしながら細く綺麗な指を胸の前で組んだ。篠原から贈られた銀色の指輪が、左手の薬指に光っていた。桃子は右手の親指と中指でそれをそつと回す。それは桃子の指のサイズとは微妙に合わないその指輪をもらった時からの彼女の癖になつていた。

「式は、挙げないわ。結婚するかどうかもわからないのに」

「まだそんなこと言ってるの？ いい加減にしなよ桃子さん！一緒に暮らしてるのに今更何言ってるんだよ、篠原さんだから待っててくれるんだぜ。普通怒るよ、桃子さんあのね！」

「そんなに…」

桃子が一樹の声を遮るように口を出す。思い詰めたような声だった。

「そんなに私を結婚させたいの？」

その言葉を聞いた途端、一樹は表情をこわばらせた。顔を上げると荒々しく立ち上がり桃子の手を取って無理矢理立たせた。急に引っ張られて桃子はバランスを崩し、テーブルに片手をついた。

「痛い、何するのよ一樹！」

「帰れよ！もう帰れよ、帰ってくれよ！二度と来るな」

「何よ、怒ったの？急に何を言い出すのよ」

一樹は無言も言わず桃子を狭い玄関の方へ押しやった。彼女の荷物を乱暴にまとめると桃子の手に押しつけた。

「これ持って帰れ。もうここには来るな！」

「何だかわからない。何でそんなに怒っているの？」

「桃子さん、無神経だよ。何だかってそんなこと言えるんだよ。わからないの？もういいよ！」

一樹はドアを開けると桃子の身体を外へ押し出した。桃子があわてて靴を履く。それを待つ間もなく鼻先でドアをばたんと閉めた。

「一樹！ちよつと一樹？開けてちょうだい、まだ話は…」

「もう帰れ！」

後ろ手でドアを押さえる。桃子の一樹を呼ぶ声だけが背中中で響く。それもしばらくして静かになり、やがて桃子のパンプスの硬い靴音が廊下を遠ざかっていった。

雨の音が部屋の中にまで聞こえてきた。傘を持っていただろうか。もういい、そんなことどうだっていい。一樹は一人になった部屋で、まだ玄関に立ちつくしていた。

廊下を過ぎ、エントランスホールまでついたのである。もう外に出てしまったか。一樹は動けないままだった。何かをこらえるかのようには歯を食いしばり、顔を必死で上げていた。目をつぶる。

限界だった。

押さえきれない何かに突き動かされるかのように、一樹はドアを開けて廊下へと飛び出した。もういない。踏み出した足が一瞬止まる。一樹は頭を振ると唇を噛み、外へと駆け出した。雨が一樹の身体を叩く。顔にかかる雨も気にせず、マンションの前の細い路地を走り出す。桃子の水色の傘が目に入る。一瞬のためらいの後、一樹は桃子さん、と呼びかけた。

振り向くな、気づくな、こっちを向くな。本当の気持ちとは裏腹に一樹は願った。気づかなければいい、そのまま置いてくれたら。

なのに、雨の音が大きいはずなのに一樹の声が聞こえたのだろう、桃子の歩みが止まった。傘が振り向く。驚いたような表情を浮かべる。一樹は息を飲んだ。今なら引き返せる。だがもう遅かった。足が勝手に動き始めていた。桃子に近づく。最初は一步一步が重かった。重力の何倍もの力が身体全体を押さえつけていた。なのに止めることができない。止める、引き返せ。冷静なもう一人の自分が必死に叫んでいる。それを振り払うようにして一樹は足を速めた。桃子が訝しげに立ち止まっている。雨足が強くなってきた。

「一樹？」

もう桃子の声が届く距離まで近くなった。一樹は何も言わない。走り寄ったまま腕を伸ばし、力一杯桃子を抱きしめた。

「……………!？」

一度だけ桃子が小さく抗った。傘が足元に落ちる。一樹は手の力を緩めなかった。長身を少しかがめ、桃子の肩を引き寄せる。そのまま自分の胸に桃子の華奢な身体を押しつけた。左の頬を桃子の顔につけるようにしてぎゅっとかき抱く。胸の鼓動が聞こえてしまいうまくないくらい近くにいます。一樹は目をつぶった。何も言わずにただ抱きしめ続けた。

一樹にとって気の遠くなるような長い時間がすぎる。桃子はされるがままになっていた。振りほどこうともしなかった。

一樹はそつと目を開ける。すぐ近くに桃子の整った横顔が見える。雨で前髪からしずくがしたたり落ちている。それをわずかに動く左の親指でそつとぬぐう。桃子がほんの少し身体を寄せた。一樹の方を見る。視線が絡み合う。

一樹は右手で桃子の顔を引き寄せるとおそろおそろ自分の顔を近づけた。桃子は逆らわなかった。そのまま唇を重ねる。最初はほんの少し、触れあつかどうかわからないくらいに。引き寄せる手に力を込める。何度も何度も、桃子のルージュをなぞるかのようになり、そして深く。桃子の身体から力が抜けていった。ためらいがちに腕を一樹の背中に回す。雨は変わらず二人を強く濡らしていた。

遠くからクラクションが辺りに鳴り響いた。

はつとしたように一樹は唐突に唇を離れた。桃子の潤んだ瞳が一樹を見つめる。一樹はもう一度桃子の顔を自分の胸に押し当ててから、わざと乱暴に彼女の身体を引き離れた。伸ばした腕の分だけ二人の間に距離ができる。その距離は一樹には到底乗り越えられそうもないものに感じられた。抱きしめていたかった。触れ合っていたかった。このまま唇を重ね、肌を重ね、桃子の体温を感じていたかった。

だが一樹はそうしなかった。力無く腕を下ろすと、桃子の滑り落ちたバッグと傘を拾い、彼女に手渡した。桃子は何も言わない。ただ真つ直ぐに一樹を見つめ続ける。先に目をそらしたのは一樹の方だった。

「……さつさと結婚しちまえよばかやろう。桃子さんなんか」

声がかすれていた。突き上げてくる思いが苦しい。それをぐつと押さえつける。

「桃子さんなんか大嫌いだ」

そのまま身体の向きを変えると部屋に向かって歩き出した。桃子は雨に打たれるままになっていた。一樹は一度も後ろを振り向かな

かった。後ろを向いてしまったらもう気持ちを抑えることができないだろう。そしてもう自分は二度と桃子にも篠原にも会うことはできなくなるだろう。その思いだけで一樹は歩き続けた。雨なのか涙なのか、自分にもわからなかった。部屋に戻って思いを断ち切るかのように鍵をかける。自分の薄い形の良い唇にそつと触れる。桃子の感触が蘇ってくる。うつすらと口紅が指に残る。一樹は右手をぎゅっと握りしめた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2010 keik
itagawa All Rights Reserved

リハは続いていた。今日のスタジオは仕事じゃない。病気のことを考えれば今すぐにもでも楽器を置くべきなんだろう。来月には手術を受ける。それが主治医の大河原との約束だ。それまでは、せめて音を出していたい。一樹は無理を言つて、ベテランのスタジオミュージシャンたちが自主的に組んでいるリハーサルバンドに交ぜてもらつた。このバンドには、ライブの予定もなければCDを出す気もない。ただ、好きな音楽を好きなだけ。

トランペットにテナーサクソにトロンボーン、三管編成のバンドはリズム楽器だけと違つてとにかく音がにぎやかだった。近くの間と話をするのにも大声を出さなくてはいけない。広いスタジオの片隅で事務所の横沢が何やら怒鳴っているようだが、内容はわからなかった。一樹はプロテクターの金具をはずすと、そつと楽器スタンドにトランペットを差し込んで横沢の方へと向かつていった。

「メール、メールみたいですよ」

横沢が叫んだ。それに聞こえてますよと大声で返し、一樹は自分のバッグをたぐり寄せた。

篠原からだ。

一樹は画面を開くののためらつた。リーダーの永井がリズム隊に指示を出している。ベースのリフが合わないようで、長くかかりそうだ。メールを読むのは後にするか、そうも思ったが自分の心が後ろ向きなことがイヤだった。思い切つて携帯のボタンを押す。一瞬画面がぱつと明るくなった。

「十五日を空けといてください」

最初の文字が目飛び込んでくる。意を決してカーソルを下に動かす。篠原らしい簡潔な文のメールだった。忙しいと思うけれどよかつたらその日、式とパーティーに参加してください、トランペットを忘れずに、と。

二人の結婚式の案内だった。

桃子さんが下した決断は、そういうことなのだ。

一樹の心が相反する二つの思いでいっぱいになった。胸がぐつと詰まる。だがここで泣き出すわけにもいかない。一樹は自分のあまりの子どもっぽさに逆に笑い出しそうになった。ポケットに差し込んでいたサングラスを取りだすと、あわてて掛けた。うまく表情が隠せるだろうか。心許ない。一樹は携帯をバッグに落とし込むと席に戻った。楽器を左手に固定してマウスピースをはずす。軽くバズイングをするとあの日の唇の感触が思い出されて、一樹は目をつぶった。

桃子さんは篠原さんを選んだ。そしてそれは正しいことなのだ。

大切な二人が幸せになって欲しいと願うのは、紛れもなく一樹の本心だった。なのに、心はどんどん冷えていった。冷たい氷の固まりが胸の奥底に置かれたような息苦しさがあった。耐えなければならぬ、これから一人で耐えなければいけないのだから。

「あのさかズさんや。君はマツピ握りしめて何やつとんの？」

いつの間にかリハはホーンセクションへと標的が移っていたようだった。永井が呆れた声で一樹に声を投げかける。はっとしたように一樹はマウスピースを楽器に差し込むと、構える姿勢を取った。

「すいません、あの、どこからでしょう……か」

「アホ！おおかたカノジヨのことでも考えとつたんだろが！」

スタジオ中に笑いが起こる。この中では一樹が一番若い。もう一度すいませんと繰り返し謝る。サクスの佐久間がそつと譜面を指さす。二つ目の決めの前、ハイノートで主旋律を取るところだった。少し気合いを入れてアンブッシュアを作る。ドラムがカウントを刻む。パーンと最初の音を出した、つもりだった。なのに見事に音はずした。こんな失敗はジャムズでもしたことがない。みんな肩すかしを食らった形になって、また笑われた。一樹は一人焦ってハイノートを出そうとするが、気持ちが先走るばかりでちつとも音にはならなかった。

「そこさあ」

永井がスコアに鉛筆で書き込みながら指示を出す。キー下げようか、と。

「いえ大丈夫です。すいません、いつもなら何てことない音域ですから」

「ホントに大丈夫？じゃあさ、ダルサーニヨして戻ったら譜面に書いてあるよか四度、上げて」

永井がさらっとトランペッターには過酷な条件を突きつけてきた。もともと高い音には自信があった。だがさらにその四度上ともなると、さすがの一樹でもコンディションに左右される。少なくとも今日は、無理だ。冷や汗が流れる。気持ちがちつとも集中していない。何てぞまだ。自分のふがいなさに呆れた。永井の求めるサウンドに応えきれない自分がイヤだった。一樹は掛けたばかりのサングラスをむしり取ると、もう一度お願いします、と大きな声を出した。今度は譜面通りの高さでハイノートを決めた。明日には必ずこの四度上で吹きますからと永井に宣言するが、いいよ無理しなくて、と受け流されてしまった。悔しい。唇を噛む。

休憩に入るとトロンボーンの向山が、きつついよなダブルハイBは、と笑って話しかけてきた。

「できないのはできないって早めに言っちゃった方が楽だよ。じゃないと永井さんどんどん酷いこと要求してくるから」
「すいません、迷惑かけて」

素直に頭を下げる。できないのは演奏技術の拙さからではなく気持ちの問題だ。プロとして集中できなかったのは最低だ。一樹は自分を責めた。

誰もいないロビーで、一人一樹は座っていた。革のプロテクターを外す。最初に作ってもらってから、もう何代目になるだろう。楽器の重みがある点に集中してかかるから、思ったよりは長くもたなかった。汗がにじみ、ベルトはよれている。それでも、このプロテクターのおかげで、今までプレイヤーとしてやってこることができたのだ。大事そうに革のそれをケースにしまうと、一樹は左手をも

う片方の手で包み込むようにした。

手の甲に残る大きな傷跡、そして三本の全く動かない指。鈍く続く痛み。

おれは、いつまで吹き続けられるのだろうか。

一樹はそつと目を閉じた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009 - 2010 keik
itagawa All Rights Reserved

晴れた日に永遠が見える　　On A Clear Day

#12

「ジャムズの関係者はこれでそろったのかな」

結香がデジカメを片手にみんなに声を掛ける。昨日までの雨が嘘のように晴れ上がった高い空のもと、それぞれが思い思いに着飾って教会の建物の前に集まっていた。

建物自体は小さいが白壁と高い紺色の屋根とのコントラストが美しく、よく撮影にも使われると言われるその教会は、今日はただ一組の結婚式を祝って、そこだけ華やいでいた。

木々の緑も雨に洗われて、その輝きを増していた。タキシードの前島と勇次、淡いピンクのワンピースにストール姿の結香、親に借りてきたという礼服を着込んだ広大が上着の丈をずいぶん気にしている。中庭には二人の親族と友人達が、もう既にお互いあいさつを交わしているようだった。

「あれ、一樹さんは？一樹さんが来てませんよ」

広大が大声を出す。日頃の天敵もいなくなると物足りないのだろうか。

「何やってんだらうね、この期に及んで寝坊か」

「一樹くんならやりかねない」

前島が結香と笑い合っている。見てきます、と言う広大を勇次が止める。

「大丈夫ですよ、まだ式までには間があるから」

「マスターは控え室に行かなくていいんですか」

広大がそう聞き返す。花嫁の父はいろいろとやることがあるのではないだろうか。しかし勇次は急ぐ様子も見せず、ゆったりと構えていた。前島がそんな勇次に声を掛ける。年代の近い二人は気も合うのだから、のんびりと釣りの話なんかしている。広大は一人、気を揉んでいた。

建物の中から篠原が出てきた。白いタキシードの胸元に小さな生花をつけている。小さな青い花びらが彼の動きに合わせて揺れている。心なしか頬を上気させ、緊張気味の様子だ。

「みんなそろった？桃子さんの方の準備がまだ少しかかりそうなんだけど」

「一樹さん以外はみんなそろってますよ」

広大は道路と玄関アーチを行ったり来たりしながらそう答えた。やはりどうしても気になるらしい。

「一樹くん？」

「ホントに来れるんですか？来るって言ったんですか」

広大が不安げに篠原にそう問いただす。集合時間はもうとうに過ぎていた。ジャムズの方にも顔を出していない。会場に直接来るのかと、誰もがそう思っていたのに。

「来る、と思うよ。メール出した時にOKって返事が来たから」

「OK？それだけ？」

うん、篠原があっけらかんと答える。本当にそれだけですか？何か他の文字はなかったんですか、広大が大きな声を出す。

「あはは、本当にOKだけだったよ。一樹くんらしいと言えばらしいよね」

「あきれた。おめでとうございますとか喜んで出席させていただきますとか、いろいろ返事の仕方はあるでしょうに。招待状の返事は来たんですか」

篠原が笑いながらかぶりを振る。招待状と言ってもきちんとした披露宴ではないからと、簡単なメッセージカードを送り返せるようにしたのだ。

もう本当に一樹さんだったら、広大がいつもの調子でぼやき始めた。それを結香がまあまあとなだめる。

花婿を囲んで、思いのほかゆつたりとした時間が流れていた。みんなこの日を心待ちにしていたのだ。自然と笑みがこぼれる。

教会の大きな扉が遠慮がちに開いて、白いドレスの裾がほんの少

しのぞいた。結香がめざとくそれを見つけてドアに走り寄る。桃子だ。後込みする桃子を結香はその腕を取り、こちらへと引っ張ってくる。みんなから歓声上がる。

「桃子さん綺麗」

「そんなに見ないで、ちょっとこのドレス派手すぎない？」

桃子はベールの端を指で押さえながら、うつむきがちに小声で訊いた。全然！すごく似合ってる、結香が言葉に力を込める。

喉元まで細かい目の込んだレースを使い、胸元がシースルーになっている。広がりすぎないマーメイドラインのドレスが桃子の華奢で線の細い身体を引き立てていた。ベールは小さな花柄模様がちりばめられていて、ふんわりと顔周りに淡い影を落としていた。

「綺麗だなあ桃子さん」

篠原がしみじみとそうつぶやく。周りから思わず笑いが起こる。

篠原が照れたように頭をかいた。

「どうですか、こんな綺麗な花嫁と結婚できる今の心境は」

前島からそう冷やかされて、ますます篠原は照れてしまった。頬が真っ赤だ。

「もう行こうか、みんなもそろったし」

篠原が桃子の肩を押す。クラシカルなデザインのエディングドレスは、袖全体までに美しいレースで覆われていた。その品のよさが桃子には本当にお似合いだった。

あの、一樹さんが来てません、広大が言っているのか悪いのか迷いながら小さい声でつぶやく。扉に向かって歩き出した二人の足が止まった。桃子が振り向く。

「一樹は、来ないわ」

その言葉に篠原がはっとしたように桃子を見つめた。思わず皆の視線も彼女に集まった。それに気づくと桃子はあわてて言葉を続けた。

「だってリハだのライブだの忙しそうじゃない。一樹一人の都合でどうこうできることでもないだろうし。きつと無理よ」

「でも、桃子さんの結婚式なんですよ！大事な大事な式じゃないですか」

広大が言い返す。桃子と篠原は目を見合わせるとお互い微笑んだ。篠原が諭すように広大に言う。

「大丈夫だよ、今日会えなくてもいつでも会えるし。忙しかったら無理は言えないよ」

「でも…」

広大が言いかけたその時、花のアーチの向こうに人影が見えた。一樹だ。

息を切らせて走ってくる。黒のタキシードにクロスタイを締めて、肩にはいつもの革のソフトケースを背負っていた。走るたびそのケースがわずかに揺れる。皆のいる石階段の所まで来ると膝に手を置き、大きく肩で息をした。

「遅くなって、ごめん。そこまで来たんだけど渋滞でちつとも車が動かなく……て。タクシー降りて走ってきた」

「遅いですよ一樹さん！みんなどれほど心配したことか！メールでも電話でもいくらでも出来るでしょうが！」

広大の抗議にわりいと頭を下げる。ぎりぎりまでスタジオにいたんだ、息も絶え絶えにそう告げる。携帯も忘れたんですか、もう本当に一樹さんは、どこかほっとしながら広大はまだぶつくさ言っていた。

「忙しいのにわざわざ来てくれたんだね」

篠原が階段の下まで降りて一樹の手を取る。一樹は顔を上げた。

篠原をまっすぐに見る。精一杯の笑顔を見せた。

「おめでとう篠原さん。よかったね」

一樹の右手を両手でしっかりと握り、ありがとう、と篠原がそう返す。

「ほら、もう一人おめでとうって言わなきゃいけない人がいるでしょっつ」

結香が一樹の肩を押して向きを変えさせた。何だよ、一樹が抵抗

する。足取りが重い。それを無理矢理結香が細腕で押す。

「じゃーん！どうよ、桃子さんのウエディング姿！」

階段の上に一人残された形になった桃子が、怯えたような表情で一樹を見た。

一樹もまた、息を飲む。二人とも何も言えないでいた。

笑顔を作らなくちゃと理性では思っているけど、自分の身体が言うことを聞かなかった。顔がこわばる。唇をぎゅっと結び、こみ上げてくる思いを必死に押し戻す。

「あれ、あまりの美しさに声も出ないか」

結香が明るく声を掛ける。前島も勇次も微笑んでいる。桃子がゆっくりと階段を下りる。そのまま篠原の隣にそっと寄り添う。篠原が桃子の右手を優しく掴む。桃子は一樹から目をそらせないまま、篠原の手にすがりついた。

一樹の胸の奥が小さく痛んだ。それを払いのけるかのように何か言おうとしたが、声にはならなかった。革のソフトケースの取っ手を握りしめる。黙っているのは変だと思われる。何か言わなければ、何か。一樹は一人葛藤の中にいた。

「お…めで…とう」

ようやくそれだけの言葉を絞り出す。周りに聞こえたのだろうか。自信はなかった。

桃子はそれを聞くと、そっと目を閉じた。涙が一筋、頬を伝った。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2010 keik
itagawa All Rights Reserved

想いあふれて ～ No More Blues

ジャムズでは二人の新しい門出を祝福する声が響いていた。

シェフの前島は礼服からいつものコックコートに着替えて、張り切って調理場にこもっていたし、結香も広大も生き生きと、笑顔の人々の間を縫うように、グラスを配り歩いていた。

いつものジャムズに、いつもの客。いつもの喧噪、そして溢れる音楽。

違うのは主役の二人が、白一色に包まれていたことだけ。

誰もが笑顔だった。満面の笑みの花婿と、普段のクールな微笑みを浮かべる花嫁と。二人を知る誰もが、よかったね、と声をかけた。マスターの勇次は、多くの人のお祝いの声に頭を下げ続けていた。

ステージでは入れ替わり立ち替わり、常連のバンド連中がにぎやかなアップテンポのジャズを演奏していた。今日はお祝いだからね、小難しいモダンなんかやらないよ、ピアノの寺内がそう言いながら、デイキシースタイルを披露していた。

一樹がステージに上がる。

はやし声があちこちからかかって、いつそうにぎやかしさを増した。いつものとんでもなく速いテンポのスタンダードで決めてくるか、ハイノートでがんがん攻めてくるか。

皆の期待が高まる中、しかしリズム隊のメンバーたちが一人、また一人とステージから降りてきてしまった。

とうとう、一樹一人がステージに取り残された。

一樹はゆっくりリサングラスをかけ直すと、何も言わずに楽器を吹き出した。

ジョリヴェエのトランペットコンチェルト。

きつと誰にもわからないだろう、この曲が何という題名なのかも、作曲者が誰なのかも。

ただ、主役の二人と一樹を除いては。

今まで盛り上がっていた会場が、水を打たれたようにシーンとなった。

まるで場違いなクラシックのメロディーにとまどう表情の観客たちは、次第に一樹の奏でる美しい音色に引き込まれて、何も言わずに聴き入っていた。

一樹の演奏が終わっても、誰も何も言わなかった。一樹もまた、一言も発することなくステージを降りると、そのままドアを開けて出ていった。その背中を追いかけるように大きな拍手が会場を包んだ。そして、何事もなかったかのようにまた、ジャズらしい華やかな演奏が再開され、手拍子と口笛と、しゃべり声が戻ってきた。

耐えろ、一樹は自分自身に向かってそうつぶやいた。あと数時間、この場をやり過ぎせ。どんなに胸が苦しくとも思いがこみ上げてこようとも、決して表情に出すな。笑顔で二人を祝福すると決めたのだから。

灰皿の置いてある廊下は、今は誰もいなかった。幾分ほっとしながら一樹はタバコをくわえた。火をつけるでもなしにそのまま廊下の壁にもたれかかる。泣くな、大の男がそんなことで泣くんじゃない。タバコの端を噛み締める。こんなに強く噛んだらフィルターがダメになるだろうな、頭の片隅でそんな心配をする。

トランペットコンチエルトを吹く間、桃子はじっと一樹を見つめていた。それまで桃子は、目を合わせようとはしなかった。声を掛けることもできなかった。ただ吹いている時だけ、見つめ合った。暗いサングラスのせいで他の誰もが気づかなかっただろう。持ってきてよかった、一樹は細い支柱を指で押すと、眼鏡のずれを直した。かたん、どこかのドアが開く。一樹はあわててタバコに火をつけようとした。ライターがなかなか見つからない。焦ってポケットをまさぐる。ない。ケースの中から、ソフトケースを下ろそうとした時、一樹くん、と声を掛けられた。

篠原だった。

びくつとして一樹は声のする方を見やった。篠原がこちらに向かつて歩いてきた。手にはグラスを二つ持っている。その一つを一樹の方に差し出す。

「懐かしかったよ、一樹くんのジヨリヴェエ。二次予選で吹いたんだよね」

水割りを受け取りながら頷く。あれ以来、初めて吹いたクラシックだった。

「君に出会ってから六年、か。あんなに小さかった少年が今では立派なミュージシャンだ」

「篠原さんのおかげだ。篠原さんにあの日会わなかったら、おれは今こうして生きていなかった」

「……一つ聞いていいかな」

ためらいがちに篠原が口にする。訊こうか訊くまいか考えあぐねているような口調だった。

だが意を決したように、篠原は一樹に向き合った。

「君は桃子さんのこと、どう思っているの？」

「どう、って」

一樹は目をそらし、片方の頬だけで無理矢理笑った。

「桃子さんはおれの大事な姉さんだよ」

「そうじゃなくて……」

幾分いらだち気味に篠原が続ける。それ以上訊くな、何かを口走ってしまいそうになるじゃないか。取り返しのつかない何かを。一樹は心の中で叫んでいた。

「桃子さんも君のこと」

「桃子さんは……」

篠原が続けようとするのを大声で遮る。はっとしたようにお互いが黙った。

「桃子さんは篠原さんを選んだんだ。そうだろ？」

「……一樹くん。」

「幸せに、してあげてよ」

一瞬の沈黙。一樹がそつとサングラスをはずす。顔を上げて真っ直ぐ篠原を見た。もう大丈夫、桃子への思いはこれで全部終わりにできる、そう自分に言い聞かせる。

「ああ、約束するよ」

篠原が微笑む。

失わずにすんだ、篠原も桃子も。これで、いいんだ。

一樹は篠原の肩にもたれかかると、気づかれないように涙をぬぐった。

#エンディング

都心には珍しく人のまばらな公園の小高い芝生へ座り、一樹は革のソフトケースからそつと楽器を取り出した。

手のひらで温めるようにマウスピースを握り、唇に押し当てる。そしてそれを銀色のトランペットに差し込んだ。いったん膝の上に楽器を置くと、今度は黒いプロテクターを左手にはめる。

空が高い。

ゆるやかな風を頬に受けて、一樹は目を細めた。

革のベルトを楽器にくくりつけ、アンブッシュアを作っすうつと息を吸い込む。

ジャムズで聴いたあの曲を、擦り切れたレコードのノイズと共に聴いたトランペットのフレーズを、今は自分が吹いている。

『アイ・リメンバー・クリフォード』

柔らかく温かいそのメロディーを、優しく甘く、ささやくように心を込めて。

たとえこの先、何があろうとも、おれは吹き続けるだろう。音楽と共に生きることを選び、演奏し続けるだろう。たとえ何本の指が動かなくなるうと、命が尽き果てるまでは。

そしていつか、自分の音が誰かの心に届くまで。いつまでもいつま

でも、人々の心の中で響き続けるまで。

形に見えない愛もある。手に取ることのできない愛もある。不器用で伝わりにくい、もどかしいほど不格好な愛も。

今の自分に、その愛に気づけとはとても言えない。心の奥底にあってしまった空洞を埋める何かも、今は見つからない。

それでも、いい。

きつとこうやって奏で続けることで、おれは生きていける。

アイ・リメンバー・クリフォード。

僕はけっして、君を忘れない。

< F I N > (し)愛読ありがとう(し)ねい

ました)

北川 圭 Copyright? 2009 - 2010 keik

itagawa All Rights Reserved

想いあふれて ～ No More Blues (後書き)

ジャズ好きの方ならおわかりのように、副題をスタンダードジャズで揃えてみました。

音楽が聴こえてくるような物語になりますように。

一樹の音楽ストーリーはまだまだ続きますが、vol.1はこの辺で。

最後までお付き合いいただきまして、ありがとうございました。深く感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3038n/>

君を忘れない ~ I Remember Clifford ~ vol.1

2010年10月8日14時02分発行